IS(インフィニットストラトス)　返り血の眼帯

キャップびちゃ男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ（インフィニットストラトス）　返り血の眼帯

【Ｎコード】
Ｎ７９６２Ｓ

【作者名】
キャップびちゃ男

【あらすじ】
俺の人生は狂いに狂っていてもう狂いようが無いほどだったが、さらに狂ってしまった俺の人生。いきなり育て親からＩＳの適性度が良いと言われＩＳ学園に強制入学させられることになったのだが・・・

設定

オリキャラ設定

四死神（ししがみ）　血殺（ちさつ）

世界で二人目の男のＩＳ操縦者であり、千冬と同レベの力をもつ。
常にヘッドホンしているが、音漏れを防ぐため音量を低くしている。
紺色の髪は地毛だがいつも染めていると間違われている。右目に赤い眼帯をしている。

専用機

青竜…砲撃を得意としたＩＳで中長距離の武器が多い。　待機時は小指にはめるリングになる。

朱雀…８枚の翼で超高速で動く、翼はビットにもなる。　待機時は薬指にはめるリングになる。

白虎…近接戦闘を得意とした武器を所有している。　待機時は中指にはめるリングになる。

玄武…防御を特化したＩＳで武器によっては攻撃を跳ね返し相手への攻撃となる。　待機時は人差し指にはめるリングになる。

黄竜…青竜、朱雀、白虎、玄武の全ての武器を使えるが、展開して

いる時はシールドエネルギーを常に消費する。　待機時は親指にはめるリングになる。

設定（後書き）

設定的に有り得ないですよね。（笑）

初対面（前書き）

本編にはまだ入っていません。

初対面

４月、とうとうやってきてしまった入学式。

束「行ってらっしゃい～ちーくんだったら大丈ブイブイ」

俺の気持ちも知らないでそんな言葉を言うのは篠ノ之（しののたばね）束。ＩＳの生みの親だ

血殺「じゃあ、束さん行ってきます。ついたらメールしますね」

束「あっ、黄竜はまだ使わないでね」

黄竜なんて二度と使いたくないよ

血殺「わかりました」

場所が変わってＩＳ学園

血殺「結構早く着いたなぁ」

現在の時刻は八時丁度。かなり時間が余ってる

??「お前か？　四死神血殺は」

やってきたのは見覚えをない女性だ。しかし、かなり綺麗

血殺「はい、そうですけど……あなたは？」

千冬「私は織斑（おりむら）　千冬（ちふゆ）と言う。束から聞いているだろ？」

こいつが織斑千冬。

俺の大切な人を奪った人間

血殺「名前だけですけどね」

平常心で答えた

千冬「お前にはいろいろと聞きたいが、まずは場所を変えよう」

場所が変わって１ー１

千冬「まず、お前は何者だ？」

おっつ。そこからかよ

血殺「俺は束さんの義理の家族です」

まあ、束さんの友人なら別に良いか

千冬「どういう事だ？」

まったく内容を掴めてない様子

血殺「束さんは俺の育て親です。まあ、３、４年ぐらい前に拾われたんですけど」

千冬「一応聞くが、お前の家ぞ「家族の事は聞かないで下さい！」」

いきなり怒る俺に驚く千冬

血殺「すいません・・・でも、それだけは聞かないで下さい。あなたも自分の家族のことを根堀葉堀訊かれたくないでしょ？」

俺は冷たい声で言った。有り得ないほど冷たい声で

千冬「こちらもすまなかった。話はここまでにしよう。お前はこのままここにいろ」

血殺「わかりました」

千冬「では、また会おう」

この時俺は気付いた。やつが担任の教師だということに。

ＴＯ束さん

織斑千冬と話しました。やはり、憎いです

ｆｒｏｍ束さん

あっ、ちーちゃんと話したんだ。まあ、頑張って

はあ、自分は何もしてないと思ってるのか？　このバカは

血殺「俺はあんたも憎いんだよ。篠ノ之束」

初対面（後書き）

本文にもあったように、千冬と血殺は初対面です。
血殺の過去は今後の話に入れるつもりです。

次回は、本編へ突入します。

クラスで二人以外全員女子（前書き）

この話から本編です。
ほとんど変わります。
ご了承お願いします

クラスで二人以外全員女子

現在８時３０

その時、ドアが開いた。入って来たのは、ちっこいくせに大人の格好をしている人だった。見た感じ《無理やり子供が大人の真似をしました》って感じだ。

??「皆さんこんにちは、私は副担任の山田真耶です。一年間よろしくお願いします」

誰もしゃべらないのか、誰かしゃべってやれよ。

真耶「で、では、出席番号順に自己紹介をしてください」

あ～かったるい、寝よ。

千冬「おい四死神、起きろ」

千冬に呼ばれて目が覚めた。

血殺「・・・眠」

千冬「とっとと起きんか！」

刹那、出席名簿が振り下ろされた。

血殺「ふ～ん、良い振りだ。だけど、遅いね」

千冬「何？」

クラス中が静まり返った。なぜなら俺が出席名簿を弾いたため

血殺「まっ、いっか」

俺は席を立ち上がる

血殺「俺の名は四死神血殺。趣味はない。特技は読心術です。終わります」

千冬「まあ、いいか」

軽く呆れられている。まあ、仕方ないか

千冬「さあ、ＳＨＲは終わりだ。諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作を半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

それ、もはや命令じゃん！　まあ

千冬「それと、四死神」

血殺「はい、なんですか？」

俺には関係ないんだよなあ～。

千冬「お前はほとんど授業を受けるな。わかったな」

血殺「わかりました。授業中は寝てます」

しっかし、暇になっちまうな。先生、いじれないし

千冬「それと先生はいじるなよ」

血殺「わ、わかってますよ」

千冬「ふん、ならいい」

な、なんて読心術なんだ。

1、2時間目はとばします。ご了承下さい。

千冬「おい、四死神起きろ」

なんとも目覚めの悪い時計だ。

血殺「りょ、了解」

ヤバい。疲れが溜まってる。

千冬「返事は《はい》だ。わかったな」
血殺「はい、わかりました」

重そうに俺は体を起き上げた。

千冬「今からクラス代表を決める。自薦他薦は問わない。選ばれたら一年間はそいつがクラス代表となる」

おうおう、面倒くさそうだな。

女子Ａ「織斑君を推薦しま～す」
女子Ｃ「私もそれがいいと思いまーす」
一夏「お、俺？」

まあ、俺からしたら誰でもいいや。

一夏「じゃあ、俺は四死神　血殺を推薦します」

俺に振ってきたか！なに、「やったぜ」みたいな顔してんだよ！
ポケ○ンゲットだぜ！か！？てめぇは！
まあ

血殺「・・・別にいいですけど、バックアップとして誰か使える人がいるとうれし「なっとくいきませんわっ」

誰だ？　今さぁ、俺が話してたのにさ

セシリア「このイギリス代表候補生のセシリア・オルコットに一年間そのような屈辱を味わえというのですか！？」

話を遮ったのは、金髪のロールがかかった少女。かなり高貴なオーラがある

セシリア「だいたい男がクラス代表なんていい恥さらしですわ」

んだと！？

血殺「代表候補生ごときでいきがるなよ！」

セシリアは俺をギロッと睨めつけてきた

セシリア「あなた何様なんですの！？」

いやいや、お前こそ何様だよ！

一夏「なあ血殺、代表候補生ってなんだ？」

ところどころから椅子からずっこける音が鳴り響く。

セシリア「あなた。そんなことも知らないですの？」

血殺「いいか織斑、代表候補生っていうのは、漢字そのままの意味だ。まあ、簡単に言うとエリートだ」

本当に、織斑の頭の中はだめだな。エリートって言って、やっと納得してるし

セシリア「そう、エリートなのですわ。だから後進的な国の猿と一緒にされたく、ありませんわ」

猿ねぇ

血殺「話を戻すが、自分が何者なんて言わないぜ。言う奴は馬鹿なんだよ。特にお前みたいな奴」

セシリア「・・・・・」

セシリアは何も言わない。怒りを溜めているのだろうか？

けっこう、顔は引きつっているし、たぶんそうだろう

一夏「そういえば、文化で後進的って言ったけど、イギリスは飯が後進的で不味いものばっかじゃねーか」

セシリアのでこに血管浮いてる。そろそろヤバい頃だろう。だが、

血殺「織斑とかぶるけど、文化が後進的？その文化が後進的な国の兵器に勝てなかった国はなんなんだ？

あっ、わかった。屍か！考えられない。ただのタンパク質の塊か！」

痛ぶるぜ。

セシリア「あ、あなた達、私の祖国を侮辱しますの？」

セシリアはバンッ！と机を叩く。

痛くはないのだろうか？

セシリア「決闘ですわ」

一夏「いいぜ、四の五の言うより話が早い。」「血殺もそれでいいよな？」

血殺「別に構わない。それから、やるんだったら今日やろう」

今の言葉のどこが面白かったのだろうか？

セシリアは笑っている。

セシリア「ふっ、何を言ってますの？それとも寝ぼけてるのかしら？ＩＳが無ければ戦えませんことよ。そんな事も知らないのかしら？」「まあ、わたくしはあなたと違って代表候補生なので、専用機はもう持ってますけどね」

なるほど、セシリアは俺が専用機を持っていないと思ったのか

血殺「ああ、言ってなかったな。俺も専用機を持ってるから大丈夫だ」

女子Ｂ「なんで、四死神君が専用機をもっているの？」

血殺「話すと長くなるから言わない」

女子「「「え～」」」

女子たちの五月蝿い声が教室中に響き渡る。

正直に言うとイラつく

千冬「うるさいぞ。しかし、話は纏まったな。四死神とオルコットは、今日空いている第３アリーナを使え」「次の織斑とオルコットは再来週の月曜日、同じく第３アリーナでいいな」

おっと、大切な事を忘れてた

血殺「ハンデはどのくらいにしておく？」

セシリア「あら、いきなりお願いかしら？」

セシリアは勝ち誇った顔をする。なぜだろう？
まっ、こういう時こその先生でしょ

血殺「織斑先生、どのくらいがいいでしょうか？」
千冬「2分でいいんじゃないか？」
血殺「わかりました」

俺は再びセシリアの方へ向き直る

血殺「じゃあ2分、2分でお前を倒したら俺の勝ち、守りきったらお前の勝ちで」

さっきまでの顔がウソのような顔をセシリアはし始める

セシリア「馬鹿にしてますの！？」
血殺「あたり前だろ。じゃなきゃ、こんな事言わない」
セシリア「わかりましたわ。コテンパンにしてさしあげますわ」

完膚無きまでに叩きのめす。セシリアはそんな顔をしていた

俺は授業中に教室を退室した。

屋上

??「あの女との試合、私に殺らして」
血殺「無理を言うな白虎」
白虎「なんで、ああいう女嫌いなの、だから殺らして」

なんでこんなに怒ってんだ？　白虎の野郎は

血殺「今回は朱雀で出る。いいな、朱雀」
朱雀「わかったわ」
??「また、朱雀なの？　たまには、ｍｅに殺らして」
??「あっ、僕も殺りたい」

おいおい、戦るのやの字が違うぞ！

血殺「お前らもわがまま言うな、青龍に玄武。それに、俺は人を殺めるつもりはない」
青龍「わかった。でも、次出る時はｍｅだからね」
玄武「その時は僕と白虎も出るから」
血殺「わかった。それでいいなみんな」
朱雀「わかったわ」
白虎「仕方ないわね」
青龍「了解」
玄武「早めにお願い」

四人がしぶしぶ了承してくれた。
かなり珍しいけど

血殺「それから朱雀、暴走だけはするなよ」
朱雀「保証は出来ないわ。けど、出来るだけ抑えるから」
血殺「わかった。じゃあ、コンタクトを終了す

腹減ったな。飯食いに行こ

食堂

血殺「あれ？織斑じゃん」

もう昼食の時間だったのか。

一夏「よう、血殺！お前も飯か？」
血殺「ああ、織斑もか？」
一夏「織斑じゃあなくて一夏って読んでくれ」
血殺「確かに織斑先生とかぶるもんな」
一夏「だから、大抵の友達はみんな一夏っていうんだ」

血殺「じゃあ、一夏」「前の人誰？」

前方にムスッとした。ポニーテールの似合った女子がいた。

一夏「あー、コイツ？」「名前は「篠ノ之　箒だ。よろしく」

一夏の声を遮ってしゃべったよ。この女

血殺「篠ノ之ってことは束さんの妹だよね」

箒「・・・・・」

箒は束と言うと黙り込んでしまった

地雷踏んだ？

一夏「箒の前で束さんの話は控えた方がいい。殺されるぞ」

姉妹の仲悪いんだ。俺達みたい・・・

その後、俺たちは飯を食い。一夏、箒は教室へ行き、俺はまた屋上へ向かい時間を潰していた。

血殺「そろそろ4時だな。さて行くか、朱雀」
朱雀「わかったわ。私はあなたのためにあるのだから」
血殺「朱雀展開！」

俺は朱色の光に包まれる

血殺「やっぱり、朱雀が一番ピンと来るな」

朱雀展開時のフレームは朱色で、８つの翼はビットになり１つにつき１０のビットがでる。翼はビット以外に、剣になり八刀流になる

血殺「じゃあ行くか」

第三アリーナ

セシリア「遅かったですわね。逃げ出したのかと思いましたわ」
血殺「まだ、五分前だろ。馬鹿だろ！お前やっぱり馬鹿だろ！」

俺がわざわざイラつくように言ったら案の定、セシリアはイラついた

セシリア「わたくしを侮辱しましたわね！許しませんわ！」

千冬「それでは、今より試合を始めるカウントダウンを開始する」

１０
９

１　２　３　４　５　６　７　８

千冬「それでは、試合開始！」

クラスで二人以外全員女子（後書き）

感想など、書いていただけるとうれしいです。

クラス代表決定戦（前書き）

結構雑なのにまあまあですね。

クラス代表決定戦

千冬「試合開始！」

開始直後、セシリアの銃《スターライトｍｋ？》からビームが走る。
その後はセシリアの銃の連射によって防戦一方のまま、一分がたった。

仕込みは完了した。あとは、打つだけ

血殺「ふう、疲れた」
セシリア「あら、もう終わりですの？あんなに大口を叩いておいて」
勝ち誇った顔をするセシリア。

血殺「ああ、終わりだ。・・・お前の敗北でな！」
血殺「飛べ、”レッドライズ“」

刹那、セシリアへ四方八方からビットが出現しビームが発射された。

セシリア「なんですの！？」

ビームの嵐から逃れようとするセシリア。が、

血殺「これで終わりだ」

八刀流　参の舞　鬼殺死

ある剣術でセシリアを襲う

千冬「勝者！四死神　血殺！」
血殺「あーあ、疲れた。帰って寝よ」
セシリア「待ちなさい」

気にくわない顔をしているセシリアに俺は呼び止められる

血殺「ん？なんだ？」
セシリア「あなた。さっきの剣術なんですの！？」

セシリアはかなり興味深そうに聞いてきた

血殺「あ～、”鬼殺死“《おにごろし》ね。八刀流の時のみ出来る技で俺の間合いに入ったものを八つ裂きにする技だ」
セシリア「しかし、あなた達を認めた訳ではありませんわ」

随分嫌われたものだな

血殺「そうかい。別に俺は気にしてない」

帰ろうとした時だった。

「！！なっ！こんな時にぃ」

暴走の前触れだ。

セシリア「どうしましたの！？」

セシリアは俺に駆け寄ってきた。

血殺「殺す。あんたを殺す！」

俺じゃない俺は今までの面影が無い声でセシリアに言った。

セシリア「あなた誰ですの！？」

朱雀「私は朱雀よ。よろしくね。まあ、自己紹介しても意味ないけどね。どうせ死ぬのだから！」

セシリア「なっ、朱雀って確かあの男のＩＳの名前ですわよね！？」

朱雀は不吉な笑い声をした後に答えた。

朱雀「そうよ、私は彼のＩＳよ」

セシリア「では、なぜあなたがその体の中にいるのですか？」

朱雀「あんたに教える義理はないわ。さようなら」

朱雀は剣を構えた。

セシリアは目を瞑った。

朱雀がセシリアを殺ろうとした瞬間、朱雀は地面に崩れた

朱雀「あああああああっ！！」

セシリア「？？？？」

朱雀は頭を抑え始めた。

朱雀「ごめんなさい。ごめんなさい。血殺、かってなことしてごめんなさい」

朱雀は数分もがき、動かなくなった。

そして、起き上がった。

セシリア「朱雀さん、大丈夫ですの？」
血殺「俺だ。血殺の方だ。悪かったなオルコット」
セシリア「いえ、大丈夫ですわ」
血殺「じゃあ、俺は辞退してくるか。またなオルコット」
俺は手を振りながら第三アリーナを出ていく。

廊下

血殺『朱雀。お前わざとやっただろ！』
俺は軽くキレ気味だ。
理由は簡単だ。まだ、その時ではないからだ
朱雀『ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい』
血殺『わかった。もう謝るな』
正直、呆れているからどうでも良い
白虎『血殺って、朱雀に甘過ぎだよ』
血殺『話しは、後で聞くから黙っていろ』

数十分

血殺「あっ、いたいた。山田先生～」
真耶「どうしたの？、四死神君」
血殺「俺、クラス代表辞退するって織斑先生に言っておいて下さい。あと、俺の部屋どこですか！？」
真耶「わかりました。それと部屋は１０２４です」
血殺「どうも。それじゃあ、さようなら」

早歩きでその場を去る

血殺「えっと。１０２４は・・・ここか！」
血殺「結構広いって当たり前か、見た感じ２人部屋だし」

だけど、部屋には誰もいないからたぶん一人だろう。
まあ、好都合だからいいや

血殺「じゃあ、出すぞ」
白虎「はーい」
朱雀「うん」
青龍「了解」
玄武「早くして～」

俺のＩＳは、大切な人の魂が入っているためＩＳを元に実体化する事ができる

白虎「ぷはっ。あー、窮屈だった」
朱雀「汗かいた。シャワー浴びたい」
青龍「ｍｅ、お腹空いた」
玄武「眠い」
血殺「あのなぁ、お前ら服着ろ」

ＩＳだから、もちろん全裸だ。

白虎「持ってない」
朱雀「なんで？」
青龍「だるい」
玄武「めんどい」
血殺「まっ、いっか。どのみち授業受けないし」「今日は寝よ。お前らはその辺で寝てろよ」

そういって、俺は眠りにつく。

クラス代表決定戦（後書き）

今回の話を見て気付いたかもしれませんが、白虎、朱雀、青龍、玄武は全員女設定です。話しがめちゃくちゃですいません。

過去編　～永遠に～（前書き）

血殺がＩＳを手に入れる過去話です。

過去編　～永遠に～

なぜこうなったのだろう

どうして、間違ってしまったのだろう

こんなの、俺は求めていないのに

何もわからない。答えが出ない

あいつのせいだ。あいつが全ての元凶だ

殺したい。殺したい。殺したい

でも、殺せない

なぜかって?それは・・・

1ヶ月前

血殺「やっべえ。遅刻する。束さんなんで起こしてくれないんだよ！」

束「ちーくん、そろそろ自分で起きようよ」

８：３０分までに登校なのだが、現在、８：２０分なのだ

血殺「遅刻するからもうでるね」
束「行ってらっしゃーい」
血殺「行ってきまーす」

急がねーとな

学校

血殺「はあ、はあ、間に合ったぁ」

全力前進して頑張って間に合った感じだ。

俺が学校に着くなり、二人の女子がやってきた。

？？「おはよう。血殺」

？？「おはよー」
血殺「チース、華音に花蓮」

俺の数少ない友達のロングヘヤーの神崎華音（かんざきかのん）にロングヘヤーに二つの触角がある神崎花蓮（かんざきかれん）だ。
二人は一卵性の双子だから、見分け方が難しい

華音「また寝坊したの？馬鹿だねー血殺は」
血殺「うっせーよ、華音」

ちなみに

華音「何？あんた八つ裂きにされたいの？私の白虎に」

二人とも専用機持ちだ。

花蓮「おねーちゃん。止めてよ、そういうの」
華音「わかったわよ。あんたの彼氏は殺さないであげる」
花蓮「おねーちゃん。私の朱雀に串刺しされたい！？」

花蓮はジョークが効かない。だから、勘違いが多い。
華音の方はけっこうテキトーだからクラスではお馬鹿キャラ。

血殺「おいお前ら、先生に怒られても知らねーぞ」

二人のおふざけが気になってか。もう二人が近づいて来た

？？「２人とも、喧嘩止めなよ」
？？「大丈夫よ。いつもの事でしょ」
血殺「よう、千鶴に有華。お前ら何時も一緒にいるな」

魅永千鶴と藤澤有華だ。

千鶴はショートヘヤーが主だが、たまに髪を伸ばしてる時もある

有華はポニーテールだけど、全部を結んではいない

千鶴「まあね」

有華「えっ、そうかな？」

俺の連んでるいつものメンバーが全員揃うと

先生「そこの5人とっとと座れ！」

血殺、花蓮、華音、千鶴、有華「「「「「はーい」」」」」

必ず先生に怒られる

放課後

血殺「あー、やっと終わったー」

俺はいつものように花蓮と帰っている

花蓮「ねー血殺、今日暇？？」

血殺「ああ、暇だけど」

いつもと違うのは、千鶴と有華がいるということだ

花蓮「じゃあ、家に来ない？技を見て欲しいんだ」

血殺「ああ、良いぜ」

花蓮は近接戦闘を好んでやるから、たまに技を見てやることがある

千鶴「ねー花蓮、私も行っていい？」

有華「あっ、私も行きたい」

花蓮「いいよ。２人がいれば訓練も出来るしね」

千鶴と有華も一応、専用機持ちなんだが、使ってるところはあまり見たことがない

俺達はまだ気付かなかった。これがみんなを殺すことになるなんて

花蓮の家

華音「あら花蓮、珍しいわね。あんたがここに来るなんて」

そこには、白虎を展開した華音がいた

花蓮「別にいいでしょ。おねーちゃんには関係ない」

華音「どうせ、血殺が来てるんでしょ」

血殺「よくわかったな、華音」

華音のやつ、けっこう白虎が板についてきたな

千鶴「本当だよね」

有華「当たり前でしょ。だって華音は「有華、千鶴。あんた達のことも言うわよ」

なんで、華音のやつ怒ってんだ?

花蓮「そんなことより早くやろ。ちょうど4人いるしタッグでいいでしょ?」

千鶴「じゃあ、私と有華対華音と花蓮で」

有華「わかった」

そういって有華は玄武、千鶴は青龍、花蓮は朱雀を展開した。

華音「じゃあ、始めよ」

血殺「俺、その辺見てていい?」

花蓮「別にいいわよ」
血殺「じゃあ、後で結果教えてくれ」

花蓮達４人は親が小さい頃に亡くなっている。それに、花蓮と華音の両親は大富豪だかなんだか

そのせいか４人でいること方が多い

血殺「！！　なんだ？あれ？」

ＩＳだよな？でも男には使えないって束さんが言ってたな

血殺「・・・触っても大丈夫だよな」

そこには黄色のＩＳがあった。俺はそれに触った瞬間、俺は黄色い光に包まれた

血殺「！！　うあー！！」

花蓮、華音、千鶴、有華「！！」

そこには、黄色のＩＳを展開した俺がいた。

華音「なんで、血殺が黄竜を動かしてんの？」
花蓮「血殺。ねえ血殺。返事をして血殺」

おそらく気を失っている。と思った千鶴たち

千鶴「ダメみたいね。」
有華「私達で止めましょ」

華音「じゃあ、行くわよ！！」

四機が一気に黄色いＩＳに突っ込む

血殺「何が起きたんだ？なんでみんなが」

俺の眼に移ったのは、体が真っ赤に染まり、まったく動かなくなった華音たち。

華音「ち……血殺……直った…みたい……ね」

途切れ途切れで話し掛けてくる華音。

血殺「華音！お前大丈夫なのか？　今すぐ救急車を！」

俺は携帯を取り出したが、華音が首を振って「止めて」と目で訴えている

華音「もう……私達は死ぬ…だから……これだけは…聞い……て…欲しい」

千鶴「血殺……私…達は…あなたの……ことが…好…きだっ……た」

えっ！？

有華「でも…花蓮……とあな…たを見て……たらそん…なこと言え…なかった」

華音「だから…お願…いがある……の」

血殺「千鶴！有華！」

俺の目から大量の涙が溢れ出た

華音「だから……私…達の…ＩＳを…血殺…が……使って欲し……い」

血殺「華音、お前らしくないこと言うなよ！」

花蓮「お……願い…私達……のお願……いを聞い…てくれな…

……い？」
血殺「わかった」

血殺はすぐに束に電話した

束「ちーくん。どうしたの？」
血殺「今言う所にすぐ来てください」
束「うん！いいよー」

早く来てくれよ！

束「どうしたの？ちーくん」

束さんがやってきた。と言うより降ってきた

血殺「俺、ＩＳ動かしちゃったんです。だからこの４つのＩＳを俺だけが使えるようにしてください」
束「うん。いいよー。じゃあ、少しあっち行ってて」

束さん、驚かないんだな。もしかして・・・・・まさかな

数分が経った

束「ちーくん。終わったよーおまけ付けて置いたから」

血殺「・・・おまけってなんですか？」

俺は不思議そうに聞いた

束「ひ・み・つ」

ふざけた返事が返ってきた

血殺「束さん。一つ聞いていいですか？」

束「何かな？」

俺は恐る恐る聞いた

血殺「あのＩＳを俺にも使えるようにしましたよね？」

束「・・・うん、私が仕込んで置いた」

やっぱり。やっぱりあんたか！！

血殺「何故、何故そんなことしたんですか！」

束「・・・・・」

血殺「答えろよ！　篠ノ之束！」

激怒した。初めて束さんに激怒した

束「ちーくんがちゃんとＩＳを使えるかどうか知りたかったの」

ちゃ……ちゃん……と？

血殺「ちゃんと？ちゃんととはどういうことだ！？」

束「ちーくんは前にＩＳを使っちゃったことがあるの、でも、まだその頃は幼かったから完璧には無理だったんだけど、今だったら使えるかなって思ってね」

血殺「そんな、そんなことの為に・・・」

俺は地面に崩れ落ちた。しかし

束さんは腰に手をあて、笑っている

ふざけやがって！

束「そんなこととは失礼だなぁ。私にとっては大切なことなんだよ？」

血殺「もういい。あんたがどういう奴だかわかった」

こいつを殺したい！　絶対に殺す！

束「私が嫌ならここに行きなよ」

血殺「あんたの指図は受けない！」

束「そっかぁ、残念だな～。ちーくんが殺したいと思う人がいるのに」

血殺「何！？」

俺が殺したい相手、織斑千冬

束「別に私には関係ないからいいんだけど。どうする？」

血殺「くっ、わかった行こう。」

束「じゃあさっそく「だけど、俺のことは公表しないでくれ」
ここで公表させられたら最悪だからな
束「ちーくんのお願いだから聞いてあげよう」
血殺「ありがとうございます」
束「じゃあさっそく、入学手続きしておくね」
血殺「はい、わかりました」
俺はその後、死体を処理して家に帰った。
その後、俺は自分に誓った。黄竜は二度と使わないと

過去編　～永遠に～（後書き）

いかがだったでしょうか？
これで四死神　血殺のＩＳの過去編は終わりです。
次回からまた本編へ戻ります。

転校生は元クラスメート！？＋秘密の仕事（前書き）

１話から話はむちゃくちゃだったので、ここで改めて言いまが、今後もむちゃくちゃで通します。

俺にはときどき思うことがある。

血殺「はあ、また長く寝過ぎた。まあいいや、たまには授業受けよ」

教室

一夏「よう、血殺。久しぶりだなぁ」
血殺「今までずっと寝てたからな」
一夏「ずっとか！？すげーな」

一度ビックリしてすぐに顔が直る一夏。

一夏は面白い性格をしているな

血殺「まあな」
一夏「そういえば、今日転校生が来るらしいぜ」
血殺「ふぇー。どんな奴なんだ？？」

少し気になった。転校してくるのは女子とわかっているのに

一夏「代表候補生らしいぜ」

平然と言う

血殺「ふ～ん。まっ頑張れ、お前ならたぶん大丈夫なはずだ。今のところ1組と4組しか専用機持ちいないからな」
??「その情報、古いよ」

声の持ち主は俺に言ったのだろう。

つーか、この声は確か

??「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝出来ないから」
一夏「鈴?お前、鈴か?」

あ～、そうだ。　凰鈴音だ

鈴「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音(ファン・リンイン)。今日は宣戦布告に来たってわけ」
一夏「何格好付けてるんだ?すげぇ似合わないぞ」

鈴は腰に手をあて、かなり気取っている

鈴「んなっ!?なんてこと言うのよ、あんたは!」
血殺「久しぶりだな。鈴」
鈴「血殺!なんであんたがここにいるのよ!?」

喜びの顔から一転、見たくない物を見た顔をしている

血殺「動かせるからに決まってんだろ」
一夏「お前ら、知り合いなのか?」

一夏が不意に聞いてきた。

血殺「知り合いなんて温いね」
鈴「あたしと血殺は腐れ縁よ」
一夏「腐れ縁！？」

予想外の回答に少し驚いた様子

血殺「俺らはやる事成す事全てかみ合わなかったんだ」
鈴「しかも、小１年から小４の終わりまで同じクラスで席が隣になった回数実に１８回！もう、最悪だったわよ」

鈴は両手を挙げ、首を振りお手上げポーズをとる。

全然可愛くない

血殺「まったくだ！」
？？「おい」
鈴「何よ！？」
バシンッ！

そこには、出席簿を持った千冬が立っていた。

千冬「もうＳＨＲの時間だ。教室に戻れ」
鈴「ち、千冬さん・・・」

鈴の顔が引きつっている

千冬「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、そして入り口を塞ぐな。邪魔だ」

鈴「す、すみません・・・」

見た感じ、織斑先生のこと苦手だな

鈴「またあとで来るからね！逃げないでよ、一夏！」

千冬「さっさと戻れ」

鈴「は、はいっ」

ゴキブリのようにさっさとクラスへ帰る鈴

血殺「やっと授業終わったぜ」

一夏「血殺はずっと寝てただろ」

一夏はハアとため息をつく

血殺「そんな事より早く飯食いに行こうぜ」

一夏「ああ、そうだな。箒、セシリア飯食いに行こうぜ」

箒「ま、まあお前がそう言うなら、いいだろう」

セシリア「そ、そうですわね。行って差し上げないことはなくってよ」

どっちなんだ？

一夏達と他に数名のクラスメートを連れて、ぞろぞろと学食に向かった。移動中に俺は箒とセシリアにこんなことを聞いていた。

血殺「箒とセシリアって一夏のこと好きなのか？」
箒「な、何を言っているのだ！」
セシリア「そうですわ。何を言っているのかしら」

二人はかなり動揺している。
まっ、隠しても無駄なんだけどね

血殺「ふ～ん。そっかそっか、2人は一夏のことが好きか～。」
箒「おい、四死神！」
セシリア「四死神さん！」

照れ隠しなのか、よくわからないが、二人とも確かなのは顔が真っ赤だ。

てか

血殺「名前で呼んでくれ四死神は偽名だからな。おっ、着いたぜ」
鈴「待ってたわよ。一夏」

着くなり鈴が仁王立ちしている

一夏「まあ、とりあえずどいてくれ。食券出せないし、通行の邪魔だぞ」
鈴「う、うるさいわね。わかってるわよ」

鈴が手で持っているお盆の上でラーメンが鎮座している。

血殺、一夏「「のびるぞ」」
鈴「う、うるさいわね。あんた達は！わかってるわよ」

一夏と俺はとりあえず食券をおばちゃんに渡す。

一夏「それにしても久しぶりだな、丸一年ぶりになるのか。元気してたか？」
鈴「げ、元気にしてたわよ。あんたこそ、怪我病気しなさいよ」
一夏「どういう希望だよ、そりゃ」

困ったご様子だ

血殺「そういえば鈴、なんで急に転校して来たんだ？」
鈴「そ、それは・・・」

言葉を詰まらせる鈴

血殺「？？・・・！」

まさか、鈴も一夏のことが！？

箒「あー、ゴホンゴホン」

わざとらしい咳払いをする箒に続いてセシリアが言った

セシリア「ンンンッ！一夏さん？血殺さん？注文の品、出来てましてよ？」

品物を貰う一夏と俺

一夏「向こうのテーブルが空いているな。行こうぜ」

一夏はお盆に乗っている日替わり定食の鯖の塩焼きを持ちながら歩き始める。

一夏「鈴、いつ日本に帰って来たんだ?おばさん元気か?いつ代表候補生になったんだ?」

鈴「質問ばっかしないでよ。あんたこそ、なにＩＳ使ってんのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

血殺「てか、お前ら仲良いな。鈴はたいていの男子のこと嫌うのに」

本当のことだ。

鈴は男子と普通はあまり話さない。俺も例外ではない

鈴「わ、私は偉そうにする奴が嫌いなだけよ」

血殺「俺は偉そうにしてなかったけど嫌われたぜ」

鈴「あんたは勘にさわるしゃべり方だったから嫌いなの」

血殺「そ、そうなのか」

俺の口調、そんなにイラつくかなぁ

まあ、今後直せばいいや

箒「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

セシリア「そうですわ!一夏さん、まさかこちらの方と付き合ってらっしゃるの!?」

箒とセシリアが棘のあるいい方で一夏に聞いた。

鈴「べ、べべ、別に私は付き合ってる訳じゃ・・・」

一夏「そうだぞ。なんでそんな話になるんだ。ただの幼なじみだよ」
血殺「箒、セシリア　こんな奴が女と付き合えると思うか？他人の気持ちにさえわからんこいつが」
一夏「な、なんだよそれ」

心当たりがありませんって感じで言ってくる

血殺「本当のことを言っているだけだ」
箒「一夏、幼なじみとはどういうことだ!？」
一夏「あー、えっとだな。・・・・・・」

一夏大変だなぁ、知らず知らずのうちに女にモテてるからなぁ

一夏「・・・から、会うのは1年ちょっとぶりだな」

プルプル、プルプル

俺の携帯電話が鳴った

血殺「もすもす、お前から電話して来るなんて珍しいな。えっ？今からか？　どうだろな。　わかった1時半でいいな？　じゃあまたな」

プツ

一夏「誰からだ？」
血殺「知り合いから」
一夏「出掛けるのか？」
血殺「ああ、2、3週間ぐらいかな」
一夏「気をつけろよ」

血殺「ああ、わかってる」
俺は食事を済ませ待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所

??「早かったわね」
血殺「あんたもな」

電話の相手は薄い金色の髪をした女性。
仕事仲間なのだが、まだ仲間ではない

??「今回の目標はイギリスの第3世代型のＩＳよ」
血殺「誰が乗るんだ？」
??「あの子よ」

俺の頭には一瞬でその人物の顔が出てきた。

血殺「ああ、あの憎らしい顔か」
??「仕方ないわ。あの子だけまだ持っていないもの」
血殺「わかった。回収するだけだな」
??「ええ」

仕事仲間の女性は短く答えた

血殺「報酬は？」
？？「成功したら２００、失敗しても１００でどう？」
報酬はいつも万単位で執り行われるからこちらからすればかなり収入は良い。

血殺「わかった。じゃあ行ってくる」
？？「どのくらいで帰れる？」
血殺「ざっと2週間ぐらいだな。観光もしたいし」
？？「そう、じゃあ行ってらっしゃい」
血殺「ああ、行ってくる。“次元加速”《ディメンションブースト》」

イギリスに着いてから十日後の未明

イギリス上空

血殺「行くぞ、青竜、玄武」
青竜「りょーかい」
玄武「あいよ」
血殺「白虎は常に準備をしておけ」
白虎「わかったわ」
血殺「玄武をミラージュモードで展開」

俺は玄武を展開していくにつれ見えなくなっていく。

玄武「正常に動いてるよ」
血殺「じゃあ今から突入する。隠密で行動するからみんなしゃべる時はコンタクトで話すようにしろよ」

コンタクトは自分の言葉を声に出さずに直接相手の頭に送ること。超音波とよく似ているが、少し違う。

玄武「わかった」
青竜「りょーかい」
白虎「わかったわ」
血殺「じゃあ、行くぞ！」

研究所内部

潜入から約二十四分

血殺『白虎、今どこだ？』
白虎『第2格納庫、私たちが向かうのは第４格納庫よ』
血殺『それはどの辺にある？』
白虎『４つ下の階よ』
血殺『わかった』

第四格納庫

血殺『ここか？』

白虎『そうよ』

誰もいない。今は無人のようだ

玄武『目標ってあれじゃない？』

玄武の目線にはセシリアのブルー・ティアーズによく似た機体があった

血殺『どうやらそうみたいだ』

青竜『目標の名前は？』

血殺『《サイレント・ゼフィルス》ってやつだ』

俺は目標に接近し、データを読み込む

玄武『合ってるね』

血殺『回収するぞ』

俺は右目の眼帯を外す。

白虎『目痛くないの？』

血殺『仕方がないんだよ』

白虎『あんたの目だから、どうでもいいけど』

数秒後、サイレント・ゼフィルスが俺の眼に引き込まれる

血殺『回収は終わったから帰投するぞ』

イギリス上空

血殺「”次元加速“！」

あるホテル

血殺「帰ったぞ」

？？「あら、早かったわね」

血殺「五月蝿い奴らが出て来なかったからな」

五月蝿い奴らとは研究施設の奴らだ

？？「ふ～ん。じゃあ、目標を渡して」

血殺「お前も報酬を渡せよ」

？？「これでしょ」

女性は大量の何かが入った鞄を俺に渡す

血殺「じゃあ、約束の品をだすぞ」

サイレント・ゼフィルスが俺の眼から出現する

??「ありがと」

血殺「まじで、目がいてぇ！」

??「血が出るかもね。血殺だけに」

女性は笑いながら言うが、実際マジで血が出ている

血殺「珍しいなあんたがそんな事言うなんて」

??「そういう時もあるのよ」

血殺「じゃあ、俺帰るから。またな」

転校生は元クラスメート！？＋秘密の仕事（後書き）

本編の内容が全く無く申し訳ありません。

誤字、脱字があった場所教えていただけると恐縮です。

朱雀の台詞はわざと書きませんでした。

青竜、玄武、白虎の口調はわざとおかしくさせました。

いろいろと申し訳ありませんでした。

決戦！クラス対抗戦（前書き）

実際の戦闘シーンはほとんど出ません。

決戦！クラス対抗戦

5月

帰って来たら世界が変わっていた。
ていう程でもないけど

血殺「いったい、何が起きたんだ?」

自分に問いかけても出るわけがない。

鈴と一夏は何で喧嘩してるんだ?そして

自分の部屋をもう一度見直した。そこには、1人の女子が寝ていた。

血殺「誰だ?この人?」

その人はパジャマ姿で寝ている為、どこのどいつだかわからない状況であった。

同じクラスの人ではないな

血殺「先生呼ぼ」

俺が目を離した瞬間、俺はうつぶせの状態で倒れた。

血殺「何なんだよ!」
??「あはは。困っちゃって可愛いねー」

女子は俺に馬乗りしているから、息がし辛い。

つーか！

血殺「重い！あんたいったい誰なんだよ！」

？？「私？自分が何者なのかは言わない。言う奴は馬鹿なんだよ。だっけ？」

女子は笑顔でその言葉を言ってきた。

血殺「そうだな、それなら！」

俺は体を反転させ腹筋を使い乗りかかるようにして相手を押し倒した。

？？「あら、強引ね。でもそういうのおねーさん好きよ」

血殺「あんた、どこの人？」

馬乗りの状態で問いかけた。

？？「この学校の生徒よ」

血殺「じゃあ、あんたは何者？」

？？「さっきも言った筈よ」

血殺「そうか。それは残念だ。あまり女性にこういうことはしたくないのだが仕方ない」

両足で相手の両腕を押さえ、左手で相手の頭を押さえながら、右手で腰に付いているホルダーからサバイバルナイフを出し手にする。

??「いったい、それで何をする気かな?」

女子は平然とした顔で聞いてきた。

血殺「さあ?何でしょう?」

俺はナイフを女子の首筋に近づけた

??「人を殺めることに迷いの無い目をしているわね。四死神血殺君」

これじゃあ埒があかないな

血殺「質問を変えよう。俺に何の用?」

??「これを渡しに来たのよ」

女子が渡して来たのは、何かの腕章だった。

血殺「俺にこれをやれと言いたいのか?」

??「そういうことよ」

血殺「考えておく。だからもう帰っくれ」

俺は女子から離れたが、女子は寝転がったまま足をバタつかせながら静かに騒いだ。

??「え〜」

血殺「じゃあ、知らん。先生に怒られてもな」

??「はいはい」「じゃあね」

血殺「・・・・・」

バタン

血殺「疲れた。寝よ」

いろいろありすぎて疲れたな

試合当日

第2アリーナ第1回戦。組み合わせは一夏と鈴だった。

血殺「まあ、頑張れ」

一夏「ああ、負けない程度に頑張るさ」「じゃあ、行ってくる」

試合が始まった。俺は一夏を送った後、校内のテレビ中継がやってる所まで走って行った。

俺が着いた時にはもう試合は鈴の一方的有利な試合なっていた。

その時

玄武『血殺！　誰かが僕のフィールドを突破したみたい』

血殺『何！？』

玄武のフィールドはドーム型のバリアになっていて、大抵の攻撃は防げる代物だ。

白虎『血殺、出ましょ。みんなに危険が及ぶわ』
血殺『わかった。朱雀のウィング、白虎の両手、玄武の両腕と両足、青竜の両肩と腰を展開！』

橙、白、緑、青の４つの光に包まれる。

血殺「行くぞ！朱雀！」
朱雀「ええ」
血殺「”次元加速“！」

アリーナ外

玄武『あれだよ！　あの黒いＩＳ！』
血殺『じゃあ、行くぞ！”ミラーズタートル“＆”レッドライズ“！』

玄武を足に付着していた甲羅と朱雀を翼のビットが排出される。

ビットは黒いＩＳに向かって行き、ビームで目標を狙い撃ち
反射板《甲羅》で当たらなかったビームを再び目標に跳ね返す。
ビームは全て直撃した

血殺「青竜！」

青竜「準備出来てるよ」

血殺は青竜の展開している肩からプラズマ砲を腰にマウントしてあるレールガンを放射する。

朱雀「やったの？」
血殺「いや、まだだ！」

刹那、敵のＩＳからビームが放射される。

血殺「玄武！」
玄武「ええ」
血殺「”水の盾“《ウォーターシールド》！」

空気中の水分を集まり盾となる。

ビームとシールドがぶつかり合い爆風を起こした。

見たところ黒いＩＳは無傷。
さらに、ビットも全部破壊されてるし、反射板も跳ね返しきれなくて破壊されてる。

血殺「白虎！」
白虎「わかってるわよ」
血殺「”死の槍“《デスランス》！」

即座に赤黒い槍を展開する

血殺「うらあああああ」

”死の槍“を黒いＩＳに向かって投げ飛ばした。
だが、黒いＩＳは難なく避けて突っ込んでくる。

血殺「そうくるなら、”死の爪“《デスクロウ》だ！」

”死の槍“と同じ色をしたクロウを右手に展開する

”死の爪“を相手振りかざした。しかし、黒いＩＳはそれも避けて
血殺に体当たりしてその状態のままアリーナの遮断シールドを破壊
してアリーナに突っ込んだ。

血殺「いてーんだよ。このクソ野郎！」

再び”死の槍“を展開する。

血殺「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」

黒いＩＳに”死の槍“を突き立てて刺すが、黒いＩＳの手に防がれ
る。
そして、黒いＩＳの放ったビームが直撃し地面に叩きつけられる。

血殺「ぐっ」
一夏「な、なんだ？」
鈴「一夏、試合は中止よ！すぐピットに戻って！」

鈴はかなり焦った様子で一夏に叫ぶ。

一夏「お前はどうすんだよ」
鈴「血殺と一緒に時間を稼ぐわ」
一夏「女を置いてそんな事できるかよ！」

鈴「あんたの方が弱いんだから仕方ないでしょが！」
一夏「う゛っ」
もっともなことを言われ、言葉を失う一夏。
鈴「あたしも最後までやり合うつもりはないわよ。すぐに学園の先生達が事態を収拾「あぶねぇっ！」
鈴の体を一夏が抱きかかえてさらう。その直後さっきまでいた場所にビームで砲撃された。
血殺「一夏ナイス判断だ。だけど、話してる時間があるなら集中しろ！」
一夏「血殺！　大丈夫なのか？」
血殺「肋を何本かやっちまったが、大丈夫だ」
”暗黒の鎌“《ダークサイス》、”竜の息吹“《ドラゴンズブレス》
右手で漆黒の鎌である”黒き鎌“を、左手で白の銃である”竜の息吹“を展開する。
一夏「なあ、血殺」
血殺「なんだ？」
一夏「あのＩＳはなんだ？」
真剣な目で黒いＩＳを見ながら俺に聞いてきた。
血殺「その前に鈴を離してやれよ」
一夏「ああ、そうだな」

一夏が手を離すと鈴は一夏の隣に移動した。

鈴「全く何時まで抱いてるつもりだったのよ」

一夏「わ、わりぃ」

鈴「まっ、いいけど」

鈴は軽く頬を赤くしている。

そんなに嬉しかったのかなぁ？

よくわからんな。女は

血殺「一夏さっきの話だけど、たぶん無人機だ」

一夏「む、無人機！？」

鈴「ち、ちょっと待ってよ。ＩＳって人が乗らないと動かないんじゃないの？」

血殺「理論上はな」

そう、ＩＳは理論上に言うと、人が乗らないと絶対に動かない。

まあ、どっかの天才ウサギの頭なら理論なんかも吹き飛ばすかもね

鈴「無人機なはずないわっ。絶対に」

鈴は首を左右に振り、ありえないという顔をしている。

血殺「まずは、あいつを破壊しよう」

一夏「でも、どうやってだ？」

血殺「俺と鈴でお前の援護するから、お前は”雪片“《ゆきひら》であいつを破壊してくれ」

一夏「わかった」

鈴「わかったわよ」

数分後

血殺「一夏！ちゃんと狙え！」
鈴「そうよ！これで４回目じゃない！」
一夏「狙ってるっつーの」

何回不意を突いても最後に避けられてしまい。こちらの不利になってきた

血殺「鈴、今いくつ？」
鈴「ざっと１８０ってとこね」
血殺「一夏は？」
一夏「６０を切ってる」
血殺「まじかぁ」

俺も４００を切っている。
殺れるのはラスト一回くらいだろうな

鈴「来るわよ！」
一夏、血殺「「！！」」
黒いＩＳのビームを避ける俺たち。
鈴「めんどくさいわね」
鈴は衝撃砲を展開し砲撃するが、黒いＩＳにたたき落とされる。
血殺「なあ、一夏」
一夏「なんだ？」
血殺「あいつに向かってフルで攻撃出来るか？」
一夏「できるが、また避けられるぞ」
血殺「”瞬時加速“《イグツニションブースト》ならどうだ？」
一夏「エネルギーがないぞ」
血殺「一夏の背中に”竜砲“《りゅうほう》をぶつけて加速すればいい」
一夏「なるほどな。そうと決まれば早速「一夏ぁぁぁぁぁぁ！」」
まさか、この声は箒か！
箒「男なら、男ならそのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」
大声で叫んだせいで黒いＩＳが箒の方へ向きを換える。
血殺「ちっ、あの馬鹿！　鈴！」
鈴「何よ？」
血殺「あいつに向かって”竜砲“を打てフルパワーで」
鈴「当たんないわよ」
血殺「いいから早くしろ！一夏！準備しろ」

一夏「わかったが、箒が！」
血殺「箒は任せろ！」
”次元加速“！
箒の前まで移動し、抱きかかえて再び飛び始める。
血殺「何やってんだよ！」
箒「私は・・・・・」
血殺「もういい。何も言うな」
一夏「ぐっ！」
一夏は”零落白夜“で右腕を壊したものの、左手に殴られ地面に叩きつけられた。
箒、鈴「「一夏っ！」」
一夏「狙いは？」
セシリア「完璧ですわ！」
血殺「当てて当然だろ」
刹那、客席からブルー・ティアーズの４機のビットが黒いＩＳに狙撃した。
一夏の方へ向かう俺とセシリア。
血殺「危なかったな。一夏」
セシリア「ギリギリのタイミングでしたわ」
一夏「セシリアならやれると思っていたさ」
俺たちが喜びに浸った刹那、一夏は黒いＩＳにロックオンされ撃た

れた。

血殺「一夏！　ちくしょう！」

俺が放った”竜の息吹“の砲撃が直撃し黒いＩＳは大破した。

保健室

血殺「おっ、気がついたか」

一夏「血殺、あのＩＳは？」

血殺「破壊した。大丈夫だ！　俺とお前以外誰も怪我してない」

俺は胸に包帯が巻かれているし、一夏は当分、辛い想いをするだろう。

一夏「そっかぁ、そりゃ良かった」

安心した表情を見せる一夏。

千冬「気がついたみたいだな」

一夏の声を聞いてか、千冬が近づいてきた。

血殺「じゃあ俺は外で待ってますね。先生」

千冬「ああ、わかった」

保健室を退室し、壁に寄っ掛かって待っていた。

保健室前

プルプル

血殺「もすもす　何の用？　ああ、あれのことね　仕方無いだろ。こっちにも役割がある　わーったわーった。じゃあ、また今後連絡する」

ふぅ、なんか疲れたなぁ

はあ、とため息をついてると箒がやってきた。

血殺「箒？」
箒「・・・・・」

無言でこっちを見ている。

な、なんだか不気味

血殺「ああ、一夏ならもう起きてるぜ」
箒「そ、そうか。・・・・・ありがとな」
血殺「何が？」
箒「助けてくれただろ」

意外だった。箒から礼を言われるなんてな

血殺「ああ、白い王子様じゃあなくて悪かったな」

箒「血殺！」

血殺「さっさと入ってきなよ」

箒がムスッとした顔で入って行った。

箒と入れ違いで千冬が出てきた。

千冬「じゃあ、行くぞ」

血殺「そうですね」

俺たちはある場所に向かった

ある空間

レベル４権限を持つ関係者以外立ち入り禁止区域に俺と織斑先生がいた

。

真耶「織斑先生？」
血殺「山田先生じゃないですか」
真耶「四死神君？　どうしてここに？」

レベル制限があるからか、
少々驚いた感じで真耶は入室した。

血殺「織斑先生に許可を得たからです」
真耶「そ、そうなんですか」
千冬「で、結果は？」
真耶「はい。あれは・・・無人機です」
血殺「そうだったんですか？何か違和感があると思いましたが」

はあ～、嘘つくって大変だなぁ

千冬「コアはどうだった？」
真耶「登録されていないコアでした」
千冬「そうか」
真耶「何か心当たりがあるんですか？」
千冬「いや、ない。今はまだな」

決戦！クラス対抗戦（後書き）

いかがだったでしょうか？

次の話からシャルとラウラを出します。

では、また次回

ルームメイトはブランド貴公子（前書き）

前々回に続きまた謎の力がでてきます。

さらに血殺の過去の話。第2弾。これでだいたい完成します。

ルームメイトはブランド貴公子

6月

プルプル

血殺「もすもす？　ああ。久しぶりだな。えっ？　そんなわけないだろ！　お願い？珍しいなあんたが、　で？どんなお願いなの？ふむふむ、お前の部隊の隊長ねぇー。名前は？　ラウラ・ボーデヴィッヒだな。　了解したよ。　じゃあ、今度は俺のお願いだ。　ビールと銃送って　ああ、何でもいいよ。じゃあな」

懐かしいな。あいつと最初に会ったのは十三年前の秋だっけか

血殺「転校生を見るついでに、授業でも受けるか」

教室

真耶「今日は転校生を紹介します」

ガラガラと入って来たのは金髪の少年と銀髪の眼帯少女だった。

??「失礼します」

??「・・・・・」

??「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますがよろしくお願いします」

フランスか。あの国は昔よく連れて行ってもらったっけ

女子B「お、男?」

シャルル「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国から転入を……」

女子「「「「「きゃ」」」」」

どうやらデュノアは口調だけ男のようだ。

シャルル「はい?」

女子「「「「「きゃあああああ」」」」」

五月蝿いなぁ。餓鬼か!?　貴様らは

女子E「男子!3人目の男子!」

女子C「しかもうちのクラス!」

女子G「地球に生まれて来て良かった~」

千冬「あー、騒ぐな。静かにしろ!」

真耶「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介が終わってませんから~!」

織斑先生と山田先生によりやっと静かになる教室。

？？「・・・・・」

千冬「挨拶しろ、ラウラ」

ラウラ？　あいつが言ってたやつと名は同じだな

ラウラ「はい、教官」

千冬「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ

ラウラ「了解しました」

ラウラはドイツの軍人のようだ。

ラウラ「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

うん、合ってるな。あいつに言っておくか

真耶「あ、あの、以上ですか？」

ラウラ「以上だ」

てか、眼帯キャラがかぶってんじゃん！

どうすんだよ！？　作者さん！

ラウラ「！貴様が」

バシンッ

全員「「「「・・・・・・・・」」」」」

一夏「う？」

俺がどうでもいいことを考えているうちに問題が起こっていた。
ラウラが一夏にビンタしたのだ。しかもすんげーいい音が教室中に響き渡った。

ラウラ「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」
一夏「いきなり何しやがる！」
ラウラ「ふん・・・」

止めないとマズいな

血殺「ドイツの人ってみんなそうなの？　ラウラ・ボーデヴィッヒ」
ラウラ「貴様に教える筋合いはない」

ラウラは貴様などに興味は無い。とまで言ってきた。

血殺「さすがドイツの冷水だ。説得は一筋縄ではいかないか」
ラウラ「！　貴様何故それを！？」

何故知っている！？と言わんばかりの顔をしている。

血殺「それともこう言うべきかな。ドイツＩＳ部隊黒ウサギ隊長殿」
ラウラ「貴様！　どこでその情報を手にいれた！」
血殺「今度の大会で俺に勝ったら言ってやる」

俺たちの言い争いに終止符をうつかのように織斑先生が話を割ってきた。

千冬「静かにしろ！　ではＨＲを終わる。各人はすぐに着替えて第

2グラウンドに集合。今日は2組と合同でＩＳ模擬戦闘を行う。解散！」「それから織斑、四死神。デュノアの面倒を見てやれ。同じ男だろ」

織斑先生が言い終わるとデュノアは一夏に向かって歩いて行った。

シャルル「君が織斑君？始めまして。僕は「ああ、いいから。とにかく移動が先だ。女子が着替え始めるから」

血殺「さっさと行くぞ。だいたいの説明は移動中にする」

俺たちは階段を下って1階へ。しかし

女子Ｋ「ああっ！転校生発見！」

女子Ｍ「しかも織斑君と四死神君が一緒！」

血殺「逃げるぞ！」

逃げても逃げてもゴキブリのように湧いて来やがる。

どちらかと言うと、ＨＰのクモのようだ。

女子Ｈ「いたっ！こっちよ！」

女子Ｏ「者ども出会え出会えい！」

女子Ｉ「織斑君の黒髪や四死神君の紺もいいけど、金髪っていうのもいいわね」

女子Ｌ「しかも瞳はエメラルド！」

女子Ｐ「きゃああっ！見て見て！織斑君と転校生！手！繋いでる！」

女子Ｒ「日本に生まれて良かった！ありがとうお母さん！今年の母の日は河原の花以外のをあげるね！」

だるいな。時間の方を使うか

血殺「はあ、やっと静かになったよ。早く行こ」

全員がピタッと止まっている。

別に人が止まっているわけではなく、時間自体が止まっているのだ。

女子の軍勢から逃げてから俺は時を再び動かした。

血殺「さあ、動け」
一夏「あれ？血殺が消えた！」
シャルル「ホントだ！」
女子S「四死神君がいなくともまだ2人いるわよ！」

お、女って怖い。

一応、言っておこう。

血殺「一夏！俺は先に行ってるぜ！」
一夏「なっ！血殺！何でそんなとこいんだよ」
血殺「その前に自分の心配しろ！じゃあな！」

わりぃな一夏、俺はまだ死にたくない！

第2グラウンド

血殺「ふう、間にあったぜ」

俺が着くなり、箒が近寄ってきた。

箒「一夏と一緒じゃないのか？」

第一声がそれですか！？

まあいいや

血殺「一夏なら遅刻するぜ。絶対に」

箒「何をやっているのだ。全く」

やっぱり気になるんだ

千冬「遅い！」

一夏「はい、すいません」

結局、二人とも遅刻して来た。

誤るなり列に並ぶ一夏とシャルル

セシリア「ずいぶんゆっくりでしたわね」「スーツ着るだけで、どうしてこんなに時間がかかるのかしら？」

血殺「一夏曰わく、ひっかかるらしいぞ」

俺は正直に言った。

一夏の考えを正直に言っただけ

セシリア「なっ！」

一夏「なんで知ってんだよ！」

千冬「うるさいぞ！織斑！」

一夏「すいません。織斑先生」

一夏は織斑先生に怒られると速攻で誤る。

見ているとかなり面白い関係だ

千冬「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

生徒「はい！」

二組と合同なだけにいつもよりとてつもなく五月蠅い。

千冬「今日は戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！」

セシリア「な、なぜわたくしまで！？」

鈴もセシリアもとばっちりだな。

千冬「専用機持ちはすぐにはじめられるからだ。いいから前に出ろ」
セシリア「どうしてわたくしが・・・・・」
鈴「なんでアタシが・・・・・」

文句をいいながら前に出る2人だったが、千冬に耳打ちされた刹那
2人は人が変わったようにやる気を出し始めた。

セシリア「やはりここはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットの出番ですわね！」
鈴「まあ、実力の違いを見せつけるいい機会よね！専用機持ちの！」

織斑先生も酷いことするなぁ

セシリア「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」
鈴「ふふん。こっちの台詞よ。返り討ちよ」
千冬「慌てるなバカども。対戦相手は「あああーっ！　ど、どいてください～っ！」

キィィィン……

真上から風を切る音が響いたから俺は空を見上げた。

山田先生！？　てか、俺と一夏にぶつかるぞ！　朱雀でも間に合わないな　なら、また時の方だな

血殺「あっぶねー。一夏！大丈夫か！？」

一夏「ああ、ギリギリ間に合った」
真耶「あ、あのう、織斑くん・・・ひやんっ」「そ、その、ですね。困ります・・・・こんな場所で・・・。」

一夏はまったく大丈夫ではなかった。

まずいぞ。何故かわからんが山田先生が下で一夏が上に乗っている状態！しかも、一夏の手が山田先生の胸を鷲掴みしている！　セシリアは狙ってるし！　鈴なんか何時でもＯＫって顔してるし！

真耶「ああでも、このまま行けば織斑先生が・・・・・」

頼む！　山田先生、現実に戻ってくれ！

一夏「ハッ！？」
血殺「バカ！」

一夏が体を起き上がった刹那、一夏の頭があった場所をレーザー光が貫く。

セシリア「ホホホホホ。残念です。外してしまいましたわ」

セシリアが外したのを補うかのように、ガシーンという音と共に鈴が“双天牙月”を連結投げ飛ばした。それは一夏に向かって真っ直ぐ飛んでいった。

一夏「い　ぃ！」

ドンッ！ドンッ！と2発の銃声が双天牙月を打ち飛ばす。それを撃ったのが意外にも真耶だった。

真耶「大丈夫ですか？織斑君」
千冬「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今の射撃ぐらい造作もない」
真耶「む、昔のことですよ。それに代表候補生止まりでしたし」
候補生止まりか。つまんねーの
千冬「さて小娘どもいつまで惚けてる。さっさとはじめるぞ」
セシリア「え？あの、２対１で？」
鈴「いや、さすがそれは」
千冬「安心しろ。今のお前達ならすぐ負ける」
負けると言われて鈴とセシリアが瞳に闘志をたぎらせる。
千冬「では、はじめ！」
鈴、セシリア、真耶が浮上していく。
千冬「さて織斑、四死神。あいつらの戦いが終わったらお前達にもやってもらう。準備をしろ」
血殺「はい」
一夏「え？俺もですか？」
千冬「そうだ、さっさと準備しろ」
コンタクト開始
血殺『さて、誰が出る？』
白虎『私が出たい』
血殺『じゃあ、白虎でいいな』

朱雀『別にいいけど』

朱雀は戦いは好まない主義だ。

青竜『近接戦闘には興味無い』

セシリアの時に出すべきだったな

玄武『御勝手に』

め、珍しい

血殺『じゃあ行くぞ。白虎』

コンタクト終了

千冬「四死神！はじめるぞ！」

血殺「あ、はい」

一夏は白式、俺は白虎を展開する。

千冬「それでは、はじめ！」

浮上していく一夏に続いて俺も浮上する。

一夏「この前のとは違うんだな」

血殺「近距離のお前に中遠距離の武器を使ったら可哀想だと思ってな」

一夏「そうかい」

血殺「じゃあ、行くぜ！」

一夏「ああ、何時でも来い！」

俺は”瞬時加速“を使い一夏の後ろをとる。

血殺「もらったぁ！”聖なる剣“《ホーリーブレード》」

真っ白の剣を展開して、一夏に斬りかかった。

一夏「くっ！」

血殺「うんうん、止め方は上手いけど隙だらけだ！」

一夏「えっ！？」

血殺「”曲長刀“《きょくちょうとう》！」

俺は左手で伸び続ける刀を展開し振り回す。それを回避する一夏。

血殺「上手く避けたね。でも残念これで終わりだ」

血殺の”曲長刀“が一夏の五体を縛り、刃先は地面に刺さった。

一夏「何！？」

血殺「”曲長刀“は切る為にあるんじゃない。捕獲用に作られた刀なのさ。だからこれで終わりだ。”死の槍“！」

俺は死の槍を展開。

一夏に向かって投げ飛ばした。

”死の槍“は白式を直撃する。

一夏「なっ！？　シールドエネルギーが一撃で０に！」

血殺「そう、”死の槍“は当たった瞬間エネルギーが0になるぜ」
千冬「終わったな」
血殺「ええ、終わりましたよ」

俺と一夏がゆっくり地面へと着地する。

千冬「では、専用機持ちの織斑、オルコット、凰、デュノア、ボーデヴィッヒに各グループ8人で実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやるように！では分かれろ」
血殺「先生！俺はどうすれば？」
千冬「四死神は全グループのサポートをしろ」
血殺「了解」

千冬が言い終わるや否や、一夏とシャルルに一気に2クラス分の女子が詰め寄る。

女子F「織斑君、一緒に頑張ろう！」
女子G「デュノア君の操縦技術見たいなぁ」
千冬「この馬鹿者どもが。出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド百周させるからな！」

一夏とシャルルに群がっていた女子が蜘蛛の子のように散っていく。

千冬「最初からそうしろ。馬鹿者どもが」
血殺「さてと、俺は様子見でもするか」

俺は各グループを見て回りながらそれぞれのグループにアドバイスを行っていった。

千冬「今日はここまでとする。四死神は後で職員室に来い。では解散！」

職員室

血殺「失礼しま～す。織斑先生！来ましたけど何か？」
千冬「だいたい想像はついてるんだろ？」

織斑先生は短い笑みを浮かべる。

血殺「じゃあ、場所を変えましょう。山田先生も一緒に来てください」
真耶「えっ？私も？」
血殺「何度も説明するのだるいんで」
真耶「わかりました」
千冬「場所はどこがいい？」
血殺「空き部屋」

ある空き部屋

千冬「では話してもらおうか」
血殺「俺のＩＳのことですね」
千冬「ああ、そうだ」

俺も少し真面目な顔をして言葉を始めた。

血殺「先生も察してる通り元々は俺のＩＳではありません」
千冬「だろうな。お前のＩＳの名前は元日本の代表候補生のＩＳだったが何故お前が持っている!?」
血殺「このＩＳの元所有者は俺の友達にして俺が殺害した人です」
真耶「殺害って!四死神君!人を殺したんですか!?」
血殺「はい」

俺は力がない声で返事をした。

千冬「何故そんなことをした!?」
血殺「俺だって殺りたくはなかった!」「でも、気がついたらみんなが死んでいた!」
千冬「気がついたらとはどういうことだ!?」

織斑先生は驚いた顔をして聞いてきた。

血殺「俺の親指に填めてあるリングもＩＳなんですけど、俺がこれをたまたま見つけて触ったら勝手に展開して暴走を起こしたんです。それでみんなを殺したんです」
真耶「でも、おかしくないですか。なんで四死神君はそのＩＳをみつけたんですか？」
血殺「ちょうど、その日に友達の家に行ったんですよ。そしたら試作品であるこのＩＳをみつけたんです」

俺はＩＳのことは正直に言った。

千冬「なるほどな。では次にお前の家族について聞きたい」
血殺「前にも言いましたよね。家族のことは聞かないでくれって」
千冬「ああ、覚えいる。だが・・・」
血殺「わかりました。確かに気になるでしょうから」
千冬「礼を言う」
血殺「では、本題へ移りましょうか。・・・俺の本当の親は幼い頃に俺をドイツの研究所に売ったんです。俺はそこで苦しい実験を受けてきました。この眼帯の下の目はその時に受けた実験の物語っているんです」

俺はそう言って右目を隠している眼帯を外す。俺の右目は赤と青の２色に分かれている。

千冬「その目は何の意味がある？」
血殺「時間を止める作用があります」
千冬「時間を止めるだと？！」

織斑先生はかなり大声で聞いてきた。

血殺「ええ、そんでもってこの力を手に入れた時にその研究所の人間を1人残らず殺しましたけどね」
千冬「しかし、そんな話聞いたことがない」
血殺「当たり前ですよ。あいつらは人体実験をしていたんですから。言ったら自分達の首を絞めてるのと同じですから」

この人は俺のことを信じてないな

まあ、疑われるのはなれてるしいいや

千冬「その後、お前はどうしてた?」
血殺「あるドイツの人に拾われました。先生もよく知っている人です。名前ぐらいは自分の力で知ってください。で、その人に日本まで送ってもらってある学校の先生に拾ってもらったんですよ」
千冬「その先生はどうした?」
血殺「死にましたよ。白騎士事件のせいで」
千冬「!!」

俺の言った言葉に動揺を隠せない織斑先生。

千冬「どういうことだ!?」
血殺「今言った通りです。 だから俺はそいつが憎い! 自分は何も成し遂げていないのに! 成し遂げたかのように平然とするそいつが! 何故先生の事件が報道されなかったかわかりますか!? 実験が好きだった先生には山奥に別荘があったんです! だけどその別荘は野鳥を観察するため作った物でした! しかし! 事件は先生の実験が失敗したため爆発したと見てもいないのに調べてもいないのに言われた! 俺が唯一の目撃者なのに誰も信じない! だから俺は許さない! この事件を起こした束も! 護りきれなかったそいつも!」

俺は心の中で叫んだ。
「お前をいつか殺してやるよ」って

千冬「お前は白騎士のパイロットを知っているのか？」
血殺「ええ。全部、束から聞きました」
真耶「で、でも確か撃たれたミサイル全てを白騎士は壊したんじゃあないんですか？」
血殺「本当に撃たれたミサイルが２３４１発だったらですけど」
千冬「どういう意味だ？四死神」
血殺「束さんのパソコンをいじってたら発射数が書いてあったんですよ。そうしたら、２３４２発だったんですよ」
千冬「なっ！？」
真耶「まさかそんなことって！」
血殺「今のが真実です。じゃあ俺は部屋に戻ります」

俺は殺意を残しながら部屋を退室した。

部屋内

血殺「はあ、言わなきゃ良かった」
朱雀「大丈夫？血殺」
白虎「大丈夫なわけないでしょ」
青竜「確かにね」
玄武「復讐の相手が目の前にいたらね」
血殺「みんな、頼むから静かにしていてくれ。俺は寝るから4時ぐらいに起こしてくれ」
朱雀「うん、わかった」

3時半

プルプル

血殺「ん？　もしもし。　ああ、お前か。　何か用？　ああ、そんな約束してたな。　あいつ同じクラスだったぜ。　お前が教えてくれた情報にビックリしてたぞ。　ああ、いいけど。俺のお願いも追加するぞ。　俺が昔から吸ってる煙草送ってくれ。　それからもう1つお願いがあるんだ・・・・・・・。　じゃあまた後で」
プツッ

血殺「コイツら回収しよ」

そういって朱雀　白虎　青竜　玄武を回収する。

プルプル

血殺「もすもす。ああ、調べがついたのか。で?どうだった?
やっぱりか。　ありがとな。　今度、漫画送るぜ。ああじゃあな」

4時

ガチャ

シャルル「お邪魔しまーす」

血殺「シャルル?」

シャルル「ぼ、僕この部屋になったんだけど」

血殺「そうなのか。じゃあ、そっちのベッドを使ってくれ。それから、風呂の時間は7~9時の間に入ってくれ」

シャルル「う、うん。わかった」

返事をするのが精一杯のシャルル。

血殺「それともう1つ」
シャルル「何かな？」
血殺「お前、女だろ」
シャルル「！　な、何のことかなぁ？」

シャルルはむちゃくちゃ動揺している。

血殺「とぼけても無駄だぜ。もう調べはついている」
シャルル「そ、そうなんだ。はあ、やっぱり駄目だったかぁ」

諦めたかのように元気が無くなるシャルル。

血殺「何が狙いだったの？」
シャルル「それはもちろん一夏だよ」
血殺「だろうな。お前の父さんの会社、倒産しそうなんだろ」
シャルル「うん。デュノア社は第3世代型を開発してんだけど、なかなか形になりなくて、それで政府からの通達で予算が大幅カットされたんだ。そして、次のトライアルで選ばれなかったら援助を全面カット、その上、ＩＳの開発許可も剥奪するって言い渡されたの」

まあ、当たり前か。使えなかったものは処分するのが基本だ

血殺「ふ～ん。それで男でもＩＳを使える一夏に近づいた訳か」
シャルル「そういうこと」
血殺「よく実の娘にそんなことできるなぁ」

淡々と言うシャルルに呆れたように言った。

シャルル「僕は愛人との間で産まれた子だからかな」
血殺「だから、どうでも良いと」
シャルル「そう想ってると思うよ」

愛人とｐｌａｙする人が悪いと思うけどな

血殺「お前は父親から解放されたいのか？」
シャルル「うん。　でも出来ない」
血殺「なんでだ？」
シャルル「たぶん逃げても何時か捕まると思う」
血殺「じゃあ、逃げなきゃいい」
シャルル「無理だよ」

まあ、大抵のガキはこうなるよな
けど

血殺「間違ってるよシャルル。何もしていないのに無理と言う言葉は出してはいけない。現実に、　お父さんに向き合わないと」
シャルル「でも、どうしたら」
血殺「俺に良い案がある」
シャルル「良い案？」

首をくにゃっと横に曲げて聞いてきた。

血殺「ああ、準備出来たらフランスへ行こう」
シャルル「え？でも、前に本妻の人に殴られたんだけど」
血殺「大丈夫だ。任せろ。あっちには何も言わせない。その代わり条件がある」
シャルル「条件？」

正直嫌だが、この方法しかない

血殺「その場だけでいい。俺とお前が付き合ってるように見せるんだ」

シャルル「えっ！？付き合うの！？僕と血殺が！？」

シャルルもかなりあたふたとしている。

血殺「ああ、その方が説明が付けやすい。それにあっちが殴ったら殴り返してやる」

シャルル「それで捕まったりしない？」

シャルルは何を言ってんだか

血殺「そしたら、あっちをシャルルに対する人権を壊してるって言えばいい」

シャルル「でも、何をするの？」

血殺「第3世代型のＩＳの設計図とシャルルの自由の交換」

シャルル「よ、よくわからない」

シャルルの頭の上にははてなマークが十個ぐらい浮いている。

血殺「簡単に言えば、第3世代型の設計図を渡して、シャルルを自由にさせろって言うの」

シャルル「中に入れてもらえなかったら？」

血殺「損するのはあっちだ。会社は潰れ、開発も出来ない、その上頼みの綱であるシャルルとは連絡が繋がらない」

シャルル「僕はどうすれば？」

血殺「俺の金でなんとかなる」

そう、俺には金が有り余っているからな

シャルル「なんで？」
血殺「言ってなかったっけ！？　俺、日本のＩＳ開発の手伝いをしていて、年収１０億貰ってんだぜ」
シャルル「解雇されないの？」

シャルルは顔をむちゃくちゃ近づけて詰め寄ってきた。

血殺「も、貰い手なんていくらでもあるから大丈夫」
シャルル「なんで？」
血殺「白騎士以外の日本のＩＳは俺が考えたから」
シャルル「えっ！？」

俺はちょっと距離をおいた。

血殺「意外か？」
シャルル「うん。とても」
血殺「他に質問は？」
シャルル「第３世代型のＩＳの設計図は？」

ここまで言ってもわからないのか！？

血殺「俺が作る。　そうだ、お前の本当の名前を教えてくれ」
シャルル「シャルロット」
血殺「シャルロットか。良い名前じゃん。じゃあこれからはシャルって呼ぶよ」
シャル「うん。わかった」

難なく了解を出すシャル。

血殺「じゃあ、飯食いに行こうぜ。それから一夏にも訳を言おう」
シャル「うん！」
血殺「良い顔してんじゃん」
シャル「えっ！？そうかな？」
血殺「ああ、前より良い顔だ。じゃあ、さっさと行くぞ」

俺たちは食事を済ませ、一旦部屋に戻った。

血殺「そういえば、一夏の部屋ってどこだ？」
シャル「僕もそこまではわからない」
血殺「仕方ない。明日にしよう」
シャル「そうだね」
血殺「じゃあ、おやすみ。シャルロット」
シャル「おやすみ。血殺」

ルームメイトはブランド貴公子（後書き）

いかがだったでしょうか？

血殺の意外な過去。

意外でもないかな？

私は考えるのに結構疲れました。

では、また次回

ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（前書き）

ちょっと本編と違ったところがあって面白いと思います。

ブルー・デイズ／レッド・スイッチ

土曜日　アリーナ

シャル「一夏がオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」
一夏「そうなのか？　一応わかっているつもりだったんだが……」
血殺「でも、わかってないから。さっき、シャルに負けたんだろ」

さっき、一夏とシャルで模擬戦をしたところシャルの圧勝。
一夏はなにも出来ずに終わったのだ。

一夏「そうなんだけどさぁー」
血殺「たぶん、今まで教えてくれた人がひどかったんだろう」
シャル「誰に教えてもらってたの？」
一夏「箒と鈴とセシリアだ」

一番ミスマッチな三人かよ！

血殺「おそらく箒は擬音が多くて、鈴は経験や感覚、セシリアは理論的に言うんだろ？」
一夏「よくわかったな」
血殺「女の勘ならぬ男の勘」
シャル「そういえば、一夏の白式って”後付武装“《イコライザ》がないんだよね？」
一夏「ああ。何回か調べてもらったんだけど、”拡張領域“《パススロット》が空いてないらしい」

俺の内心は罪悪感で満たされてた。

なぜなら、白式も作ったのは俺。
正確には設計しただけだ。

一夏にはまだそのことを話してないから他人事で言ったほうが良さそうだ

血殺「ふ～ん。結構大変だな」
シャル「たぶんだけど、ワンオフ・アビリティーの方に容量を使っているからだよ」
一夏「ワンオフ・アビリティーって何だっけ？」
血殺「まあ言葉の通りだな。お前で言うと”零落白夜“がそうだな」
一夏「ああ、なんだか思い出した気がする」

かなりテキトーに言ったつもりが、一夏はかなり納得した表情だ。

血殺「じゃあ、射撃練習でもするか。シャル、一夏に武器貸してあげて」
一夏「他人の武器って使えないんじゃないのか？」
シャル「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば、登録してある人全員が使えるんだよ」
血殺「じゃあ、終わったら、オープンチャンネルで呼んでくれ」

そう言い残してその場から去った。

少し離れたところに見覚えのある面が発見した。

血殺「ん？あれは・・・。ラウラ・ボーデヴィッヒとシュヴァルツェア・レーゲン」

俺がラウラを見ているとシャルから通信が入った。

シャル「血殺、僕のは終わったから次は血殺の番だよ」

血殺「わかった。今戻る」

俺はシャルと一夏の元に戻った。

血殺「どうだった？一夏」

一夏「とりあえず、速いって感じだな」

血殺「そうか。じゃあ次は近接戦闘やるぞ。　ん？何の騒ぎだ？」

アリーナのざわめきにはすぐに気がついた俺たち。

女子B「ねえ、ちょっとアレ・・・」

女子D「ウソっ、ドイツの第3世代型だ」

女子E「まだ本国でもトライアル段階だって聞いたけど・・・」

女子たちの目線には人を見下した目で立っているラウラがいた。

ラウラ「おい」

一夏「・・・なんだよ」

イヤイヤで返事を返す一夏。

ラウラ「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話は早い。私と戦え」

一夏「イヤだ。理由がねえよ」

ラウラ「貴様にはなくても私にはある」

俺も一夏もだいたいは想像がついた。

だけど、あえてラウラに問いた。

血殺「おい！ボーデヴィッヒ。一夏と戦う理由は何だ？」
ラウラ「私はそいつの存在を認めない。だから始末する！」
血殺「それは、織斑先生に認めてもらうためか？それとも、人を殺めれば織斑先生に近づけるとでも思っているのか？」
返ってきたのはアホらしい答えだった。
ラウラ「私はそいつが憎いだけだ。あの人にあんな目をさせるそいつが！」
一夏「一体、千冬姉がどんな目をしたって言うんだよ！」
ラウラ「私と戦って勝ったら教えてやる」
一夏「ならいい。また今度な」
ラウラ「ふん。ならば・・・戦わざるを得ないようにしてやる！」
ラウラは自分のＩＳを戦闘状態にして、左肩の大型の実弾砲を放つ。
それと同時に俺は玄武を展開する。
血殺「”氷壁“《ひょうへき》」
俺は空気中の水素を凍らせ、氷の壁を作る。
砲撃は氷の壁に当たると一瞬で固まり、粉々に砕けた。
ラウラ「何！？」
血殺「どうだ？ご自慢の大型の実弾砲が効かないのは？結構悲しいだろ？」
ラウラ「貴様に用は無い！」
再び大型の実弾砲を構えるラウラ。

血殺「はっ！目指す所が織斑先生って時点でお前は俺に勝てねぇよ！」

ラウラ「貴様！教官を侮辱する気か！？」

血殺「侮辱も何もあの人より俺の方が強いし」

ラウラ「貴様ぁ！！」

血殺「やっぱり、殺るしかないか」

俺は玄武の無駄なパーツをパージした。

教師『そこの生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナに声が響き渡った。

騒ぎを聞き駆けつけたのだろう。

血殺「よかったな。死ななくて」

ラウラ「ちっ！」

血殺「俺と戦いたいなら大会頑張れよ」「一夏、今日は中止にしよう。また今度見に行ってやる」

一夏「ああ、またな」

俺は少し離れたあとに、大切なことを思い出した。

血殺「それと、俺少し出てるからシャルよろしくな！　小包が来たらもらっておいて！」

一夏「ああ、わかった」

血殺「じゃあな」

その場から消える俺に怒りをこみ上げるラウラ。

ラウラ「今度の大会で叩き潰してやる」

ある場所

血殺「失礼しま～す」
？？「あら、来てくれたんだ。お姉さん嬉しい！」

相変わらずのハイテンションだ。

血殺「俺は断りに来たんです」
？？「あっ、そうだったの？　お姉さん残念」

見た目は落ちこんでるようにみせているが、内心は酷いことを考えている。

血殺「でも良い人見つけましたよ」
??「何て言う子?」
血殺「織斑一夏ですよ」
??「ああ、あの子かぁ。良いかもね!採用してあげる」
血殺「じゃあ俺はこれで、さいなら」

俺は退室した。
あの人は話すだけで疲れる。

血殺「そうだ!ボディーソープ入れ替えるの忘れてた!シャルに電話しよ」
プルプル
プルプル
プルプル

血殺「繋がらない。一夏に頼も」
プルプル
プルプル

血殺「あっ、もしもし一夏? ボディーソープ入れ替えるの忘れたからシャルに渡しておいて。 机の上にあるから。 たぶん、今風呂入ってると思う。 うん、じゃあよろしく」
プツッ

血殺「さて、行くとするか」

第二整備室

血殺『じゃあ束さん、プログラム送ってください』
束『うん！送るね～。・・・・送ったよ～』
血殺『ありがとうございます』

確かに送られてきた。
変なウサギがピョンピョン跳ねているプログラムも一緒に

束『このプログラムを使う時は十分に注意してね』

プログラム名はバーサーカー。
狂戦士という意味だ。

血殺『わかりました。じゃあ』
束『うん。またね～』
血殺「さっさとインストールしよ」

俺はプログラムのインストールを済ませ、自室に戻った。

部屋内

血殺「ただいま～」
シャル「あっ！お帰り」

部屋にはシャルと一夏がいるが、シャルは胸を潰していない。

血殺「シャル、隠さなくていいのか？」
シャル「バレっちゃった」
血殺「そうだったのか」

納得がいった。
というより俺に責任がある。

一夏「血殺、お前知ってたのか？」
血殺「まあ、先日だけどな」
一夏「何で言わなかったんだよ」
血殺「お前の部屋番号わからんから」
一夏「マジか！？　隣だぞ」
血殺「嘘だろ～。何で気付かなかったんだ？俺！」

馬鹿過ぎる自分にショックを受けた俺であった。

血殺「で？シャルから理由はきいたのか？」
一夏「ああ、聞いた」
血殺「どう思った？」
一夏「ひでー話だなって思った」

一夏は難しそうな顔をしながら言った。

血殺「お前は親に捨てられたんだってな」
一夏「何でそんなこと知ってんだ？」
血殺「鈴から聞いた」

本当は鈴から聞いていない。
自分でこそこそ調べていただけだ。

一夏「そうなのか」
血殺「俺たちはよく似ているな」
シャル「血殺も親に捨てられたの？」
血殺「正確には売られたかな。両親のエゴのせいで」
一夏「確かに似てるな」

俺は自分で言った言葉にイライラした。
「俺たちはよく似ているな」と言う言葉に。

血殺「唯一違うのはその時にそばに人がいたかいなかったかだな」
一夏「血殺にはいなかったのか？」
血殺「ああ、俺にはあの時も今も大切な人はいない。家族も恋人も親友も」

一夏「俺もう親友だと思っている」
血殺「そう言ってもらえるとうれしいよ」
笑みをこぼした。ウソで固められた笑みを。
一夏「で？シャルはこれからどうすんだ？」
血殺「一旦、ここに残る。そして、フランスに行く」
一夏「フランスにだと！　ふざけるな血殺！」
一夏は俺の胸ぐらを掴んで叫んだ。
血殺「俺は大真面目だ！　シャルも了承した。心配すんな絶対に戻ってくる」
シャル「一夏、血殺を信じあげて」
一夏「わかった」
コンコン
ドアのノック音が部屋に届くと同時に俺たちの背中に冷や汗が出た。
一夏、血殺、シャル「「「！？」」」
セシリア「血殺さん。一夏さんはいらっしゃいますか？」
俺たちは小言で会話を始めた。
血殺「ま、まずいぞ！」
シャル「ど、どうしよう」
一夏「と、とりあえず隠れろ」
セシリア「血殺さん？入りますわよ？」

ドアノブが４５℃回転した。

血殺「ちょっとまった！一夏は今トイレにいるんだ。部屋に入らず少し待ってて」

セシリア「では、少しお待ちしてます」

ドアノブが戻っていく。

俺が時間を稼いでいる間に布団の中にシャルを隠した。

血殺「一夏～。トイレまだ？セシリア待ってるよ！」

一夏「い、今行く！」

俺と一夏は息の合った三文芝居をする。

一夏「セシリアお待たせ」

セシリア「い、いえ。全然待っていませんわっ」

布団の中＝風邪気味

というのが俺の頭の中に浮かんだ。

血殺「い、一夏。俺、シャルの看病するから俺とシャルの飯取ってきて！」

セシリア「デュノアさんは風邪ですか？」

血殺「び、微熱だよ！今寝てるからたぶん大丈夫だと思う」

一夏「じ、じゃあセシリアいこうぜ」

セシリア「そうですわね」

血殺「じ、じゃあな」

バタンッ

嵐が去っていった。

血殺「もう大丈夫だぜ」
シャル「あ、ありがとう」
血殺「一夏は遅いと思うから何かする？」
シャル「あ、あのぉ」
言いづらそうに口を濁らせるシャル。
血殺「ん？」
シャル「さっき話してた血殺の昔の話を聞きたいなぁ」
血殺「・・・・・」
正直驚いた。目を見開いてしまうぐらい意外だった。
シャル「あっ、嫌なら言わなくていいから」
血殺「いや、シャルも聞きたいと思うだろうしこの際全部言うよ」
シャル「あ、ありがとう血殺」
シャルの笑顔は確かに可愛かった。
だけど、お前は俺の同類にはなれない
血殺「でも、一夏が来たら止めるぞ」
シャル「う、うん」
血殺「俺の本当の両親は・・・・・」
俺は千冬に話したことと同じことを全てシャルに話してた。
血殺「これが俺の全てだ」
シャル「血殺は白騎士のパイロットのことが憎い？」

血殺「ああ」

話せば話すほど俺は空気が重く感じた。

シャル「でもそれは間違ってると思う。白騎士のパイロットだって必死に頑張ったんだから」

血殺「でも目的を果たせなかったらやってないのと同じだ」

シャル「・・・・」

黙ってしまった。

強く言い過ぎたかもしれない

血殺「別にもういいさ。俺の名字は自分の人生のことだから」

シャル「どういうこと？」

血殺「俺は本当の名字を知らない。研究所では名前で呼ばれていたんだ。だから自分で名字を考えたんだ。その時は研究所のイメージが強くて研究所の４つの実験を思い出したんだ。俺は実験１つ１つを死神と考えて今の名字の四死神が出来たんだ」

俺は真実の中に嘘を混ぜた。

シャル「そんなに奥深かったんだ」

血殺「でも、今は違う意味だよ」

シャル「えっ！？」

この娘は感情の入れ替わりが激しい。

血殺「今は今までの俺の人生に関係しているんだ」

シャル「何で？」

血殺「1人目は俺を死ぬ寸前まで追い詰めた奴。2人目は俺から先生を奪った奴。3人目は俺の友を奪った奴」
シャル「4人目は？」
血殺「今はいない。しかし、もしかしたらこの学園の誰かが死ぬかもね」

苦笑いで言った。

シャル「それは考え過ぎじゃない？」
血殺「だといいけどな」

最後の一人は俺自ら殺すかもね

コンコン

血殺「は～い」
一夏「持ってきたぞ」
血殺「サンキュー！　一夏」
一夏「じゃあ俺は部屋に戻るな」
血殺「ああ、またな」
バタンッ

一夏は自室に帰っていった。
隣だけど

血殺「シャルって焼き魚食える？」
シャル「う、うん」
血殺「じゃあ食べようか」

俺は食べ始めるが、シャルはトレイを持って硬直している。

血殺「食べないのか？ご飯冷めちゃうぞ」
シャル「そ、そうだね。いただきます」「あっ・・・」
ぽろっ

シャル「あっ、あっ・・・」
ぽろっぽろっ

むちゃくちゃご飯を落としてるし、割り箸も割れ方がおかしい。
俺はあることに気がついた。

血殺「箸苦手なのか？」
シャル「う、うん。練習してはいるんだけどね」

案の定、シャルは箸が苦手だった。

血殺「スプーンもらってこようか？」
シャル「ええっ？い、いいよ、そんな」
血殺「シャルはもっと人に頼れよな」

俺は席を立って、取りに行く準備が出来た。

シャル「うう・・・」
血殺「まあ、最初からなんて誰でも無理だ。少しずつ慣れていくといい」
シャル「じゃ、じゃあ、あの・・・」
血殺「なんだ？」

俺は沢庵をつまんだ。

もちろん立ち食い。

シャル「え、えっと。その・・・血殺が食べさせて」
血殺「・・・・・・・・！？」

あまりにも意外で舌を咬んだ。
だが、衝撃的過ぎて舌を咬んだことさえ感じなかった。

シャル「た、頼ってくれって言ったから・・・」
血殺「わ、わかった。な、何から食べたい？」

俺は静かに着席した。

シャル「そのお魚」
血殺「ああ、鰆な」

俺は鰆の切り身をほぐして少しつまんだ。

血殺「あ、あ～ん」
シャル「・・・あ～ん」
血殺「美味しい？」
シャル「う、うん。おいしい」

久しぶりだったから、身体はついてきているが、頭がついてきていない。

血殺「つ、次は何がいい？」
シャル「次はご飯がいいな」
血殺「あ、ああ」

女子一口ほどのご飯をつまむ。

血殺「あ～ん」

シャル「ん・・・」

あんなこんなでシャルにご飯を食べさせた。

月曜日　朝　教室

セシリア「そ、それは本当ですの!?」

鈴「う、ウソついてないでしょうね!?」

血殺「なんの騒ぎだ?」

シャル「さあ?・・・」

クラス内での異常で盛り上がりを不思議に思った。

女子A「本当だってば!この噂、学園中で持ちきりなのよ?月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君と交際でき、四死神君の手作りお菓子が食べられるんだって」

血殺「へぇ～。そんなことになってるのかぁ～。ちょっと知らなかったなぁ～」

女子C「し、四死神君!?」

背後から前触れもなく現れた俺に話をしていた女子数人が驚いている。

血殺「別に優勝しなくても菓子ぐらい作ってやるが、一夏との交際は無理だと思うぞ」
一夏「俺がどうした？」
女子「「「きゃああっ！」」」

どこから湧き出てきたんだ？　こいつは

つっても、俺も同じなんだけど

一夏「で？何の話だったんだ？俺の名前が出ていたみたいだけど」
血殺「ああ、たとえ話をしていたんだ」
一夏「どんな内容なんだ？」
血殺「ここから先は有料です！」

俺は手でコインマークを作った。

一夏「金取んのか！？一応聞くが、いくらだ？」
血殺「１万」
一夏「たかっ！」
血殺「当たり前だ。時は金なりって言うじゃん」

意味はまったく違うと思う。

一夏「じゃあ止める」
血殺「そうか、じゃあ早いとこ席に座んな。じゃねーと、また人型怪獣に襲われるぞ」

一夏「そ、そうだな」

授業の合間

血殺「ほら、急げ」
一夏「ああ、わかってる」

トイレの帰り道。
俺たち男子は教室からトイレまでかなりの距離があるため、授業が終わったら全力疾走。トイレが終わったら全力疾走。という感じだ。

ラウラ「なぜこんなところで教師など！」
千冬「やれやれ・・・」

曲がり角の先から聞こえてきた声に反応し、角に身を潜める俺と一夏。

千冬「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」
ラウラ「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

血殺「何か言い争ってるな」
一夏「みたいだな」

俺たちはそれを物静かに聞いていた。

ラウラ「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」
千冬「ほう」
ラウラ「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません」
千冬「なぜだ？」
ラウラ「意識が甘く、危機感に疎く、ＩＳをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割られるなど「そこまでにしておけよ、小娘」
ラウラ「っ・・・！」

凄味のある千冬の声にすくんでしまったラウラ。

千冬「少し見ない間に偉くなったな。１５歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」
ラウラ「わ、私は・・・」
千冬「さて、授業が始まるな。さっさと教室に戻れよ」
ラウラ「・・・・・・」

無言のままその場を離れていくラウラ。

千冬「そこの男子2人。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」
血殺「俺じゃああありません。一夏が聞きたいって」
一夏「なんでそうなるんだよ！　血殺！」
血殺「ほんの冗談だ」

あはは、と笑いごまかした。

千冬「そら、走れ劣等生。このままじゃ織斑は月末のトーナメントで初戦敗退だぞ。勤勉さを忘れるな」
血殺「そうだぞ。一夏」
一夏「わかってるって」
千冬「そうか、ならいい」

ニヤリと笑みを浮かべる織斑先生。

血殺「先生。話があるんですが」
千冬「なんだ？」
血殺「放課後に職員室に行くので、また後で」
千冬「わかった」

織斑先生は教師としてではなく、一人の戦士のような感じの顔だった。

血殺「行くぞ！一夏」
一夏「ああ」
千冬「廊下は走るな。・・・とは言わん。バレないように走れ」
血殺「その前にトイレの数を増やしてください」

学園の大きさと男子トイレの数が比例していない。

千冬「贅沢言うな。弱優等生」
血殺「弱って何ですか!?弱って!?」
千冬「ああ、悪かったな。弱優等生」
血殺「もういいや」

文句を言いながら走って行く俺と苦笑いしながら走って行く一夏。

放課後　職員室

血殺「失礼しや～す。織斑先生、お話しがあります」
千冬「ああ、今行く」
血殺「それと部屋を変えましょう。聞かれると困るのは織斑先生ですから」
千冬「わかった」

空き部屋　（毎回同じところの設定）

千冬「で？何の用だ？」
血殺「この間の白騎士事件についてです」
千冬「やはりな、私だと知っているんだろ？」
血殺「ええ。知ってます」

俺は不思議な笑みを浮かべた。
誰もが不思議と思う笑みを。

千冬「なら、聞く事は無いだろ？」
血殺「いえ、聞く事があるんですよ～。実は・・・」
千冬「！！」
血殺「僕はこれについてはよく知りません。だから本人に言ってください。そろそろあの時期なんで」

あの時期はあの人の大切な妹の大切な日のことだ。

千冬「わかった」

血殺「じゃあ、僕はこれで・・・」ドゴォンッ！
千冬「なんだ？」

俺はすぐさま青竜を部分展開して情報を得る。

血殺「どうやら第３アリーナで模擬戦をしているみたいです」
千冬「誰がだ？」
血殺「そこまではわかりませんが、大体わかっています」
千冬「ボーデヴィッヒか」
血殺「たぶんですけどね。僕は先に行って来ます。朱雀展開！」

”次元加速“

第３アリーナ

ラウラ「面白い。世代差というものを見せつけてやろう」

シャルの手がシュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーブレードに捕まっている状況だ。

血殺「シャル！下がれ！」

俺は上空から一気に急降下してラウラに突っ込んだ。

ラウラ、一夏、シャル「！！」

血殺「”レッドライズ“！ｖｅｒライフル」

名を言った瞬間、６０の”レッドライズ“が一つの銃に変わる。

血殺「オーバーショット！」

ラウラ「ちっ！」

俺の銃撃を避けて後退していくラウラ。

ラウラ「また貴様か！　この際貴様も潰してやる！」

血殺「こんな事が２日前にあった気がするのは俺だけか？」

突っ込んでくるラウラ。血殺はそれに対抗するかのようにレッドライズを２０個しまい、翼の４本の剣を抜く。血殺はその４本の剣を２本になるように付けた。見たまんまを言うと前後に刃が突き出ている剣と言える。

ラウラ「貴様が何をしようと私には勝てない！」

血殺「そうかい。だがそれは勘違いだ！」

二刀連流第壱ノ舞　八重桜

ラウラ「！！」

血殺「！！」

千冬「これだからガキの相手は疲れる」
血殺「織斑・・・・先生」

千冬の持っている2本のＩＳのブレードにより2人の剣が止められた。

千冬「模擬戦をやるのは構わん。・・・が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」
ラウラ「教官が仰るなら」

ラウラはシュヴァルツェア・レーゲンを待機状態に戻す。

血殺「自分は最初からそのつもりでした」

俺も朱雀を待機状態に戻す。

千冬「織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」
一夏「は、はい」
シャル「僕もそれで構いません」
千冬「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

保健室

鈴「別に助けてくれなくてよかったのに」
セシリア「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

俺は最後しか居なかったから知らないが、聞いた話だと1対2なのにラウラにフルボッコされてたとか。

一夏「お前らなあ・・・。はぁ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」
鈴「こんなの怪我のうちに入らな　いたたたっ！」
セシリア「そもそもこうやって横になっていること自体無意味　っううっ！」

強がっているが、実際は危ない状況だ。
ＩＳが強制解除される時点で危険。

シャル「好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよ」
血殺「一理あるな」

だけど、怪我をしてるかなんて関係ナッシング。
俺とシャルは年中無休で人を苛めます。

鈴「ななな何を言ってるのか、全っ然わかんないわね！」
セシリア「そ、そういう邪推をされるといささか気分を害しますわねっ！」

感情が面に出過ぎだろ

血殺「はいはい、わかったから」
シャル「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」
鈴「ふ、ふんっ！」
セシリア「不本意ですがいただきましょうっ！」

ずずっとお茶を飲むセシリアと鈴。

一夏「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら・・・・」ドドドドドドッ！
血殺「地震か！？」

ドカーンと勢い良く保健室のドアがぶっ飛ばされ、女子がなだれ込んできた。

女子Ｂ「織斑君！」
女子Ｅ「四死神君！」
女子Ｄ「デュノア君！」
血殺「な、なんだ？　どうしたんだ？」
女子「「「これ！」」」

差し出されたのは一枚の紙。

シャル「な、なになに・・・？」
一夏「？今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締

め切りは・・・？」
女子Ａ「ああ、そこまでいいから！とにかくっ！」
女子Ｇ「私と組もう、織斑君！」
女子Ｆ「私と組んで、デュノア君！」
女子Ｉ「一緒にやろ、四死神君！」

手が四方八方からにょきにょきと出てくる。

まずいな、このままじゃあシャルの正体がばれる。しかし、俺は組みたい奴がいるし、

仕方ない

血殺「悪いみんな！　一夏はシャルと組むらしいし、俺はもう先着がいるんだ！また今度な」
女子Ｃ「先着がいるんじゃ、仕方ないか」
女子Ｈ「まあ、男同士も絵になるし」

さっきの巻き戻しかのように、女子が去っていく。

血殺「悪いな一夏、俺は用事あるからこれで」
一夏「ああ、じゃあな」

用もないのに保健室を退室する俺。

自室

血殺「はぁ、疲れたなぁ。ゆっくり寝よ。月末に大会もあることだし」

ブルー・デイズ／レッド・スイッチ（後書き）

まあまあですな。

それでも一応、しっかり考えました。

口調とかおかしいのはすいません。

では、また次回

ファインド・アウト・マイ・マインド（前書き）

一部分だけエグい部分があります。

6月　最終週

一夏「しかし、すごいなこりゃ・・・」
シャル「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には今のところ関係ないみたいだけど、それでもトーナメント上位入賞者にはさっそくチェックが入ると思うよ」
一夏「そういえば、血殺は？」
シャル「さあ？朝にはもう居なかったから」
一夏「そうなのか、何やってるんだ？　あいつ」
血殺「俺にはいろいろと事情があんだよ！」
一夏、シャル「「！！」」

二人とも誰？って顔をしている。

まあ、無理もない。　メイクで目を一重から二重に変えて、ヘッドホンは外したし、赤のヅラ被ってるし、女のＩＳスーツ着てるからわからなくても無理もない

一夏「もしかして血殺か？」
血殺「おうよ、随分変わるもんだろ？」
シャル「すごい。全くわからない」

あのなシャル、別に感心するところじゃないぞ

血殺「一応、正体を隠している身だからな気をつけないといけないんだよ。それに神崎　花蓮って言う偽名も使ってるしな」

一夏「ふ～ん。そうなのか」

どうでもよさそうに言うな！

シャル「そういえば、血殺って誰と組むの？」

血殺「知らない。わざと抽選にしたから」

一夏「えっ？　なんでだ？」

血殺「その方が女子には公平だから」

まっ、理由はまったく違うけどね

シャル「そろそろ対戦表が決まるはずだよね」

一夏「1年の部、Aブロック一回戦一組目なんて運がいいよな」

シャル「えっ？どうして？」

一夏「待ち時間に色々考えなくても済むだろ。こういうのは勢いが肝心だ。出たとこ勝負、思い切りのよさで行きたいだろ」

一夏の言いたいことの意味がまったく分からないな

血殺「最初も最後も変わんないけどな」

シャル「僕だったら1番最初に手の内を晒すことになるから、ちょっと考えがマイナスに入っていたかも」

血殺「どのみち、手の内は晒すけどな」

ダメ出しされて二人は言葉を失った。

シャル「あ、対戦相手が決まったみたい」

一夏、シャル、血殺「「「えっ？」」」

一夏たちの一回戦の対戦相手。それはラウラと俺のペアだった。

アリーナ

ラウラ「一回戦で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

一夏「そりゃあ何よりだ。こっちも同じ気分だぜ」

試合開始まであと5秒

1　2　3　4

開始。

一夏、ラウラ「「叩きのめす」」

一夏は開始直後の“瞬時加速”を行う。

一夏「おおおっ！」

ラウラ「ふん・・・・・・」

ラウラは右手を突き出し、“ＡＩＣ”《アクティブ・イナーシャル・キャンセラー》を使う。

一夏「くっ！」

ラウラ「開始直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

一夏「・・・そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

ラウラ「ならば私が次にどうするかもわかるだろう」

ガキンッと巨大なリボルバーの回転音が轟き、大型レール砲の初弾が装填される。

シャル「させないよ」

シャルが一夏の頭上からアサルトキヤノンをラウラに向かって放つ。

ラウラ「ちっ！」

シャル「逃がさない！」

後退するラウラに“高速切替”《ラピッド・スイッチ》で呼び出し

たアサルトライフルで射撃する。

血殺「俺もいるんだぜ。シャル！」

今回は青竜を展開している俺がラウラの前に出て青竜のウィングを使い突風を巻き起こして放たれた弾を全て吹っ飛ばす。

血殺「“青き突風”《あおきとっぷう》！　からの“逆鱗”《げきりん》！」

巻き起こした風が炎に変わりシャルと一夏を襲う。

シャル「一旦引くよ一夏」

一夏「ああ」

ラウラ「逃がすか！」

後退するシャルと一夏を追走するラウラ。

血殺「待て！ボーデヴィッヒ」

ラウラ「私に指図するな！」

血殺「言うこと聞かない奴には……仕置きだ！！」

ちょっとキレ気味の俺は”竜の尻尾“《ドラゴンズテイル》を使いラウラを地面に叩き落とす。

ラウラ「貴様！　何をする！」

血殺「それはこっちの台詞だ！　いいか！？　冷静さを失うな！それを失っては勝てるものも勝てない！」

俺は腕を組みながら、見下すような目で言った。

ラウラ「ふん。貴様の指図は受けない」
血殺「なら、御自由にどうぞ。負けたら国に帰ってもらうからな」
ラウラ「では私が勝ったら、貴様がここを出ていけ」
血殺「いいぜ。，，勝ったら‘‘な」

言いたいことだけ言って俺はアリーナの隅に行き、座り込んだ。

血殺「さて・・・ここからが本番だぜ。一夏」

一夏「これで決めるっ！」

”零落白夜“を発動させた一夏は、ラウラに直進する。

ラウラ「無駄なことを！」

ラウラは“ＡＩＣ”で一夏の動きを止めた。

一夏「・・・・ああ、なんだ。忘れてるのか？それとも知らないのか？俺達は　　ふたり組なんだぜ？」

ラウラ「！？」

ラウラは慌てて視線をうごかすが、遅かった。シャルのショットガンが火を噴き、ラウラの大型レールカノンを爆散させた。

ラウラ「くっ・・・！」

シャル「一夏！」

一夏「おう！」

再度、”雪片弐型“《ゆきひらにがた》を構え直しラウラに突っ込んだ。

キュゥゥゥン・・・・・・・・・。

起きたのはエネルギー切れ。

”零落白夜“を使い過ぎたのだろう

一夏「なっ！？ここにきてエネルギー切れかよ！」

ラウラ「限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！」

シャル「やらせないよ！」

ラウラ「邪魔だ！」

援護しようとしたシャルにワイヤーブレードで牽制する。

シャル「うあっ！」
一夏「シャルル！くっ・・・」
ラウラ「次は貴様だ！堕ちろっ！」
一夏「ぐあっ・・・！」

白式から力が無くなり、床へと落ちる一夏。

シャル「まだ終わっていないよ」

シャルは一瞬で超高速状態へと移りラウラとの間合いを縮める。

ラウラ「なっ・・・！“瞬時加速”だと！？。そんなデータは無かった！」
シャル「今、初めて使ったからね」
ラウラ「まさか、この戦いで覚えたというのか！？」「だが私の停止結界の前では無力！」

ラウラは右手を前に”ＡＩＣ“の体勢になるが、後方から射撃を受け体勢を崩す。　その射撃をしたのはギリギリのシールドエネルギーがギリギリ残っていた白式だった。

一夏「これなら“ＡＩＣ”は使えまい！」
ラウラ「こ、のっ・・・死に損ないがぁぁぁっ！」
シャル「どこを見てるの？」

終わったな

シャル「この距離なら、外さない」
ラウラ「”盾殺し“《シールド・ピアース》！」

ズガンッ！！！

ラウラ「ぐううっ！」

ラウラの腹部に、パイルバンガーの一撃が叩き込まれる。

ズガンッ！ズガンッ！ズガンッ！

続けざまに三発を撃ち込まれ、ラウラの体は大きく傾く。

次の瞬間、異変が起きた。

ラウラ「あああああああっ！！！！」

血殺「！？　あれは！　“ＶＴＳ”《ヴァルキリー・トレース・システム》！！」

何故だ？あれの実用おろか研究は行ってはいけないはず

一夏「”雪片“《ゆきひら》・・・・！」

一夏が刀を握りしめ、中段に構えた。刹那、シュヴァルツェア・レ

ーゲンだった黒いＩＳは千冬の太刀筋で、一夏の刀を弾き白式に向かって刀を振り下ろす。千冬の戦法を知っていた一夏はかろうじて避けたが、刃が軽く振れた左腕からじわりと血がにじんだ。そして白式は光となって一夏の全身から消えた。

一夏「うおおおおっ！」

白式は待機状態になったのにも関わらず、ＶＴＳに走って突っ込む一夏。

血殺「何やってんだ！　馬鹿！」

俺は一夏の首を掴んで動きを封じた。

一夏「離せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」
血殺「落ち着け！一夏！　そんなんじゃ見えるものも見えなくなる」
一夏「あいつ、千冬姉と同じ剣術を使ってきやがった。あれは千冬姉だけの技なんだ」

こいつはラッキー
野郎のＶＴＳなら丁度良い

血殺「へぇー。　あいつ、織斑先生の技使うんだぁ～。じゃあ、俺がやる！」
一夏「ふざけるな！血殺！　あいつは俺が！」
血殺「エネルギー切れだろお前」
一夏「くっ！」

一夏は何も出来ない自分に腹を立たせている。

血殺「大丈夫だ！俺の親友は、俺の大切な人は俺が守る！そのかわり、今度はお前が誰かを守れ」
一夏「わかった。ただし、負けんなよ！」
血殺「ああ、わかっている」『行くぜ！青竜！』
青竜『あれをやるのね』
血殺「”青炎龍刀“《せいえんりゅうとう》！」

俺は青竜唯一の近接戦闘の武器を展開する。
”青炎龍刀“は文字通り、青い炎を纏った刀。

血殺「ワンオフ・アビリティー発動！“絶永龍域”《ぜつえいりゅういき》！」

俺の体が竜に包まれ、姿を現すと体そのものが竜のように姿になっていた。

血殺「フッ・・・・」

刹那、俺は黒いＩＳとの間合いを一瞬で詰め、そのＩＳを切り裂いた。そして、黒いＩＳから弱々しい目をしたラウラが現れた。

血殺「やっぱりお前じゃ、一夏には適わなかったな。ラウラ・ボーデヴィッヒ」

そうそう、なんで、龍刀かと言うと

絶永龍域時じゃなければ、ただの刀だからだ

保健室

ラウラ「う、ぁ・・・・・・」

ぼやっとした光が降りているのを感じて、ラウラは目を覚ました。

千冬「気がついたか」
ラウラ「何が・・・・起きたのですか・・・・？」
千冬「ふう・・・・。一応、重要案件である上に機密事項なのだがな」「ＶＴシステムは知っているな？」
ラウラ「ヴァルキリー・トレース・システム・・・」

軍人なら誰もが知っている言葉だ。

千冬「そうだ。ＩＳ条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・全てが禁止されている。それがお前のＩＳに積まれていた」

ラウラ「・・・・・・・・・・」

千冬「操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何より操縦者の意識・・・・いや、願望か。それらが揃うと発動するようになっていたらしい」

ラウラ「私が・・・・望んだからですね」

ラウラは手を強く握り締めた。

手元にあった布団のシーツにしわが出来るほど強く。

千冬「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

ラウラ「は、はいっ！」

千冬「お前は誰だ？」

ラウラ「わ、私は・・・・。私・・・・は、・・・・・・」

言葉の続きが出せないラウラ。

今はラウラ・ボーデヴィッヒというより織斑千冬だからだ。

ＶＴＳを使えばの話だが。

千冬「誰でもないなら、ちょうどいい。お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒだ」

ラウラ「あ・・・・・・・・」

千冬は立ち上がりドアへと向かう。

千冬「ああ、それから」「お前は私にはなれないぞ」

そう、言い残して千冬は立ち去った。

ラウラ「ふ、ふふ・・・ははっ」
血殺「笑う元気がある程なら大丈夫だな」
ラウラ「！・・・四死神・・・血殺」

俺は近くに寄らず、入ってきてすぐ側の壁に寄っ掛かった。

血殺「結局、お前は一夏には勝てなかったな」
ラウラ「ああ、私は負けた。あいつに、そしてお前に・・・」

まあ実際のところ、試合は中止だからあの賭けはなしになるわけだ。

血殺「ふん。やっぱりあいつの言う通りだ」
ラウラ「あいつ？」
血殺「クラリッサだよ。昔、出会って仲良くなったんだ」
ラウラ「まさか、お前に情報提供したのもか？」

ラウラは少し驚いた顔をした。
予想が外れたような顔。
簡単に言えば、少し間抜けな顔だ。

血殺「ああ。　あいつ、お前のことを相当心配してたぞ」
ラウラ「クラリッサめ、余計なことを！」
血殺「そういえば、戦いのためにお前は作られたらしいな」
ラウラ「ああ、そうだが」
血殺「俺は暗殺のために育てられたんだ。ドイツで」
ラウラ「なっ！」

祖国に尽くしているからか、かなり動揺している。

血殺「俺のこの眼帯の下の目は特殊でね、時間と空間を操るんだ」
ラウラ「時間と空間を操るだと！？」
血殺「けど、時間の方のは相手がＩＳを展開していると効果が発生しないし、空間の方は対象が生き物だと意味が無い」

ちょっとぐらい嘘をついても良いか。結局殺らないといけないんだから

ラウラ「だが何故、お前がドイツに」
血殺「親のエゴだよ。金の欲しさに俺を売ったんだ」

研究所で聞いた話だ。真実ではないと思う。

ラウラ「・・・・・・・・」
血殺「だから、俺には家族がいない。でも、クラリッサは家族だと思えるかな」
ラウラ「お前も１人なんだな」
血殺「いいや。１人じゃないさ、一夏が居て、シャルが居る。そして、何よりボーデヴィッヒが居るからな」

ラウラの顔はボワッと真っ赤に染まった。
夕焼けのせいではなさそうだ。

ラウラ「・・・でいい」
血殺「ん？」
ラウラ「ラウラでいい」

少しは距離が縮んだかな？

血殺「じゃあ、俺のことも血殺で呼んでくれよ。ラウラ」
ラウラ「り、了解した」
血殺「じゃあなラウラ。また明日」
ラウラ「助けてくれて礼を言うぞ」
血殺「また助けてやるよ」

そう言って、俺は部屋を後にした。

食堂

血殺「言った通りだろ？」
シャル「確かにね。一夏、七味取って」
一夏「はいよ」
シャル「ありがと」
血殺「ん？なんだ？あれ」

少し離れたところで落胆している女子がいた。

女子C「・・・優勝・・・チャンス・・・消え・・・」
女子E「交際・・・・無効・・・・・・」
女子「「うわぁぁぁぁぁぁんっ！」」

バタバタと数十名の女子が消えていく。

一夏「な、なんだ？」

あれのことか

血殺「！　あれって」
一夏「ん？」

数十名の女子が消えた後に呆然と立ち尽くしている箒がいた。

一夏「あっ！そういえば」

そう言って箒に近づく一夏。

血殺「さて、一夏は箒にどんな風に起こられるかな？俺に殴られる。

シャルは？」
シャル「う～ん。蹴り飛ばされる！」
箒「そんな事だと思ったわ！」
一夏「ぐはぁっ！」

箒の足は迷うことなく一夏の溝にヒットした。

血殺「シャルの予想的中したぜ」
シャル「何かうれしくない」
血殺「まあ、良いじゃん」
真耶「四死神君、織斑君、デュノア君。朗報です！」

俺には微かに見えた真耶の胸が。

血殺「先生・・・・・見えてます」
真耶「えっ？」
血殺「ブラと胸が見えてます。ちなみにDぐらい」

俺は夕食のプリンと唐辛子を食べながら無心で言った。

真耶「し、四死神君！　先生は真面目に」
血殺「真面目に話をするなら尚更でしょ」

つーか、無理して大人の服を着るからいけないだよ！

真耶「し、しかしですね」
血殺「早く本題に入って下さい。食器片付けたいので」

食器と言っても、唐辛子の種が転がっているさらとプリンが乗ってた皿に、スプーンのみ。

真耶「そ、そうですね」
血殺「で？何か？」
真耶「今日から男子の大浴場が解禁になったんです！」

大浴場

一夏「いや～。良い湯だ」
血殺「これが大浴場なんだ。そのままだな」
一夏「そういえば、血殺ってこういうの初めてか？」
血殺「ああ、今まで入ったことがない」

ほとんど無駄な外出はしなかったし、大人数で入るわけでもないから風呂は普通の大きさだった。

一夏「へぇー。日本人なのに珍しいな」

血殺「まあな。それにしても、シャルがいないと静かだな」
一夏「流石に、男が入ってんじゃあな」
血殺「確かにな」
カラカラカラ

なんだ？　今の効果音？　幻聴か？

シャル「お、お邪魔します」
一夏「なっ！？」
血殺「何やってんだ？　シャル」

先ほどの音は幻聴ではなかった。
一夏は顔が真っ赤だ。

ガキんちょだなぁ～

シャル「ふ、２人と一緒にお風呂に入ってみようかなって」
血殺「入ればいいじゃん。風呂は沢山で入った方が楽しいらしいし」
一夏「なっ！血殺！　お前！」
血殺「俺は２人だけに言いたいことがある」
シャル「ぼ、僕も」
一夏「わ、わかったよ」

諦めがついたのか。
あっさり承諾した。

シャル「あんまりこっち見ないで。血殺たちのえっち」
血殺「別に良いじゃん。減るものではないだろ？」
シャル「そ、そういう問題じゃないよ」

シャルまで顔が真っ赤になっている。
そんなんじゃあ、逆上せるぞ

血殺「さて、本題に入るか」
一夏「ああ」
シャル「じゃあ、僕から言うね」

シャルは少しため息をして話を始める。

シャル「僕ね、決めたんだ僕の在り方を。血殺達が教えてくれた僕の在り方をね」
一夏「そ、そうなのか」
血殺「それでいいのか？」

恐らく明日から女子でいるみたいだからな。部屋に制服あったし

シャル「うん、もう決めたんだ」
血殺「なら、もう大丈夫だな。フランスに行っても」
シャル「うん」
血殺「じゃあ、今日出るぞ。もう設計図は出来ている」

本当は二、三日前に出来ていたけど、トーナメント戦があったから止めていた。

一夏「本当に行くのか？」
血殺「心配なさんな」
一夏「血殺は心配しなくても帰ってくるのは知ってるから」

一夏はニヤッと笑った。

血殺「じゃあ俺な、実は明日俺がＩＳを動かせることを公式発表しようと思うんだ」
シャル「で、でも。そしたら研究施設はどうするの？」
血殺「辞めるしかない」
研究材料に成りたくないしね。

一夏「どういうことだ？研究施設って」
血殺「お前には言ってなかったな。俺はＩＳの研究施設で働いているんだ。そんで白騎士以外の日本のＩＳは全部俺が設計したんだ。もちろん白式も」
一夏「白式って血殺が作ったのか？」
血殺「作ったのはうちの部下。俺は設計しただけ」

そう、俺は設計しただけ。

一夏「でも、すげーよ」
血殺「そうかい。　じゃ、俺は上がるよ」
シャル「あ、後でね」
一夏「またな」
血殺「ああ」
カラカラ

ふー。流石に逆上せるな

風呂を出た俺は外出用の服に着替えて自室に戻った。

自室

血殺「さてと、始めるか」

そう言って、俺は1人しかいない部屋で淡々とある準備をした。
その手にはアイスピックが握られている。

血殺「フー・・・・・・・・・・・」

グシャッ！

俺は自分の右眼をアイスピックで刺した。

血殺「ぐっ！　あああぁぁぁぁぁっ！！」

ボトッ！

アイスピックで右眼をえぐり出した。

血殺「グアァァァァァァァァァッ！！！！！」

バンッ！

シャル「どうしたの！？血殺！」

悲鳴に気づいたのか、シャルがドアを突き飛ばして来た。

シャル「大丈夫！？今、先生を呼ぶから」

血殺「・・余計な・・・・・・ことは・・・しないでくれ・・」

シャル「で、でも・・・・・・」

シャルは涙目になっている。

悪いことをしてしまったな

血殺「大丈夫だ。心配すんな」「それより、行くための支度をしてくれ。右眼ならすぐに止血できるから」

シャル「・・・・・うん・・・・・わかった・・・」

血殺「さてと、潰すか」

グチャッ！

俺は自分の目を手で潰した。

自室　２２：００

血殺「じゃあ、行くか」
シャル「うん」
血殺「窓から出るぞ」
シャル「うん」

朱雀展開

俺と同時にシャルもリヴァイヴを展開する。

シャル「バレない？」
血殺「大丈夫。一瞬だから、掴まって」
シャル「う、うん」
血殺「行くよ。”次元加速“」

フランス　１５：００

血殺「一瞬だったろ？」
シャル「本当に一瞬だった」

血殺「じゃあ、行くか。場所わからないから教えてくれ」
シャル「う、うん」

デュノア社前

血殺「じゃあ、入るか」
シャル「うん。あと、最初は召使いの人が出ると思うよ」

ピンポーンとインターホンが鳴る音が響く。

召使い『はい？』

インターホン越しで聞こえてきたのは、男性で２０代くらいの声だった。

血殺「はじめまして、私は日本のＩＳの研究をしている者ですが、社長のデュノアさんに会いたいのですが、よろしいでしょうか？」
召使い『お名前をよろしいでしょうか？』

血殺「四死神　血殺です」
召使い『少々お待ち下さい』

作者より
フランス語が分からないから日本語だけど、血殺は普通に全部の国の言葉を使えます。

5分後

召使い『只今、門を開けますのでお待ち下さい』

ギィィィィィという音を発しながら門が開いてゆく。そして、さっきの声の持ち主が中から出てきた。

召使い「お待たせ致しました。どうぞこちらへ」

個室

召使い「少々お待ち下さい。そろそろ来られますので」

そう言って部屋を出ていく召使い。部屋には2人だけが取り残された。

血殺「どうやら、あの召使いはシャルのことを知らなかったようだな」

シャル「みたいだね」

血殺「だけど、これからが本番だ」

シャル「うん、わかってる」

数分後

ガチャッ

シャル父「すまないね。こちらにも事情があっ・・・・・て・・」

シャルの父はシャルを見た瞬間言葉を失った。

血殺「はじめましてデュノアさん。自分は四死神血殺と言います」
シャル「お久しぶりです。お父さん」
シャル父「どういうことかね？　四死神君」

ずいぶん焦った様子だ。

血殺「ああ、言いそびれてました。私の彼女のシャルロット・デュノアです。まあ、言わなくてもわかりますよね?実の娘なら」
シャル父「な、何故あなたがシャルロットと・・・」
血殺「無駄話はそこまでにしましょう。本題に入ります。　デュノアさん。あなたはシャルを使って織斑一夏の情報を手に入れようとしましたよね?」

俺はわざと話を切った。
なんでシャルと知り合った?なんて聞かれたら答えづらいし

シャル父「・・・・・・・ええ・・・・・・」
血殺「シャルから理由は全て聞きました。そして、家族のことも」
シャル父「・・・・・・・」

シャルの父親は死んだように無言だ。
何も言わない。反論も、謝罪も

血殺「あなたの欲しい物は私が設計しました。もちろん、フランスの第3世代型です。あなたが私の要望に応えてくれるなら渡しましょう」
シャル父「一体、何をすればいい？　いくら出せば譲って貰える！？」

金はもういらない。金で手に入らないものがあることは俺が一番よ

く知っている

血殺「簡単です。もう二度とシャルを道具として扱わないでください。そして、シャルは今まで通りの生活をさせてあげてください」

シャル父「わかった」

血殺「では、これがその設計図です」

血殺が設計図を渡した瞬間、ドアが勢いよく開けられた。

シャルの父親と同年代ぐらいの女性。おそらく、本妻の人だろう。

婦人「あなた！なんでこんな泥棒ネコの娘の男の言いなりになってるの！？」

シャル父「お前・・・・」

血殺「では、僕らはこれで失礼します。夫婦喧嘩に巻き込まれたくはないので」

俺とシャルが立ち上がって去ろうとした時、婦人が俺の腕を掴む。

婦人「あなた、何様のつもりなの？」

血殺「あんたこそ、何様のつもりだ？　あんたの人生は俺が握っていると言うのに。自分の立場がわかってないだろ？」

婦人「ふん。あんたに助けられるぐらいなら、不味いご飯を食べた方がマシね」

意気込みは良し

だが、相手がひよっこではな

血殺「じゃあ、今すぐ務所にぶち込んでやろうか？」

婦人「なっ・・・・・！」

血殺「自分だけじゃ何も出来ないくせにえらそうなこと言ってんじゃねー！」
婦人「・・・・・・・・・・」
ほんの少しキレただけで、金魚みたいに口をパクパクさせ、何も言わなくなった婦人。
血殺「では、僕らはこれで帰らさせていただきます。学校に遅れると面倒なので」
シャル父「あ、ああ、ではな」

デュノア社前

シャル「急に怒鳴るからビックリしちゃった」
血殺「全然キレてなかったけどな」
シャル「え？そうなの？」
血殺「ああ、全くな」
正直、本気で怒ったことなどないけどね
シャル「じゃあ、帰ろっか」
血殺「そうだな。朱雀展開！」

”次元加速“

自室　１１：３０

血殺「はあ、疲れた。もう寝ようぜ？」
シャル「うん、そうだね」
血殺「おやすみ、シャル」
シャル「おやすみ、血殺」

次の日　食堂

女子Ａ「昨日、フランスの第３世代型が出来たんだって！」

女子Ｃ「あっ！それ知ってる！　日本人が設計図を渡したんでしょ！」

女子って情報が回るのが早いな。まっ、いっか。教室行こ

教室

真耶「き、今日は皆さんに転校生を紹介します」

ガラガラッ

入って来たのは女子の制服を着たシャルだった。

やっぱりか

シャル「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」
真耶「ええと、デュノア君はデュノアさんと言うことでした」
女子Ａ「え?デュノア君って女?」
女子Ｄ「おかしいと思った!美少年じゃなく美少女だったわけね」
女子Ｂ「って、四死神君!同室だから知らないってことは・・・」

まずい!感づかれた!

女子Ｆ「ちょっと待って!確か、昨日って男子が大浴場使ったわよね!?」

あっ、逃げる準備しよう

バシーン!

ドアを突き破ってきたのは鈴だった。

鈴「一夏ぁぁぁぁっ!血殺ぅぅぅっ!!」「死ね!!」

鈴はＩＳアーマーを展開して、衝撃砲を放つ。

あっ、間に合わない
死んだなこれ
右眼があればなぁ

血殺「・・・あれ？死んでない？」

俺たちを守ったのは意外にもラウラだった。

血殺「なんだ。ラウラもう大丈夫な・・・・・」

ラウラは俺の胸ぐらを掴み、自分の唇に俺の唇に重ねた。

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや。それはないから、夢に違いない。そろそろ起きろ俺！

そんな風に思っている俺だったが、現状は変わらなかった。なぜな

ら、現実だから。

いや。それだけはあってはならん！　朱雀達に殴られるもん！　絶対！

ラウラ「お、お前は私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」
血殺「・・・？嫁？　婿じゃなくて？」
シャル「今はそんな事言ってる状況じゃないよ？」

待て待て待て！　リヴァイブを展開するな！　そして狙うな！

シャル「バイバイ」
血殺「ギャァァァァァァッ！！！」

ファインド・アウト・マイ・マインド（後書き）

最後の方が少しテキトーになってますが、まあ頑張りました。

では、また次回

海に着いたら十一時！（前書き）

小説を2話分使って作りましたが、字数は今までとほとんど変わりません。

海に着いたら十一時！

朝　自室

血殺「ん・・・・・・」

さすがに先日の疲れは取れないか

ふに

なんだ？　今の効果音？　作者の書き間違えか？　そういえば、さっきから変な物が足に当たってるな。　気のせいか？

ふにふに

違う！　何かいる！　だ、だが、朱雀達を出した覚えがないな。これは何だ？

ふにふにゅっ

ラウラ「ん・・・・・・・・」

今の声はラウラか!?　めくって見ればいいか。　誰もいない事を願う

ガバッ！

めくった矢先に見えたのは、全裸で布団の中でまるまるラウラだった。

バサッ

げ、幻覚だ！　絶対そうだ！　疲れているんだ！

ガバッ！

俺は一度布団を掛けもう一度布団をめくる。

血殺「幻覚であって欲しかった」

ラウラ「ん・・・。なんだ・・・？朝か・・・・・・？」

全力全開でコイツを叩き斬りたい

血殺「なんでいるんだよ！？　しかも全裸で・・・・・」

ラウラ「夫婦とは包み隠さぬものだと聞いたぞ」

血殺「クラリッサにか？」

ラウラ「ああ、そうだが」

訂正、コイツじゃなくて野郎を叩き斬りたい

血殺「最近は嫌なこと続きだなぁ。まあ、考えるだけ無駄か」

ラウラ「日本ではこういうのが定番だと聞いたが・・・違うのか？」

血殺「ふ～ん。そういうことか」

ドンッ！

俺はラウラを押し倒て、ラウラに覆い被さるような大勢をとる。

ラウラ「な、何をする気だ！？」

血殺「お前の言ってた。定番とやらをやってやろうかなって、でも、気をつけろよ。結構キツいから特に女の方は」
ラウラ「や、やりたければやればいい」

意気込みは良し。だが相手がひよっこではな。

血殺「残念だが俺がお断りだ。　もうちょい胸が大きくなったな」
ラウラ「む、無理だ！」
血殺「じゃあ、これはお預けだ」

ラウラの上から離れた。

ラウラ「なっ！」
血殺「お前は急げよ。今日のＳＨＭは織斑先生だからな」
ラウラ「そ、そうであった！」

まっ、俺は遅れても全く問題ないがな。しかし、このアドバンテージはとてもデカい。普通は授業を受けたり提出物を提出しないといけないが、何もしなくとも成績は誰よりも高いと言うことはな

血殺「さてと・・・飯食いに行くぞラウラ」
ラウラ「ああ」

俺たちは着替えて食堂に向かった。

食堂

血殺「さてと、何を食おうかな～」
ラウラ「私はパンとコーンスープにしよう」
血殺「じゃあ、俺は塩ラーメンにしお」

さあ、感づけ！　四死神　血殺と塩ラーメンの奏でる回旋曲（ロンド）で！

p. s［塩としおをかけただけです］

ラウラ「変なギャグを言うな」
血殺「た、たまたま、なっちまっただけだ！俺は悪くない！」

ぐっ！残念な子供のように見やがって！　さっきのお前もこんな感じだったぞ！

そんな事を考えながら、食券を出してラーメンを受け取った。

血殺「あの席空いてるからあそこに座ろう」
ラウラ「そうだな」

ラーメンが乗ったお盆を持って行き、席に着いた。

血殺「いただきます」
ラウラ「なんだ？その言葉は？」

ほう、いただきますを知らないのか

血殺「ご飯を食べる時に言う言葉。まあ、儀式みたいなもんだよ」

ラウラ「そうなのか」

そろそろ聞いておくか

血殺「1つ聞きたいんだが」

ラウラ「なんだ？」

血殺「先日言っていた。〈お前は私の嫁にする！〉ってどういう意味？」

あの日以来からラウラがぶっ壊れたからな。

ラウラ「日本では、気に入った相手のことを〈俺の嫁〉とか〈自分の嫁〉とか言うと聞いたぞ」

血殺「あのバカが！　変なこと吹き込みやがって！」

今度、あいつの飯に放射能セシウムでも入れてやるか

ラウラ「違うのか？」

血殺「少しな」

少し？　全く違うな。

ラウラ「では、どこが違う！？」

血殺「ただ気に入っている相手に〈俺の嫁〉とかを使うのはあってる。だが、付き合いたい相手や結婚したい相手にはちゃんとした言葉があるんだよ」

たぶんこれであってるはずだ。

ラウラ「そ、そうなのか！？」

血殺「それに、相手に〈お前は私の嫁だ〉なんて言わないぞ」

ラウラ「な、なんだと！」

血殺「ごちそうさま。じゃあな、遅れるなよ」

話をしている間に食べ終えた俺はゆっくりとその場を離れた。

早いとこ、教室に行くか

教室

少し早く着いたな

プルプル

血殺「もすもす？　ああ、お久しぶり。　え？黄竜のテストをする！？　前にも言ったけど、俺はもう2度と黄竜は使わないから　は？予備システム？そんなもん作ったのか！？　別に朱雀達を部分展開すればいい話だし。　黄竜専用の武器ねぇ～。　まっ、考えておくよ。　ああ、じゃあね」

束さんも無理が多い人だ

白虎『だってよ。どうすんの？　血殺』
無理矢理コンタクトを開いた白虎が聞いてきた。

血殺『もらっても使わなければ良い話だ』
玄武『使わなければならない時が来たら？』
青竜『それってどんな時？』

黄竜を使わなければならない時ねぇ

朱雀『例えば、血殺にとっての大切な人を守る時とか』
血殺『それは無いだろ。みんな強いから』
白虎『強いって言っても私達の初期設定に負けるような奴らじゃん』
玄武『一理ある』

お前らは俺が改造してやったからだろ

青竜『さすがに大丈夫だろ』
朱雀『どうだろ？ゴーレムに遅れを取るようじゃわからないわよ』
血殺『いざという時は使うさ。その前に黄竜とのコンタクトを取れるようにしないと』

黄竜とのコンタクトを最優先しないとな

白虎『え？黄竜の中にもう魂が入ってんの？』
朱雀『束がそう言ってたじゃない。忘れたの？』
白虎『興味の無いことは忘れるからね』

俺は大切なことばかり忘れていくよ

青竜『それヤバいよ』
玄武『認知症ってやつ？』

認知症ってもっと違う意味だった気がする。

白虎『いやいや、さすがに早すぎでしょ』
血殺『じゃあ、先日の大会で俺と組んだ奴のＩＳ名は？』
白虎『興味無いから忘れた』

こいつはマズいな。

青竜『ヤバい』
朱雀『ヤバいわね』
玄武『ヤバすぎでしょ』
白虎『あー！うるさい！うるさい！』
血殺『白虎がキレたことだし、コンタクトを終了するか』

白虎がキレると数時間はうるさいからな。

朱雀『うん。またね～』
青竜『ｍｅも早く切ろ』

玄武『じゃあね～』
白虎『逃げるな！』

すぱぁんっ！

教科書で頭を上手く叩いた良い音が廊下から響く。

血殺「なっ、なんだ！？」

廊下に視線を送るとシャルと一夏が鬼教師にこってり怒られていた。
それを良いことに箒とラウラが後ろから教室に入ってくる。

千冬「デュノアと織斑は放課後教室を掃除しておけ。２回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」
一夏、シャル「「はい・・・・・・」」

キーンコーンカーンコーン

チャイムが鳴りいつも通りＳＨＭが始まる。

千冬「四死神」
血殺「はい。なんですか？」
千冬「お前は本当に余計なことをしてくれたな」

余計なことと言えば、あれのことか

血殺「フランスの第３世代型の設計図を提供したことですか？それとも、２人目の男性ＩＳ操縦者がＩＳ学園にいることを公式発表したことについてですか？」
千冬「両方だ！　今、学園に政府からの問い合わせが幾つも来てい

る」

別に良いじゃん
どうせはバレる事だし、
フランスの第三世代は俺らの物になるんだから

まあ、一応反省してるフリをしておくか

血殺「だから、泣いて謝れと？」
千冬「そこまでは言わん。ただ、そういうことをするなら一言言え
先生達も対応をするのに時間がかかるからな」
血殺「わかりました。以後気をつけます」
千冬「それでいい」

早いとこ、この学園とはおさらばしたいな

女子A「え？四死神がフランスに第3世代型の設計図を渡したの？」
血殺「ああ、そうだよ。他の奴らには言うなよ！」

朝からこんなことが有りながらもいつもと同じ生活が始まる。

放課後

一夏「うーん、楽しいな」
シャル「え？」
一夏「いや、楽しいな。掃除は。特に普段使っている教室の掃除だと余計に」
シャル「そ、そう？一夏って変わってるね」

今に始まったことではない。

血殺「おっ！頑張ってんじゃん！」
一夏「血殺か。何しに来たんだ？」

おうおう、一夏くんは俺に手伝わせる気まんまんですか

血殺「ちょっとシャルに話があってな」

シャル「なに？　血殺」

血殺「付き合ってくれないか？」

シャル「え？」

週末　日曜日

血殺「まあまあの天気だな」

天気予報では快晴だった気がする。

シャル「・・・僕の夢が砕け散る音を聞いたよ・・・」

血殺「ん？　どうした？シャル」

今のシャルはとてもヤバい状況だ。ＲＮの魔王降臨時のＮさん並みに

シャル「血殺って一夏並みに鈍感だよね」

いえいえ、あの唐変木　ｏｆ　ＫＩＮＧには負けますよ

血殺「もしかして、〈付き合って〉を交際の意味で捉えちゃった？」

シャル「・・・・・うん・・・・・」

血殺「あははは、可愛いなシャルは。でも、今のシャルは俺の好み

とは違うかな」

違いすぎるね。俺の好みは天涯孤独並みの孤独感がある人じゃないとね

シャル「血殺はどんな人が好みなの？」
血殺「うーん。昔の彼女みたいな人かな」
シャル「昔の彼女？」
血殺「ああ」

彼女には姉が居たけど、彼女自身は華音のクローンだったからな。

シャル「もしかして、引きづってんの？」
血殺「少しね」
シャル「ふーん。そうなんだ」
血殺「そろそろ着くな。ほいっ」

そう言ってシャルに手をさしのべる。

血殺「手、繋ぎなよ。危ないしシャルもその方がいいだろ？」
シャル「あ、う、うん」
血殺「まずは水着売り場から行くか」
シャル「うん」

てくてくと歩いて行く俺たちであった。

血殺「えーっと、水着売り場はここだな」
シャル「血殺はさぁ。・・・僕の水着姿、見たい？」
血殺「さあ、どうでしょう？」

正直言うとどっちでも良い。

シャル「血殺のイジワル・・・」
血殺「あははは、可愛いなシャルは」「じゃあ、別れるか。男性と女性だと売り場が違うし」

パッと離される手にシャルは残念そうな顔をする。

血殺「また、後で繋いでやるよ」
シャル「え？」
血殺「じゃあ、また後でな」
シャル「う、うん」

血殺「さてと、何色にしようかな」
白虎『どうせ、あんたは赤を選ぶんでしょ？』
血殺『じゃあ、赤にしよ』
朱雀、白虎、玄武、青竜『『『私の分も買ってよ』』』
血殺『後でな』

玄武や青竜が一人称で『私』を使うなんて珍しいな。

数分後

血殺「ちょっと早すぎたかな」
シャル「あっ！血殺！」

どうやら、シャルの方が俺よりも早かったらしい。

血殺「早いなシャル。もう決まったのか!?」
シャル「いや、血殺に選んで欲しくて」
血殺「わーった。俺も行くよ」

正直ダルいが、仕方ない

日曜日だからかわからないが、俺の眼には何人かの女性客の姿が見えた。

女性「そこのあなた」
血殺「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
女性「男のあなたに言ってるのよ」

俺……か…

血殺「・・・・・何か用?」
女性「そこの水着、片付けておいて」
血殺「嫌だね。自分で片付けな! おばさん」

俺は二十四時間、どこの馬の骨かも分からない奴にも喧嘩を売るのが趣味です。

女性「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

あーあ、だるっ。 この世もずいぶん変わったなぁ。 ＩＳが発表されてから男と女の立場はとても変わった。 簡単に言ってしまえば、女が「いきなり暴力を振るわれた」なんて言ってしまえば言われた男は捕まる。 男でＩＳが使えると言ってもそれは変わらない。

そして今現在、女性が警備員を呼んでいる。

仕方ない。相手には捕まってもらうか

血殺「白虎を朱雀を展開しつつ召喚」

光の粒子が人になってゆく。

白虎「なんの用？」

血殺「俺の左眼を殴れ。あざが出来るくらいの強さで」

白虎「わかった」

ガンッ！！

白虎「じゃあ、私帰るから」

血殺「ま、またな」

いって～！超痛い！だが、耐えろ俺！

女性が男の警備員を連れて戻ってきた。

女性「いきなり暴力を振るわれたんです！」

他の言葉は思いつかなかったのかよ。ばーか

警備員「ちょっと君。署の方までご同行を」

血殺「はあ？なんでだよ！　殴られたのは俺だ！見ろこれ！あざになっちまったじゃねーか！」

さっき白虎に殴らせた目を見せた。

警備員「どういうことだね？」
女性「わ、私は知らないわ」
警備員「では、あざに手を合わせてもらえますか」
女性「ええ、良いですよ」

強がっていた女性はあざと手の大きさが重なり、顔を青ざめた。

女性「そんな私じゃないわっ」
警備員「署までご同行を」
血殺「ニヤッ」

手の大きさが合ってるなんて当たり前だろ。なんせ、朱雀の手は大きさを自由に替えられる手なのだから。さてと、あざを治すとするか

朱雀の武器は大きさ、質量、火力全て違う。そのため、手の大きさがオールマイティーに替えられるようになっている。

シャル「大丈夫？血殺」
血殺「ああ、悪い。心配させちまったな」
シャル「ううん。大丈夫だよ」

シャルは笑顔で笑った。
シャルの笑顔はかわいいと思う。

思うだけ

血殺「そっか。なら良かった」
シャル「えっと、水着を見てくれるかな？」
血殺「ああ」

シャル「えっと、ど、どうかな？」

シャルが今着ている水着はセパレート？とワンピースを足して二で割ったような水着だ。

色はイエローという組み合わせなわけだが、シャルはオレンジやイエローが好きらしい。

血殺「良いんじゃないか。リヴァイヴの色に似てるし」

シャル「じ、じゃあ、これにするね」

血殺「ああ」

シャルの着替えに待っている間に俺は織斑先生に一夏、山田先生を見つけた。

血殺「よう。一夏」

一夏「よう。血殺、なにしてんだ？」

血殺「水着を買いに来たんだよ。一夏は？」

一夏「似たようなもんだ」

まさか水着を買いに行くだけなのに年上の女性を二人もナンパする

とは。
やるな。一夏

シャル「お待たせ血殺」
血殺「おう、早かったな」
シャル「ま、まあね」

俺とシャルのやり取りに織斑先生が口を挟んできた。

千冬「ほうほう、まさかお前らが付き合っているとはな」
血殺「妬いてるんですか？」
千冬「そんなわけあるか、馬鹿者」
真耶「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。デュノアさんもついてきてください」
シャル「あ、はい」

シャルを連れてどこかへ行く山田先生に呆れている織斑先生。

千冬「・・まったく、山田先生は余計な気を遣う」
一夏「え？」
千冬「言っても仕方がない、か。一夏」

俺も楽にするか

一夏「な、なんですか？織斑先生」
千冬「今は就業中ではないからな、名前でいい」
一夏「わ、わかった」
血殺「で？いったい何の用だい？ちー姉」

山田先生が気を遣ったってことは何かあるんだと思う

千冬「お前にそう呼ばれるのは初めてだな。血殺」
一夏「え？　どういうこと？」

一夏の頭の上にハテナマークが沢山浮いている。

血殺「ああ、まだ一夏には言ってなかったな」
千冬「これから、こいつもうちに住むことになった」
一夏「ふーん、そうなのか。・・・・・・・え？　なんで？」
血殺「束さんに迷惑をかけないためにだよ。もしかしたら、発信機を付けられる場合があるかもしれないから」

まあ、束さんがどうなろうと知らないけどね

千冬「うちならバレても大丈夫だろ」
一夏「なるほどな」
血殺「というわけでよろしくな。　一夏」
一夏「こちらこそよろしくな。　血殺」

俺と一夏は俺たちのオリジナル挨拶をした。

千冬「あいさつはそれくらいにしてお前達に聞きたいことがある」
血殺「何？」
千冬「どっちの水着が良いと思う？」

ちー姉が見せてきたのは、スポーティーでありながらメッシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出している黒水着と一切の無駄を省いたかのような機能性重視の白水着。

俺は黒かな、白だと白虎と被るし

一夏「・・・・・白の方」

一夏は少し戸惑いながら言った。

内心では黒を評価しとるし

血殺「俺は黒の方が合ってると思う」

千冬「2人とも黒の方か」

一夏「いや、白の「うそをつけ。お前が先に注視していたのは黒の方だったぞ。　昔から、お前は気に入った方を注意深く見るからな。すぐわかる」

なんという観察力。さすがブリュンヒンデ。見るところが違う

ブリュンヒンデはＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』で優勝した者のみが与えられる称号の名だ。

千冬「おい、血殺！」

血殺「なんだい？ちー姉」

千冬「お前は女を作らないのか？」

ドストレートだな。　おい

血殺「今でも大変なのにこれ以上作ったら恨まれるよ」

千冬「ほう、もうお前には女がいたとはな」

血殺「でも、あれらは女とはほど遠いな」

ＩＳだしね

千冬「ラウラはどうだ？　みんなの前でキスした仲だろ？」
血殺「確かに可愛いとは思うけど、クラリッサの情報に振り回されすぎかな」
千冬「つまり、無理というわけか」
血殺「これからの伸びによるかな」
千冬「ふん。わかったような口を」

ニヤニヤ笑いながら言ってきた。

血殺「一応わかっているつもりだよ。じゃあ、俺はこれで、また後で」

さてと、こいつらの水着を買って帰るか

自室

血殺「やっと届いたか」

置いてあったのは中くらいのダンボール箱が３つだった。

血殺「さて、中身の確認をするか」

俺は豪快にダンボール箱を破壊して中身を確認する。

血殺「１つ目の箱には銃が７つに弾倉が５０近くで、２つ目は缶ビールが３０、３つ目は煙草か。あっちの方の煙草嫌なんだよなぁ、

自分で巻かないといけないから」

文句を言いながら煙草とビールを鞄の中につめる。

血殺「これでよし！　寝るか」

臨海学校　初日

千冬「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。従業員の仕事を増やさないように注意しろ」
全員「「「よろしくお願いしまーす」」」」

そんなこんなで学校の人間がぞろぞろと旅館に入って行く。

血殺「さてと、俺らの部屋を探すか」
一夏「そうだな」
千冬「織斑、四死神、お前らの部屋はこっちだ。ついてこい」
一夏「えーっと、織斑先生。俺達の部屋ってどこになるんでしょうか？」
千冬「黙ってついてこい」

部屋ついたら、一夏に見つからないように朱雀達を出すか

千冬「ここだ」
一夏「え？ここって・・・・・・」

ドアには教員室と書いてあるだけだ。

血殺「何故、教員室なんですか」

千冬「個室にするという話もあったのだが、それだと就寝時間を無視して出歩く者が出るからな」「結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれとは近づかないだろう」

魔王が考えそうなことだ。

血殺「つまり、俺らは寝ている間も死と隣り合わせというわけか」

一夏「そういうことだな」

俺と一夏はうんうん。と首を縦に振った。

千冬「お前らなら何時でも殺せるさ」

血殺「ん～。参ったなぁ、どうやってあいつらを出そうか」

千冬「安心しろ。ほとんど誰も出入りはしない」

血殺「そうなんですか。なら軽く安心です」

そうして俺たちは部屋に入る。

一夏「おおー、すげー」

血殺「トイレと風呂場があるってことはルールは学校と同じか」

千冬「ああ、そうだ。大浴場も使えるがお前達2人は時間交代だ。本来なら男女別になっているが、お前達2人のために全員が窮屈な思いをさせるわけにはいかないからな」

つまり、この宿は貸し切り状態と言うわけか。

血殺「まっ、俺は部屋の風呂しか使わないけど」
千冬「さて、今日は一日自由時間だ。荷物を置いたし、好きにしろ」
一夏「えっと、織斑先生は？」
千冬「私は他の先生との連絡なり確認なり色々とある。しかしまあ・・・・」ごほん
軽く咳払いする織斑先生。

千冬「軽く泳ぐくらいはするとしよう。どこかの弟達がわざわざ選んでくれたものだしな」
一夏「そうですか」

人に選ばさせておいて使わなかったら、なぶり殺しにする気まんまんだぜ

血殺「一夏、先に行っててくれ。俺も用事があるから」
一夏「わかった」

バタンッ

一夏が部屋を出て行き、俺と織斑先生だけになった。

血殺「じゃあ、出すぞ」

俺は朱雀達を出す。

千冬「しかし、凄いな」
血殺「じゃあ、風呂場で着替えてきて」
朱雀、白虎、玄武、青竜「「「「うん」」」」

四人は風呂場へと向かった。

千冬「あいつらになんて説明するつもりだ？」
血殺「友達って言い通します」
千冬「その辺は自己責任だから、私は知らないがな」

最低な義姉さんだな

血殺「りょーかい」
朱雀「血殺、準備出来たよ」
血殺「じゃあ、俺は着替えてくるから先に海に行っててくれ」
朱雀「わかった」

さて、俺も着替えて行くか

浜辺

血殺「海なんて久しぶりだな」
白虎「さっさと行こうよ」
血殺「わかったから引っ張るな」「つか、砂あっつ！！」
青竜「私たちは大丈夫だけど？」
血殺「お前らはＩＳだからだろ」

つーうか、周りの女子がガン見してんだけど！

と言うより、キョトンとしている。

一夏「よう。血殺」
血殺「チース。一夏」

俺のおかしな様子に気づいたのだろう。

一夏「血殺、一つ いいか」
血殺「なんだ？」
一夏「その女子４人誰だ？」

ビンゴだった。

血殺「あー、えーっと・・・・・」
朱雀「私たちは血殺の友達よ」

俺の右腕と腕を組んでいる朱雀が言った。

血殺「そ、そんなとこだ」
朱雀「私は神崎花蓮よ」
白虎「姉の神崎華音よ」
玄武「ｍｅは藤沢有華」
青竜「僕は魅詠千鶴」

ナイス！　みんな

一夏「へぇー。そうなのか」
血殺「！　じゃあ、俺らはあっちにいるから。またな」
一夏「ああ」

は朱雀たちを連れ海に近づく。

血殺「さっきはサンキューなみんな」
白虎「じゃあ、今度パフェ奢って」
血殺「時間があったらな」
玄武「それにしても、よく思いついたね。昔の名前を使うなんて」
朱雀「まあね」
青竜「さーて、泳ご」
血殺「先に泳いでてくれ。ちょっと用事がある」
青竜「わかった」

海に向かう４人を眺める血殺。

（俺がみんなを巻き込んでしまったんだ。できる限りの償いをしなければ）

シャル「あ、血殺。ここにいたんだ」

血殺「よう。シャルと・・・・・・なんだ？それ」

血殺の眼に映ったのはシャルとバスタオルの化け物だった。

シャル「ほら、出てきなってば。大丈夫だから」
ラウラ「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・」
血殺「その声はラウラか・・・何やってんだ？お前」
シャル「水着が恥ずかしくて見せられないんだって」
血殺「なるほどな、じゃあシャル、俺らだけで遊ぼうぜ」
ラウラ「な、なに！？」
シャル「うん、そうしよ、血殺」
ラウラ「ま、待てっ。わ、私も行こう」
血殺「その格好でか？」
ラウラ「ええい、脱げばいいのだろう、脱げば！」

一体何枚のバスタオルを脱いだのだろう、全身に巻いていたバスタオルが一気に宙を舞う。

ラウラ「わ、笑いたければ笑うがいい・・・・・」
血殺「あははは。似合ってんじゃん。可愛いよ」
ラウラ「なっ・・・・・！」
青竜「血殺、何してんの？」
血殺「よう、青じゃなかった千鶴。何の用だ？」
青竜「花蓮がやきもち妬いてる」
血殺「何でだよ。ただ話してるだけだろ」
青竜「さあね」
シャル「あの～。・・・・・こちらの方は？」
血殺「ああ、自己紹介がまだだったな。こいつは魅詠千鶴って言ってただの友達だよ。　千鶴、こいつらはシャルロット・デュノアとラウラ・ボーデヴィッヒだ」

シャル「初めまして。シャルロット・デュノアです」
青竜「こちらこそ初めまして。シャルロットちゃん」「ん！　血殺、さっきの男の子がいるよ」
血殺「あっ、ほんとだ。一夏！どうしたんだ！？」
大声を出して気づいたのか、一夏が向かってくる。
一夏「今、ビーチバレーのメンバーを集めてんだ」
血殺「俺らが加わろうか？」
一夏「マジで！？サンキュー」
一夏たちは駆け足でやる場所に向かった。
＊これから出てくる女子は名前がわからないのでアニメを見てください。のほほんさんのみ名前が出てきます。
血殺「もう準備が出来てる」
女子Ａ「んじゃ、お遊びルールでいいよね。タッチは三回まで、スパイク連発禁止、キリのいい１０点先取の１セットね！」
血殺「足は？」
女子Ａ「拾う時のみあり」
一夏「おう。じゃ、そっちのサーブで」
血殺「じゃあ、俺、一夏、千鶴の３人でいいな？」
千鶴「うん」
一夏「おう」
女子Ｂ「ふっふっふっ。７月のサマーデビルと言われたこの私の実力を・・・見よ！」
初っぱなからジャンピングサーブを打ち出した。
血殺「千鶴、高さ３ｍの右斜め前に上げて」

千鶴「わかった」
血殺「５ｍｍ足りない」
千鶴「うっさい！」

蹴られそうだから俺は跳んだ。

血殺「まっ、いっか」

隅を狙ったスパイクを放ち、点が入った。

のほほん「うっわー。しっしー上手い」

しっしーって何？　子供がトイレに行きたい時に言いそう

血殺「俺らがいるとすぐに終わるぞ」
一夏「何でだ？」
青竜「僕たちは元バレー部なの」

中学の頃は五人共スタメンだったな。

女子Ａ「えっ！？そうなの？」
女子Ｂ「じゃあ、２人は抜けてデュノアさんとボーデヴィッヒさんか入れば良いんじゃない？」
血殺「それもそうだな。じゃあ、後はよろしくなシャル」
シャル「う、うん」
血殺「さて、あいつらの所に行くか」
千鶴「そうだね」

白虎「遅い！！」
血殺「何で白虎に怒られないといけないんだ？」
玄武「ｍｅたち、ずっと待ってたのに」
血殺「いや、俺は聞いてないぞ。そんなの」

初耳だよ。待ってたなんて

朱雀「ていうか、青竜まで何してたの！？」
青竜「ビーチバレー」
血殺「もう良いだろ？戻すぞ」

回収したし飯食いに行くか、昼間は寝よ

１９：００　屋外

朱雀「みんなとご飯食べなくて良かったの？」
血殺「ああ」

そろそろ馴れ合いは止めておいた方がいいからな。

青竜「もうお遊びは止めて仕事をするの？」
血殺「いや、まだその時じゃない」
白虎「今回のは大変ね」

アメリカの第三世代のＩＳの奪取。
まあ、束さんがいろいろとやっといてくれるから楽なんだけどね。

玄武「スコールはいつも自分勝手すぎ」
朱雀「仕方ないといえば仕方ないんだけどね」

不意に女性が話掛けてきた。

？？「あなたが四死神君かな？」
血殺「誰だ？あんた」

紺色で長い髪の女性。
まるで自分を見てるような感じだ。

青葉「天神（あまがみ）　青葉（あおば）　あなたの実の姉よ」

血殺「なっ！　何だと！？」

こいつはあのグループのメンバーか

青葉「まずは私たちの過去を言いましょうか」

青竜「私たち？」

青葉「うるさいわよ。セイリュウ」

血殺「こいつらには手を出すな」

一瞬だけだが、殺意を感じた。

青葉「わかったわ。では、はじめましょうか。　私たちは3人兄弟だった。　一番上が私、二番目は紅葉（もみじ）と言う子、三番目があなたなの。　本来ならあなたには血殺ではなく紅葉（こうよう）と言う名前がつくはずだった。　しかし、母さんは死んだあなたを産んだ瞬間死んだの」

血殺「何！？」

正直言えば知っていた。研究所の連中から聞いた。

青葉「そして、狂った父さんはあなたが血で母親を殺したと思い血殺と言う名前がつけられた。　だけど、それだけじゃ収まり切らなかった父さんは私たち3人を売り飛ばした。私はロシア、紅葉はアメリカ、あなたはドイツにね」

朱雀「血殺！こんな話信じちゃ駄目！」

信じたくはない。が、奴の言っていることに嘘はなかった。

青葉「わかる？血殺。　あなたは産まれながらにして人を殺めたの、だから父さんはあなたを売った。そして、私たちまで巻き沿いをくらった。ちなみに紅葉はあなたの双子の姉、3ヶ月前にある組織の

者によって殺された」
血殺「ある組織？」
青葉「亡国機業よ。あなたの先生を殺したミサイルを放ったのもその者たちの仕業。だから、織斑千冬は全てのミサイルを破壊していたわ」
血殺「なっ！？なんだと！！？？」

復讐相手は織斑千冬じゃなくて、俺の依頼者かよ

青葉「私が知っているのはこれだけよ。何か役に立ったかしら？」
血殺「ああ、色々とな」

俺は奴の見えない位置からナイフを取り出した。

青葉「なら良かっ・・・・・・・・・ゲホッ！」
血殺「ニヤッ」

青葉の胸には俺が投げたナイフが刺さった。

青葉「・・ゲホッ！・・どう・ゲホッ！ゲホッ！・・して・・・・・・」
血殺「あんたは姉さんじゃあない。話していることは確かだけどね。もしかして、俺の能力を聞いていないの？　可哀想に」

血殺「サヨウナラ」

宿舎

血殺『何やってんだ？あいつら』

俺の眼は箒、鈴、セシリアの3人を捕らえた。

玄武『大方、一夏の部屋を覗きにきたんだよ』
朱雀『恋する乙女は強し』
青竜『それ、いつの時代？』

少なくとも、今は言わない。

白虎『明治あたり』
玄武『いやいや、古すぎでしょ』
朱雀『せめて昭和』
青竜『結構近年じゃん』

明治の次って昭和だった気がするのは俺だけか？

血殺『そんなこと話してる間にあいつら捕まったぞ』『さて、部屋に入るか』

玄武『ラウラとシャルが血殺の尾行してるよ』

血殺『わーってる』

コンタクトを取りながら角を曲がる。

ラウラ「よし、行ったぞ」

シャル「追いかけよう」

俺が曲がった角に差し掛かる二人。

血殺「何してんだ？お前ら」

ラウラ、シャル「「うわわわっ！！」」

かなりのオーバーリアクションだ。

誰も笑わないぞ。そんなの

血殺「てか、お前らの尾行は下手くそなんだよ。尻尾が丸見え」

ラウラ「うぅっ」

シャル「なら、早く言ってよ！」

血殺「ここじゃあ何だし、部屋行こうぜ」

2人の手を引っ張って部屋に行く。

血殺「ただいま～」

千冬「遅かったな。夕食も食べずにどこをほっつき歩いていた？」

血殺「夜風に当たりたかったんだ」

もちろん嘘だ

千冬「ふん。まあいい、で？そいつらは？」
血殺「尻尾が丸見えなのに俺を尾行してた2人」
シャル、ラウラ「「うぐっ！」」
千冬「まあいいか。おい、お前はもう一度風呂に入ってこい。部屋が汗臭くされては困る」
一夏「ん。そうする」

部屋を出て行く一夏。そして、沈黙が始まる。

おいおい、何だよこの空気。重すぎだろ

千冬「おいおい、葬式か通夜か？　いつもの馬鹿騒ぎはどうした」
箒「い、いえ、その・・・」
鈴「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと・・・・・・」
シャル「は、はじめてですし・・・・・」
千冬「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう。篠ノ乃、何がいい？」

いきなり話を振られて何も言えない箒。

千冬「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶、コーラだ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

冷蔵庫から全員分の飲料水を出し配る。

血殺、箒、セシリア、鈴、シャル、ラウラ「「「「「「い、いただきます」」」」」」

全員が飲み物を口にするように見えた。

千冬「飲んだな？」

箒「は、はい？」

鈴「そ、そりゃ、飲みましたけど・・・・・」

セシリア「な、何か入ってましたの！？」

千冬「失礼なことを言うなバカめ。なに、ちょっとした口封じだ」

そう言って再び冷蔵庫を開けて缶ビールを取り出す。

プシュッ！

箒、シャル、ラウラ、鈴、セシリア「「「「「・・・・・・・・・」」」」」

血殺「ちー姉、今、酒飲んだ？」

千冬「ああ、本当なら一夏に一品作らせるところなんだが・・・血殺、お前何か作れるか？」

同居人は俺以外は誰も料理をしません

血殺「何が食べたいの？」

千冬「何でもいいさ」

血殺「あいよ。３分ぐらいお待ちを」

3分後

箒、セシリア、鈴「「「言わなくていいです！」」」」

血殺「何を？」

三人の顔が真っ赤かだ。どうしたんだ？

千冬「おっ、早かったな」

血殺「家では俺しか家事しなかったから。　結構慣れてるんだよ」

千冬「確かにな。　あいつが家事をするなんてありえないからな」

仕方ないんです。　あれの事で手いっぱいだし

血殺「ほい、テキトーに野菜炒めにしたから。で？　何の話をしてたの？」

千冬「こいつらにあいつのどこがいいのか聞いてたのさ」

血殺「なるほどね。それでこの3人は憤慨してたわけか」

千冬「そんなところだ」

ちー姉にとって、この三人は絶好のエモノってわけだ。

血殺「さて、俺も酒飲むか」

千冬「私の分は渡さんぞ」

別に取らないよ

血殺「自分で持ってきてるから大丈夫だよ」

千冬「まあ、いいか。お前だけさっき渡した飲み物を飲んでいなかったしな。口封じのために飲ますか」

自分の鞄からビールと煙草を取り出す。

千冬「で？お前らはこいつのどこがいい？」

今度の矛先はどうやら、シャルとラウラだった。

シャル「僕・・・あの、私は・・・やさしいところ、です・・・・・」

千冬「こいつは誰にでもやさしいぞ」

血殺「そうか？　でも、最初の頃のセシリアやラウラには冷たかったぜ」

煙草を吸いながら言う。

千冬「で、お前は？」

ラウラ「強いところが、でしょうか・・・・・」

千冬「確かに、私より強いと思うがまだ乗り越えられてはいないな」

血殺「いいや、俺は弱いよ。ちー姉」

俺は心が弱すぎるんだ。

シャル「さっきから気になったんだけど、血殺は何で織斑先生のことをちー姉って呼ぶの？」

血殺「居候ってやつ。だから義理の姉さんなんだよ」

千冬「詳しい話は今度してやるさ」

二つ目の缶ビールを飲み終えて三つ目の缶ビールに手を伸ばすちー

姉。

血殺「チャンポンしたい」

千冬「無駄に酔うぞ」

血殺「酔いたい気分なんだ。そのままの本能に任せたい気分」

千冬「大人らしいことを言うな。ガキ」

血殺「ああ、そうだね」

海に着いたら十一時！（後書き）

ちょっと雑な終わらせ方ですいません。

今回は全体的にむちゃくちゃでしたが、楽しめて頂けると恐縮です

その境界線の上に立ち（前書き）

タイトルはシン・レッド・ラインですが、ほとんどドレッシィ・ホワイトです。

その境界線の上に立ち

合宿2日目

血殺「ふあぁー。・・・眠ｚｚｚ」

一般生徒は今頃、データ取りをしているであろうにも関わらず、俺はのんびり目的地まで向かっていた。

血殺「やっと着いた・・・・」

目覚めが悪いからだいたい三十分くらい掛かった。

千冬「遅いぞ。バカ者！」

血殺「俺は出席しなくても単位は取れますから」

授業に出たくもないのに強制だから嫌なんだよなぁ

千冬「まあいい。さっさと準備をしろ」

束「こっちは準備出来てるから後はちーくんだけだよ」

血殺「わかりしました」

束「じゃあ、まずは黄竜のコアとコンタクト出来るようにするから手出して」

言われる通りに手を差し出す。

束「ちょっと待っててね」

血殺「そういえば、赤椿はもらったのか？箒」

箒「あ、ああ」

箒のやつ、少し浮かれてるな。

血殺「俺の自信作だ。ただ第４世代型はシールドエネルギーの消費が早いから気をつけろよ」

箒「わかった」

束「ほい、じゃあ、これでオッケーだよ。超速いね。さすが私」

相変わらず、意味不明なことを言う人だな、この人は。

血殺「じゃあ、やるか」

千冬「専用機持ちは各人の専用機を展開しろ」

一夏、箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラは専用機を展開する。

千冬「では、これより模擬戦をやる。四死神対お前ら６人にやってもらう」

鈴「織斑先生、さすがにそれは・・・・・」

鈴が何故か止めに入った。

千冬「安心しろ。すぐにやられる」

血殺「それに今まで使ってたＩＳは全て初期設定だったしね」

束「ちーくんの使ってるＩＳは全部が初期設定でワンオフ・アビリティーを使えるからけっこう強いんだよ～」

千冬「それでは始めるぞ」

黄竜展開！

血殺「正常に稼働しています」

千冬「では、はじめ！」

刹那、黄竜が消える。

ラウラ「な、何！」
シャル「セシリア！後ろ！」
セシリア「なっ！」

一瞬でセシリアの後ろを取った黄竜は”聖なる剣“を展開し、斬りかかる。

血殺「まずは一機」
セシリア「きゃっ！！」

剣が直撃しブルーティアーズのシールドエネルギーが削られる。

鈴「ええいっ！」

すかさず、鈴が衝撃砲を展開しぶっ放す。

血殺「甘いな・・・・・！」

黄竜は衝撃砲を手で弾き飛ばした。

鈴「なっ！」
血殺「これで・・・・・終わり」

血殺は”死の爪“を展開して鈴を切り裂き蹴り飛ばす。

血殺「一気に蹴散らす」

黄竜が展開している翼が黄竜を中心に螺旋状になっていく、足からは”ミラーズタートル“を展開し人にビームが当たらないように殻を作る。

血殺「”レッドライズ“　フルバースト！」

全ての羽から一斉にビームが発射される。そのビームは一夏たちを襲った。外れたビームは”ミラーズタートル“によって跳ね返され一夏達を再び襲う。

血殺「・・・・・！！！」

黄竜の背後から４つのビームを放たれた。”ブルーティアーズ“だった。

血殺「ちっ、まだ残ってたか・・・・・！」

黄竜は”リバースシールド“で攻撃を全てはじき、”レッドライズ“を全て飛ばし”ブルーティアーズ“を破壊する。

血殺「後はお前だけだ。箒」

箒「行くぞ！」

箒は”天月“《あまづき》と”空裂”《からわれ》を展開して突っ込んでくる。

血殺「”凩“《こがらし》！　”雛闇“《ひなぐら》！」

黄竜は黄竜専用の短剣を両手に展開する。

箒「はあぁぁぁっ！」
血殺「ビームが出る剣なんだからもっと有効に使え」
黄竜は箒の剣を軽々とかわす。
血殺「”切嵐“《せつらん》」
黄竜が短剣を振る。
箒「！！」
刹那、赤椿のシールドエネルギーが大幅に削られる。それに気づき箒は距離を取る。
血殺「”無牙無“《むがむ》」
箒「しまっ・・・！」
黄竜が放った見えない暫撃が赤椿に当たった瞬間、大爆発を起こす。
直後、黄竜は停止した。
ラウラ「今だ！」
血殺「ちっ！」
シュヴァルツェア・レーゲンの”ＡＩＣ“によって停止した黄竜に向かって突っ込む一夏。後ろからはシャルが援護射撃を行っている。
血殺「残念でした」
一夏、ラウラ、シャルとシャルの放った銃弾の動きが止まる。黄竜

は完全停止時のみ使える３６０。ＡＩＣを使い三機を停止させた。

ラウラ、一夏、シャル「「「なっ！」」」

血殺「終わりだ！”レッドライズ“」

あらかじめ排出していた”レッドライズ“が一夏たちを襲って模擬戦は終わった血殺の完勝で。

血殺「はあ、疲れた」

束「使ってみてどうだった？」

血殺「シールドエネルギーが常に減る以外は完璧ですね。火力、スピード、柔軟性、反応、全てに置いて」

千冬「どうやら、あいつはまだ戦りたらないようだぞ」

振り向くとラウラが仁王立ちをしている

血殺「さすがに無理だ。また今度なラウラ」

ラウラ「わかった」

血殺「俺はちょっと寝るとするか。体は・・・・頼む・・・・・よ・・・・」

意識が遠退いていく。

血殺『ここはどこだ？』

真っ暗な世界だ。

？？『ここは私の作った空間』

血殺『お前は？』

黄竜『私は黄竜の魂よ』

そうか。こいつが！

血殺『何故俺を連れてきた？』

黄竜『質問が多すぎよ。私があなたを連れてきた理由はコンタクトを取るためよ』

血殺『４ヶ月前に暴走したくせによく言う』

そうだ。あれさえ無ければ

黄竜『あれは私じゃない。私がここに移されたのはあなたがＩＳ学園に入学した日よ』

血殺『約３ヶ月前か』

黄竜『昔の黄竜はあなたの精神を奪い暴走したと聞いたわ』

血殺『ああ、そうだ』

さっさとこの空間から出たい。

黄竜『あなたは私の力が必要？』

血殺『要らない！　お前の力はただ人を傷つけるだけだ！』

黄竜『そう、なら良いわ』

血殺『何！？』

復讐者の俺には意外すぎる言葉だった。

黄竜『力を必要としないくらい強いなら』

血殺『俺は強くない。強くないんだ』

俺は誰一人、友達すら守れない奴なんだ。

黄竜『なら、なんで力を必要としないの？』

血殺『あんな悲劇を繰り返すかもしれないからだ』

もう二度とあんな悲劇は繰り返さない。

黄竜『傷つくのは嫌？』

血殺『そりゃあ、誰だってそうさ！』

黄竜『あなたはただ逃げてるだけね。傷つくのが嫌で』

何故だろう。こいつの言っていることが正しい気がする。
そして

血殺『逃げてない！』
黄竜『いいえ。逃げてるわ』

懐かしい。

血殺『・・・・・・・・・』
黄竜『安心して、私たちは双子なのだから大丈夫よ』
血殺『もしかして、黄竜は紅葉姉さん？』

死した姉に会えたことは素直に嬉しい。

黄竜『ええ、そうよ。　力は私がコントロールするからあなたは自分のやりたいことをすれば良いのよ。あなたは何がしたい？』
血殺『・・・大切な人を・・・みんなを守りたい』
黄竜『わかったわ。血殺』

でも

血殺『これからよろしくね。紅葉姉さん』
黄竜『私はもう紅葉じゃないわ。でも、この空間だけなら良いわ』

黄竜の中には居て欲しくなかった。

血殺『ありがとう』
黄竜『どうやら、あなたを待ってる人がいるみたいね。もう行ってあげなさい』

血殺『わかった。　また後でね。姉さん』

コンタクト終了

16時前

血殺「・・・・・夢・・・か・・・」

俺は足元をフラつかせながら外に出た。

血殺「・・・・・姉さん・・・・・・」

ボソッと呟き親指に嵌めてあるリングを見つめる。

朱雀『大丈夫？血殺』

血殺『あ、ああ、大丈夫だ』

青竜『血殺が寝ている間に一夏が負傷したらしい』

やっぱりこうなったか

白虎『どうやら、例の機体にやられたらしいわよ』

銀の福音にねぇ

玄武『今、体勢を立て直してるところ』

血殺『情報提供ありがとな。じゃあ、行くか』

朱雀『ええ』

白虎『わかったわ』

青竜『了解』

玄武『うん』

朱雀展開！”次元加速“！

血殺『目標を発見した』

銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）が羽化に備えた蛹のような状態だったため、”死の槍“では壊せそうにない。

玄武『なら、まずは僕からだ』

”ミラーズタートル

”ミラーズタートル“で蛹状態の銀の福音に殻を作る。

玄武『殻は作ったよ』

朱雀『今度はあたしね』

”レッドライズ“

血殺「乱射」

福音を包んだ”ミラーズタートル“は”レッドライズ“の放ったビームを内部で反射させ、全てをゴスペルに撃ち当てた。

血殺「ようやくお目覚めのようだ。たたみかける！」

すかさず、肩のプラズマ砲と腰のレールガンをぶっ放す。刹那、”ミラーズタートル“が破壊され、中から銀の福音が飛び出して来た。

血殺「ちっ！　朱雀！」

朱雀『ええ』

翼を全て抜き取り2本を繋げ4本の刀にし、福音に急速接近する。

四刀連流　弐ノ型　青菊！

福音は血殺の攻撃をギリギリで避け反撃の体勢をとる。

四刀連流　壱ノ型　黒桜！

福音は血殺の攻撃を食らったものの、浅かった。

血殺「くそっ！」

ザアッ

ラウラ『血殺！　伏せろ！』

血殺「！！」

間一髪でラウラの福音への攻撃を避ける血殺。

血殺『お、お前ら』

俺の眼には六つの機影があった。

シャル『1人にしては荷が重すぎじゃない？』

シャルが何時もと同じ口調で話してきた。

血殺『ああ、確かにな』

鈴『ったく。戦るんなら言いなさいよ』

セシリア『そうですわっ！抜け駆けは良くなくてよ』

血殺『そうだったな。俺にはいたな頼れる仲間が』

箒『一気に叩み駆けるぞ！』

福音に突っ込む5人を見つめる。

黄竜『じゃあ、私も参加しようかなぁ～』

血殺『ね、姉さん！』

急に開くな！

黄竜『今は黄竜よ。さっ、私たちも行きましょ』

血殺『ああ、そうだね』

朱雀、玄武、青竜を解除！同時に黄竜を展開！”一次移行“《ファーストシフト》！

数時間前に展開した黄竜よりカラーが明るい黄色になり、ボディが滑らかになった黄竜を展開する。

血殺「行くよ。黄竜」

速度は”瞬時加速“より二倍近く早い。

ラウラ「箒！武器を捨てて緊急回避しろ！」
血殺「いいや！その必要はない！」

”瞬時加速“で福音の後ろを取った黄竜。

血殺「墜ちろー！！！」

黄竜の手首にマウントされているビームサーベルで福音の片翼を切り裂いた。飛行能力を失った福音は海に落ちた。

箒「福音は・・・」
血殺「！　まだだ！！」

海面から光の球が現れた。その光の中に福音はうずくまっている。

箒「これは・・・！？一体、何が起きているんだ？」

ラウラ「!?　まずい!これは・・・”第2形態移行“《セカンド・シフト》だ!」
福音『キアアアアアア!!』
福音は雄叫びのような声を発しラウラに飛びかかる。
ラウラ「なにっ!」
血殺「”水壁“《すいへき》!」
ラウラと福音の間に大量の海水が吹き出す。
血殺「ラウラ下がれ!」
しかし、遅かった。福音に足を掴まれたラウラは零距離でエネルギー弾を数十弾食らい、ズタズタになりながら海へと墜ちていく。
血殺「間に合え!」
海面すれすれでラウラを拾い、抱きかかえる。
シャル「よくもっ!」
血殺「よせ!シャル」
シャルはショットガンを呼び出し福音に向けて放つ。
ドンッ!!
爆音はショットガンのものではなく、エネルギー弾がショットガンを吹き飛ばし、シャルをも吹き飛ばした。

血殺「シャル！！」「くそっ！」

落下するシャルを拾い上げたが、さすがに無理が有り過ぎる。両腕には負傷した仲間２人、とても戦える状態ではなかった。

セシリア「くっ！？」

そうこうしている間にセシリアが攻撃を受け、蒼海へと墜ちる。

箒「私の仲間を・・・よくもっ！」

血殺「１人で突っ込むな！」

箒「うおおおおおっ！！」

お互いに回避と攻撃の繰り返し、徐々に出力を上げていく赤椿に、わずかに押され始めた福音。しかし、現在はあまりにも残酷だった。

キュゥゥゥン・・・・・。　エネルギー切れ。

箒「なっ！　また、エネルギー切れだと！？・・・ぐあっ！」

箒も福音のエネルギー弾により撃墜された。

結局、振り出しに戻った。いや、状況は悪化している。

黄竜　残りエネルギー　５６０　？を切った。

血殺「白虎を朱雀を展開しつつ召喚」

白虎「どうすんの？」

血殺「こいつらを岸まで運んでくれ。後は俺がやる」

白虎「わかったわ」

二人を抱えてその場を去る白虎。

”ブレイクバーン“！”ドラゴンイグセル“！

黄竜専門の刀長２ｍちかくの刀”ブレイクバーン“と同じく黄竜専門の圧縮火炎砲の”ドラゴンイグセル“

血殺「何としても、俺はお前を壊す！」

残りエネルギー　４２０

残りエネルギー　２９０

残りエネルギー　１４０

残りエネルギー　２０

血殺「ちくしょうっ！」

結局、壊せなかった。黄竜は常にシールドエネルギーを消費する。
これが結果だった。　１対１の場合は・・・・。

血殺「・・・時間は稼いだ。　後はテメーでやれ」

イィィィィッ！！

福音は吹き飛んだ。強力な荷電粒子砲によって。

一夏「俺の仲間は、誰１人としてやらせねぇ！」

血殺「遅えんだよ」

一夏は１人で福音に向かった。

黄竜『いいの？　１人でいかせて』

血殺『もうシールドエネルギーは切れた』

玄武たちも休ませないと危険だ。

黄竜『血殺はまだ戦いたい？』

血殺『愚問だね。戦いたいに決まってる』

黄竜『なら行きましょ。ワンオフを使って』

血殺『俺と黄竜はまだ意志統一が出来て無いじゃん』

俺たちは稼動時間の問題ではなく。意志統一することでワンオフ・アビリティーを使うことができる。

黄竜『私があなたに合わせればいい』

血殺『出来るならやってくれ』

黄竜『じゃあ、始めるわよ。　私のワンオフは・・・・・・』

……ワンオフ・アビリティー発動！　〝無域無双〟《むいきむそう》

残りエネルギー　１０００

シールドエネルギーが永遠に減ることの無い状態になる。それが黄竜のワンオフ・アビリティー　〝無域無双〟。

血殺「行くぜ！」

福音の翼が回転しながら一斉に開き、全方位にエネルギーの弾雨が降る。

一夏「ちっ！」
血殺「全員伏せろ！」
一夏「！？」
血殺「”イナーシャルガード“！」

全てのエネルギーの弾雨が巨大なシールドにより防がれた。

血殺「ちゃっちゃとやって旨い飯喰おうぜ」
一夏「ああ！」
血殺「じゃあ、行くぞ」

俺たちは再び福音に向かった。

一夏「ぜらあああああっ！」

方翼はやったが二度目は避けられる。そして、もう方翼をやる間に切った翼は再生する。の繰り返しだった。

血殺「”死の槍“！」「ぜやぁぁぁぁぁっ！！」

死の槍は投げて当てないとシールドエネルギーは一発で０には出来ない。

血殺「一夏は退避しろ！　エネルギー切れだろ？」

一夏「すまない」

ヒーローなんて柄でもないのに

血殺「俺は赤椿の”絢爛舞踏“《けんらんぶとう》に希望を託すだけだ。　だからできる限りのことをするだけ！」

”火炎原子氷結砲“《かえんげんしひょうけつほう》

”火炎原子氷結砲“は機体を燃やす炎、機体を狂わせる放射能、当たり場所から氷が浸食する氷の三つの内ランダムで決まる。

血殺「逝っけぇぇぇ！！」

血殺の放った砲弾は福音の両足を巻き込んだ。

今回は氷のようだ。足から氷が上へと向かっている。

福音も反撃をするために翼を広げた。

血殺「あとは頼んだぜ」

箒「任せろ！」

赤椿の二刀が翼を断ち切る。

一夏「逃がすかぁぁぁぁっ！」

一夏は”雪片“で残りの光翼を切り裂く。最後の一撃を食らわそうとする一夏に福音は体から生えた翼全てで一斉射撃を行う。

血殺「そのまま突っ込め一夏！」

”リアクトアーム“をヒーリングモードで展開！

黄竜は背中からシュヴァルツェア・レーゲンのワイヤーブレードのようなアームを福音に向けて飛ばす。”リアクトアーム“はエネルギー弾を全て無力化させた。

一夏は福音の胴体に、零落白夜の刃を突き立てた。

一夏「おおおおっ！！」

福音は一夏の首に手を伸ばすが、その手は切り裂かれた黄竜のつま先から伸びたビームソードによって。そして、福音は動きを停止させた。

一夏「はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ・・・・・！」

アーマーを失った操縦者が海へと墜ちる。

一夏「しまっ・・・！」

血殺「詰めが甘いな」

福音の操縦者を抱きかかえる。

箒「終わったな」

一夏「ああ・・・。やっと、な」

血殺「・・・・・・・」

ミッション失敗か

千冬「作戦完了・・・と言いたいところだが、お前たちは重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文と懲罰用のトレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

一夏、箒、鈴、セシリア、シャル、ラウラ「「「「「「「・・・・はい」」」」」」」

俺は絶対に返事はしない。

千冬「四死神、何故返事をしない？」

理由は全く命令を知らされていなかったからに決まっている。が、話をズラしておくか。

血殺「いえ、ちょっと気になるところがありまして・・・・」

千冬「何だ？」

血殺「福音の操縦者の胸があまりなかったように感じたんですけど」

千冬「安心しろ、ちゃんと女だった」

んなこと、分かってるわ！

血殺「そうですか。それは何より」

真耶「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。・・・あっ！　だ、、男女別ですよ！　わかってますか、織斑君に四死神君!?」

「脱いで」のあたりで女子が自分の体の隠した。

血殺「隠さなくても、お前らのつまらない体なんて誰も見やしないよ。特に鈴とラウラ」

鈴、ラウラ「「なっ！」」

貧乳など見ても面白くない。

夏休みの宿題並みに面白くない。

血殺「それから織斑先生」

千冬「なんだ?」

血殺「言いたいことははっきり言った方が大人ですよ。じゃあ、また後で」

俺はその場を逃げるように立ち去った。

黄竜『そろそろ時間かな』
血殺『何の？』

また、無理矢理コンタクトを開いた黄竜が話しかけてきた。

黄竜『私がこの中に居られる時間』
血殺『えっ？』
黄竜『じゃあね。血殺』
血殺『え？』

黄竜との、紅葉とのコンタクトが取れなくなった。

どういうことだよ！　何だよ！これ！　聞きたいことや話したいことが沢山あったのに！　もう何も話せないのかよ！　紅葉姉さん・・・・

バタンッ！

俺は倒れた。

治療室

血殺「・・・・ここ・・・は・・・・・・」
真耶「あっ！　目が覚めましたか」
血殺「・・・・俺は・・一体・・・・・」

頭がスッキリしない。
強く打ちすぎたのだろう。

真耶「廊下で倒れているところを見つけられたんです」
血殺「・・・・・・・・飯」
真耶「はい？」
血殺「飯食べに行って良いですか？」
真耶「はい、構いませんよ」
血殺「では、これで・・・・・」

俺は治療室を出た。

宴会場

血殺「・・・・・・」
一夏「どうしたんだ？血殺」

後ろから一夏が話しかけてきた。

血殺「ああ、一夏か。何でも無いよ」
一夏「なら良いんだが・・・・・」
血殺「飯喰うか」

正座はまずいかな。椅子にしよ

結局、座ったのはシャルの前の席だった。女子が騒いでるようだったがきにしないで食事をする。

あっ、刺身食べ過ぎちゃった、どうしましょう。シャルの分けて貰おうかな

俺の視線に気づいたシャルが聞いてきた。

シャル「な、なにかな」

さすがに刺身をくださいなんて言いづらいな

その時だった。隣にいた女子がシャルに何かを吹き込んだ。

シャル「血殺のえっち・・・・」

血殺「えっ？」

また隣の女子がシャルに何かを吹き込んだ瞬間、シャルは耳まで真っ赤になった。

刺身は諦めるか

血殺「ごちそうさま」

夜風に当たりに行こ

岩場

ざあ・・・・。ざあ・・・・・・。

血殺「・・・・・・・・・・・」

死にたいな。この際、海に墜ちて死のうかな

朱雀『また、ラウラとシャルが尾行してるわよ』

血殺『・・・・・そう・・』

二人はどうでも良かった。

白虎『そんなに黄竜が消えたのが悲しい？』

血殺『当たり前だろ・・・』

白虎『でも、あんた、普通に人を殺めてきたじゃない』

今まで何人の人を手に掛けたのだろう？

数え切れないというのは確かだ。

玄武『ねえ、白虎。　あんたその言い方はないんじゃない？』

血殺『いいんだ、玄武』

白虎『はっ！それで悲しいです。また救えなかったですって言うポーズ？　ふざけんじゃあないわよ！』

コンタクトの言葉は頭に直接流れてくる。

俺の頭の中で白虎の声が響いた。

血殺『・・・・・・・』

白虎『でた、黙り込んでふてくされる。昔と何も変わってないじゃん！』

朱雀『ちょっと白虎。・・・・青竜も何か言ってよ』

青竜『僕は白虎が正しいこと思うから何も言わない。ただ、これだけは言える。元々紅葉は死んでんる。その事実に変わりはない。ただ黄竜として少し長生きしただけ』

聞いたことのない冷たい声で青竜はそう言った。

血殺『・・・・・・』

何も言えない自分が惨めだった。

惨めすぎた。

白虎『何時、何処でこの前みたいに暴走するかわからない。だから、今を大切にするべきなんじゃないの！？』

血殺『確かにそうだな。白虎の言った通りだな。俺にはもう後戻りは出来ないんだ。今は出来る限りみんなと楽しくいることを考えるか』

青竜『じゃあ、２人の相手でもすれば？』

血殺『そうだな』

もう俺の中の迷いは消えた。　はず

俺は煙草に火をつけてシャルとラウラの方へ向かった。

血殺「尾行が下手すぎだぞ。軍人」

ラウラ「私の専門は戦闘だから仕方がないだろ」

シャル「僕は元々軍人じゃないからね」

コイツらを見てると自分が馬鹿に見える。

血殺「そうだ、ラウラ」

ラウラ「なんだ？」
血殺「もう一度黄竜で戦うのは無理になっちまった」
新たな魂が見つかるまではな
ラウラ「別にいいさ。血殺が私の嫁になるのなら」
血殺「む・り・だ！」
ラウラ「な、なんだと！？」
いや、前にも言っただろ！
血殺「シャルはどうなの？」
シャル「何が？」
血殺「何か無いの？　夢とか願いとか」
俺にはもうない物だからな
シャル「血殺と付き合うかな」
血殺「前にも言ったけど、今は無理かな」
シャル「今って言うけど、何時ならいいの？」
こりゃあ、永遠に無理だな
血殺「自分で考えな」
シャル「血殺のケチ・・・」
血殺「じゃあ俺は戻るよ。じゃあな、お前らも早く戻れよ」
帰って寝るか

翌日　バス内

一夏「すまん・・・誰か、飲み物持ってないか？」
セシリア「知りませんわ」
血殺「俺は酒しか持ってない」

はぁ、これが終わったらまた束さんから変な物が送られるんだよなぁ

いろいろと考えている間に1人の女性がバスの中に入ってきた

??「ねえ、織斑一夏くんっているかしら?」
一夏「あ、はい、俺ですけど」

何故、ナターシャがここに・・・

ナターシャ「君がそうなんだ。へえ」
一夏「あ、あの、あなたは・・・・・」
ナターシャ「私はナターシャ・ファイルス。　銀の福音の操縦者よ」
一夏「え・・・」

困惑している一夏の頬にナターシャの唇が触れた。

ナターシャ「ちゅっ・・・・・。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」
一夏「え、あ、う・・・・・?」
ナターシャ「じゃあ、またね。バーイ」
一夏「は、はあ・・・・・」

ナターシャがバスを降りた後すぐに俺は席を立った。

シャル「どうしたの?」
血殺「ちょっと用事」

千冬「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ」
血殺「後始末が大変なんですから」
ナターシャ「思っていたよりずっと素敵な男性だったから、つい」
素敵？　おいおい、戦闘時に頭でも打ったか？
千冬「やれやれ・・・。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」
ナターシャ「ええ、それは問題なく。・・・私は、あの子に守られていましたから」
あの子……ああ、福音ね
血殺「何故、福音は暴走したんだ？」
ナターシャ「あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断・・・あの子は私のために、自分の世界を捨てた」
血殺「なるほどね。それで結果的に暴走し呼びかけにも応じなかった。と言うわけか」
こんな物をどうすると言うのだ？　スコールの奴は
ナターシャ「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのＩＳを敵に見せかけた元凶を・・・必ず追って、報いを受けさせる」
千冬「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？　しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」
血殺「無駄な動きは敵にバレることもありますから」
その敵は俺だけどね

ナターシャ「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ、サターン」

サターンとは俺の右眼にあった力であり、俺が得た力の中で最も嫌っていた力。

千冬「アドバイスさ。ただのな」

血殺「俺は直感だよ。プルートのね」

ナターシャ「そうですか。それでは、おとなしくしていましょう。・・・・しばらくは、ね」

「またいずれ」そんな言葉が俺たちの背中にはあった。

その境界線の上に立ち（後書き）

やっぱりグダグダやなぁ。

まあ、頑張っていくわ。

また次回な

学園最強と世界最強（前書き）

お久しぶりです。

約1ヶ月ぶりの投稿です。

言い訳はしません。

学園最強と世界最強

9月3日。二学期の初実戦訓練は、二組との合同ではじまった。

血殺「だから言ってんだろ！それじゃあ駄目なんだって」

ラウラ「くっ！」

本来ならクラス代表同士の対決のみだったんだが、織斑先生の「お前らの強さが知りたい」と言うことで始まった専用機の力比べ。

血殺「もう終わりにするか、ファーストシフト！モードウルフ」

ラウラ「なっ！？」

ＩＳは変形しない。しかし、白虎は変形してこそ意味があるＩＳなのだ。

狼は白虎のオートロックオンシステム（”死の槍“などを投げ飛ばす時に自動でロックオンする機能。ほとんど役に立たない）とは違い、マルチデルタロックオンシステム（操縦者の意思で攻撃などをホーミングするけど、無駄に意識を集中させないといけない。ＢＴ兵器よりは便利）になるかわり、顔全体にバイザーが付くあげくに、頭にミニチュアダックスみたいな耳が付いてしまう。

あと、尻尾が生えるが、全く意味のないものだ。白から灰に変わる甲層は意味は無駄な理由ばかりだ。

血殺「狼に変形した以上はすぐに終わる」

ラウラ「ちぃっ！」

大型レール砲を放つラウラ。

血殺「悪いな。これで終わりなんだよ」

ブレイククロー

俺は右手のクロウを振り下ろし、斬撃を放つ。
俺が放った斬撃は砲撃を切り裂いてシュヴァルツェア・レーゲンの甲層をぶった斬った。

千冬「勝者、四死神」

さっき、力比べって言ったけど、俺は全員と総当たりして一度でも負けた場合、そいつの下ということになる。って感じの無駄ルールだ。

血殺「ふう疲れた。ラストは誰？」
箒「私だ」
血殺「箒か。なら少し本気で行こう。白虎解除そして玄武展開」

氷河期だけでいいかな

箒「血殺、私をなめているのか！？」
血殺「この際だから教えてやるよ。赤椿の弱点を」
千冬「では、はじめ！」

開始と同時に突っ込む箒。

血殺「見してやるよ。玄武唯一の攻撃武器を」

氷河期（アイスエッジ）

宙に浮いてる二本のランスと二丁の銃を展開する。

箒「浮いている武器など使い物にならないぞ」

浮いてるけど、俺の意思で使いたい放題出来るんだよ

血殺「仕留める」

刹那、二本のランスが箒目掛けて放たれる。

箒「こんなもの」

”空裂“と”雨月“で攻撃を防がれた。

血殺「あっ、やっぱりなぎ払ったか」

箒「何!?」

箒がランスをなぎ払っている間に、後ろをとり氷河期のランスと銃を構えている。

血殺「でも、零距離&ランスならどうだ?」

箒「ちっ!」

血殺「アディオス」

ドオォォンッ!!

千冬「勝者、四死神」

血殺「わかったか？赤椿の弱点」
箒「いや・・・わからなかった」
血殺「だろうな。使い慣らしているようにしか見えるが、お前自身の力を使い切れていない。それが弱点だ」
一夏「どういうことだ？」

試合が終わったと同時に一夏がいた。

血殺「簡単に言えば、箒は赤椿の力に頼り　過ぎているんだ。だから箒自身の力は出せない＝赤椿の力もフルに出せない」
一夏「そういうことか」

わかってんのか？こいつ

血殺「まあ、第二形態移行が出来てない時点でフルに使えてはいないな」
鈴「でも、そんな事言ったらほとんどの専用機持ちが力をフルに使ってないことになるじゃない」
血殺「当たり前だ、一次状態で使える力が最大で七割ぐらいだ、その状態でＩＳの能力を極限まで使えば二次状態になるんだ」

まあ、両方とも嘘だけどね

シャル「とてもじゃないけど大変だね」
血殺「まあな。まあ一夏の場合は違ったけどね。　じゃ、俺は帰るから」
一夏「ああ、またな」

ロッカールーム

血殺「電話しておくか」

プルプル

血殺「よう円、元気してるか？　お前もこっちに来るんだろ？　手続きは済ませたのか？　そうか、ならいいんだ。　俺が何かしたか？　わかったよ、以後気をつける。　じゃあな」

プツッ

血殺「そこで何してんだ？生徒会長さん」

生徒会長「あらら、バレちゃった」

ロッカーの裏から出現する会長さん。

血殺「バレる気満々だったくせによく言うな」
生徒会長「そうでもないわよ」
血殺「で？今度は何の用？生徒会なら入らないと言ったはずだけど？」

断っても断っても、半永久的リプレイだ。

生徒会長「生徒会への申し出ではないわ。ただ貴方たちには部活に入ってもらうことになったわ」
血殺「貴方たちってことは他に誰かいるのか？」
生徒会長「ええ、織斑くんよ」

はあ、全く面倒が見切れねえよ

血殺「生徒会に入れるんじゃあなかったのか？」
生徒会長「もちろんそのつもりよ」
血殺「時が来るまで待つってやつか？」
生徒会長「そんな感じ」
血殺「そう、じゃあ俺はこれで」
生徒会長「ええ、またね」

そろそろ仕込んでおくか。しっかり殺れよ……オータム

放課後　職員室

血殺「織斑先生～。話しがあるんですけどよろしいですか？」
千冬「ああ、構わない」

心の中で不快な笑顔をしなから、織斑先生の席まで移動する。

血殺「実は部を作りたいので承諾をお願いできますか？」
千冬「メンバーは揃っているのか？最低でも五人は必要だが」
血殺「揃っていることは揃ってますが、ちょっとね」

ちょっと？　いや、かなりの間違いか

千冬「誰なんだ？」
血殺「これが名簿と部活名に部の活動です」

織斑先生はそれを見て呆れていた。

千冬「おい四死神」
血殺「なんですか？」
千冬「活動は良いと思うが、メンバーがなぁ。お前以外もこの学園内で生活しているとはいえ、生徒ではないからな」

案の定だった。

血殺「心配しないで下さい。あくまでも人数合わせです」

千冬「まあいいか。私からあいつに言っておくとしよう」

血殺「じゃあ織斑先生、顧問よろしくね。何もしなくていいので」

千冬「仕方ないな」

血殺「では俺はこれで。失礼しました」

翌日

ＳＨＭと一限目の半分を使って全校集会が行われた。

俺まで強制参加とはやりやがるなアイツ

生徒会メンバー「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

生徒会長「やあみんな。おはよう」

ん？　プライベートチャンネル！？

血殺『誰だ？』

円『俺だ。円だ』

応、これはこれは我が唯一の親友の円くんではないか

血殺『なんかあったのか？』

生徒会長「さてさて、今年は色々と建て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識（さらしき）　盾無（たてなし）。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

円『学園内に誰もいないのは何故？』

学園内にはいるよ。みんなね

血殺『今、全校集会中だからな』

盾無「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

円『じゃあ俺はどうすれば？』
血殺『知らねーよそんなの』
俺が知ってたらビックリだわ！
円『はあ！！！？』
盾無「名付けて、『各部対抗織斑一夏争奪戦』！」
血殺『悪りぃな円。また後でな』
生徒「「「「「「「「「「ええええええええええ～～～～っ！！！！？？」」」」」」」」」」
血殺「うっせぇな！！　黙れ！」
あ、やべっ
子どもの泣き声のようにうるさかったのが、俺の一言で一蹴された。
盾無「ありがとうね四死神くん。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い」
もはや、競馬だな
盾無「織斑一夏を、一位の部活に強制入部させましょう！」
再びさっきの雄叫びが上がる。

生徒Ｊ「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」
生徒Ｄ「こうなったら、やってやる・・・・やぁぁぁってやるわ！」

一つ気になるな

血殺「会長！質問で～す！」
盾無「何かな？四死神くん」

この距離でもいけるとは関心だな

血殺「一夏はこの時から好きな部に入れなくなったってことですか？」
盾無「ええ、そうなるわね。本来なら四死神くんもこのルールに基づき強制入部させる予定でしたが、昨日の内に入部したということで取り消されました」

あっぶねぇ。プルートとマーキュリーのおかげだな

かくして一夏の地獄生活がはじまった。

同日　放課後　廊下

血殺「だからってなぁ。なんで学園内にいないんだよ！お前は」
円「まあ、いいじゃん。終わったことは」

この野郎は授業をサボってゲーセンで遊んでやがったまったく、あり得ねえぜ

血殺「しかもお前の世話を俺がやる羽目になったし」
円「それは悪いと思ってる」
血殺「ったく、しょうがねぇな～」

1－1前

血殺「さ、入るぞ」
円「ほーい」

ガラガラッ

クラスメート「「「「「えっ！？」」」」」
血殺「悪いな、遅くなったがみんなに転校生を紹介するように織斑先生から言われた」
円「つーわけでよろしく。俺は紅波（くれなみ）　円（まどか）だ」

何時ものようにテキトーな挨拶をする円。

血殺「で？一夏出し物はどうなった？」
一夏「見ての通りだ」

なになに？『織斑＆四死神のホストクラブ』に『ツイスター』『ポッキー遊び』『王様ゲーム』か

血殺「この案は良いと思うが他のみんなは一体なにをするのかがわからないから、みんなが自分のやるべきことがある物じゃないと」

一夏「確かにな」

ラウラ「メイド喫茶はどうだ」

メイド喫茶ってよぉ。まんまパクリじゃねぇか！

まあ、全体でやるなら良いと思うけど

血殺「おっ、良いなそれ」

円「何！？あの眼帯娘！？　かっわいぃっ！」

円の気持ち悪い台詞に俺以外の全員がひいた。

血殺「止めろ円。あれは俺の女だ」

円「じゃあそこのフランス人の娘！」

標的はシャルへと変更された。

つーか、よくわかったな。フランス人だって

血殺「あれも俺の女だから無理だ」

円「お前にはすでに四人いるだろ！」

血殺「アイツらは別だ。あれは女だが人ではない」

円が言ってるのは朱雀たちのことだ。

円「まあ、俺にもいるからいいけど」
血殺「なら、言うな」
円「へいへい」
血殺「話を戻すか」

結局、メイド喫茶になった。

第三アリーナ

血殺「さて、久しぶりにやるか」
円「ああ、そうだな」

俺も本気で行くか

血殺「朱雀展開！」
円「白帝（はくてい）展開！」

白帝は白銀のカラーリングがしてあり、展開される甲層は腕と足だけだ。理由は沢山あるが、一番の理由は軽量化だ。円の最初の機体・黒帝は遅すぎたため、高速移動の白帝が生み出された。

血殺「行くぞ」
円「来い」

”レッドライズ“&”八刀流“

円「いきなり”レッドライズ“に”八“か。やけに本気だな」
血殺「相手がお前だからな」
円「そうかい。なら”ライトスピア“」

円は電撃を帯びた槍を展開する。
”ライトスピア“はシールドを無視して、直接甲層を叩く武器だ。
場合によっちゃあ、肉体へのダメージも起こる可能性がある

血殺「スピアだけでいいのか？」
円「ああ」
血殺「そう」

刹那、朱雀の超加速により円の後ろをとり斬りかかる。

円「あまい！」

それを防ぐ円。

血殺「あまいのはそっちだ」

かかさず、全てのレッドライズで円を狙い撃つ。

円「忘れたのか血殺。白帝にビームが利かないことを」

そう、白帝の甲層に当たったビームは全てが跳ね返される。

血殺「だが、ビームを跳ね返してる間は動けねえだろ」

八刀流壱ノ型”神滅死“《かみほろぼし》

”神滅死“は相手の両手両足に剣を刺す技。

俺が一番嫌いな技。何故かって？　そりゃあ、外したら自分がガラ空きだから

円「踏み込みがあまい」

攻撃を簡単に防ぐ円。

スピアを弾き、距離をとる。

血殺「これじゃあ、拉致が空かねえ」

円「やっぱりやるしかねぇか」

血殺、円「「セカンドシフト！」」

第二形態になった朱雀には足に鳳凰（ほうおう）という多機能武装足（アームド・キック）がつく。
白帝は手にサーベルクロー、脚に小型レールガンが十つ、さらに常に抜き出せる雪片に似た刀が二十ある。これが全てで雷電と言う。

血殺「いつ見ても飽きないね。それ」
円「そう?俺は鳳凰の方が飽きないけど」
血殺「ふ～ん」

終わりだよ円。”ボルケーノ“・炎弾

円「まだ終わらねぇよ」
血殺「!?」

円は片手で二本の刀を持ち、後ろから狙い打たれた”ボルケーノ“を防いでいた。

円「今度はこっちから行くぜ」

結局のところ引き分けた。

血殺「あー、疲れた」
円「し、死ぬぅ」

疲れ切っている俺たちの元にシャルとセシリアが駆け寄ってきた。

シャル「だ、大丈夫？血殺」
血殺「ああ、なんとか」
円「あ、さっきの娘」

娘って言うの止めろよ。オヤジくさいぞ

シャル「あ、僕はシャルロット・デュノア。よろしくね」
円「しかも一人称が僕なんだあ」

駄目だ。こりゃあ、もう直せない

セシリア「わたくしはセシリア・オルコットですわ」
円「オルコットってことはイギリス代表候補生か」
セシリア「わたくしをご存知なの？　まあ、そんなことは当然ですわね」

ごめん。セシリア
さっき俺が教えた

円「いや、ついさっきまで知らなかった」
セシリア「なっ！」
血殺「ドンマイ。セシリア」

そんなことやこんなことを話している間に悪魔がやってきた。

盾無「やあやあ、元気してるかい？」
円「誰？あれ」
血殺「生徒会長だよ」

俺の能力を知ってる。数少ない人間の一人。

円「ああ、学園最強だかなんだか言ってたな」

盾無「まあ、血殺くんには適わないけどね」

何を言ってんだか、この人は

血殺「盾無さん、一夏にシューター・フローを見せに来たんじゃなかったの？」

盾無「あら、何でわかったのかしら？」

血殺「知ってんだろ。俺が人の心を読めること」

まあ、言っても構わないだろう

シャル「えっ！？」

セシリア「どういうことですの？」

と思ったら、驚きを隠せていないシャルとセシリアがいた。

血殺「そのままの意味だ。俺には呪われた力があるんだ、時間を止めるサターン、空間を操るジュピター、身体能力を格段に上げるマーズ、心を読めるマーキュリー、未来を予知するプルート、回復するスピードを早くするヴィーナス、そして全知全能のアース。この七つが俺が幼いころ植え付けられた力だ」

あと二つあるけど、言わなくて良いかっ

シャル「ねえ血殺、眼にあった力はなんなの？」

血殺「あれはサターンとジュピターの二つ」

円「お前、眼潰したのか？」

血殺「ああ」

何度潰しても戻そうと思えば、戻せるけどね

円「ふ～ん。そう」
血殺「じゃあ、話を戻してさっそくやりますか」
セシリア「わたくしたちがやるのでは？」
血殺「そうだよ。セシリア、シャル、俺に円の四人で」

そう言った瞬間、三人の顔が一変した。

円「げえ、マジで・・・？」
シャル「さすがに四人同時は僕でも難しいと思うけど・・・」
血殺「文句を言ってる暇があるならとっととやるぞ」
円「仕方ねーな」

円は相変わらず、やる気なし

セシリア「わかりましたわ」
シャル「頑張ってみるよ」

青竜をファーストシフトで展開

すぐに配置は決まった。

血殺『じゃあ、はじめますね』
盾無『お願いするわ』

四機は右方向へ動き出しそれぞれの距離を保ちながら加速していく。

血殺『円、ちゃんと避けろよ』
円『わかってるよ』
血殺『じゃあ、行くぞ』

撃ち合いを始める俺たちに続きシャルとセシリアも射撃を始める。

なにやってんのだ?アイツ

一夏が盾無とイチャついている。否、一夏は盾無にからかわれている。だが

シャル『い、一夏!?』
セシリア『な、な、何をしてますの!?』
円『真面目に見ろ!』
血殺『馬鹿!止まんじゃねえ!』

俺以外の三人は銃弾を浴びてしまった。

一夏も可哀想に・・・・・・・・・・・・ドンマイ

学園最強と世界最強（後書き）

え～、夏のものを出さなかったのは理由がありまして。

原作に追いついてしまったら使おうという発想から夏は飛ばさしていただきました。

途中に出てきた紅波円くんはハーマンさんから許可を得て一時的に出しています。

まあ、これからはちょくちょく更新しようと思いますが無理だと思いますのでご了承ください。

ミステリアスなシンデレラ（前書き）

えー、最近気付いたのですが

今までの話の誤字多っ！

なので誤字、脱字は直しておきました。

それから

ＰＶが３５０００を越してました！！

皆さんありがとうございます！

このような駄作も時が経てばこんな風にもなるんですね～

まあ、自分はこれからも頑張っていくので

応援よろしくお願いします

ミステリアスなシンデレラ

学園祭　当日

血殺「じゃあ円、手初通りよろしく」
円「わかった」

今、俺と円は部室で出し物の再確認をしていたところだ。

血殺「朱雀たちも頼むぞ」
朱雀「わかったわ」
白虎「はいはい」
青竜「了解」
玄武「うん」

ちなみに、出し物は射的だ。だけど、商品は物じゃなくて

血殺「じゃあ一時間交代な」
円「早めによろしくな」
血殺「わーってる」

写真だ。

血殺、円「「またな」」

教室

血殺「ごめんみんな、少々遅れた」
一夏「気にしないでくれ」

始まってから十分遅れてしまっていた。

ラウラ「紅波はどうした？」
血殺「交代で部活の出し物を見てる」
シャル「そういえば、血殺って何部なの？」
血殺「来ればわかるよ」

来て欲しくねぇなぁ

箒「話が済んだら早く厨房に来てくれ」
血殺「わかった。今行く」

厨房

血殺「えーと、注文は」

チョコレートパフェ、チーズケーキ、杏仁豆腐ってデザートばっかじゃん！　太るぞ

血殺「そんじゃあ、始めるか」

一度に三つの料理をやっていく。

血殺「ラウラ！　チョコレートパフェとチーズケーキ、杏仁豆腐が出来たから運んでくれ」

ラウラ「了解した」

血殺「次は・・・・・」

乙

紙に書かれていたのは『執事にご褒美セット　織斑担当』と言う文字だった。

数十分後

円『血殺、時間だ』

血殺『わかった』

走って行けば三十秒ぐらいかな

血殺「箒」
箒「なんだ？」
血殺「交代の時間だから円と変わってくる」
箒「わかった」
血殺「じゃっ」

部室

血殺「戻ったぞ」
朱雀「おかえり」
血殺「どのくらい来た？」
青竜「ざっと５０くらいね」

まあまあの数だな

血殺「撃ち落としたのは？」
玄武「三人」
血殺「そのくらいか」

円なら、嫌がらないから大丈夫か

白虎「待合いの人が二十人ぐらい」
血殺「わかった」

一時間後

血殺『円、交代だ』
円『わかったよ。今行く』
血殺「円と代わるから」
朱雀「またね」

廊下

血殺「接触は出来たか？　オータム」
オータム「当たり前だ」

何時も通りの調子だ。

おそらく失敗するな

血殺「なら良い」
オータム「だが、企業の話をしたが聞く気すらなかったぜ」
血殺「接触するだけでアイツは人と親しくする」

だから、俺のことも普通に信じてるからな

オータム「私が心配する必要はねえみてーだな」
血殺「仕掛けはこちらでしておいた。だが、厄介な奴がいる」
オータム「厄介な奴？」
血殺「更識盾無と言う女が目標にベッタリ付いているから気をつけろ」

まったくダルい女だぜ

オータム「お前は私の心配する必要はねぇよ」
血殺「そうか。なら俺は戻るとしよう」

教室

血殺「鷹月さん。戻りましたよ」
鷹月「戻って来たもらったとこなんだけど、一時間くらい休憩しても大丈夫よ」
血殺「じゃあ、お言葉に甘えて休憩貰いますね」

男子更衣室に行って仕掛けの確かめでもするか

黛「おーい、四死神くん～」
血殺「何すか？黛先輩」
黛「写真貰えるかな？」

この人も暇だなぁ

血殺「いいですよ」
黛「じゃあ、ツーショットね」
血殺「誰とですか？」
黛「この二人とよ」

出てきたのはシャルとラウラだった。

血殺「一枚ずつですか？」
黛「もちろん」
血殺「まあ、やるって言った以上はやりますよ」

一人目　ラウラ

ラウラ「お前とはずいぶんと身長差があるな」
血殺「俺は身長が小さめの方が好きだぞ」

自分よりデカいとなんか惨めだし

ラウラ「そ、そ、そうか、それならいいのだが・・・」
血殺「じゃっ、撮りますか」
ラウラ「うわわわわわっ！　な、な、な、な、何をする！？」

俺がやったのは紛れもなくお姫様抱っこと言う奴だ。

血殺「良いじゃん良いじゃん。減るもんじゃないだろ？」

ラウラは一体何を考えているんだか、心を読んだこっちが恥ずかしいぜ

ラウラ「お、お前がそう言うのなら、し、仕方ない。す、少しぐらいは良いだろう」
血殺「そう、別に無理にやる必要はないから下ろそうか？」
ラウラ「お、下ろすな！　絶対に下ろすな！」
血殺「わかったよ」

後々見た写真ではラウラは顔が真っ赤だった

二人目　シャル

血殺「メイド服も似合うな」
シャル「ほ、本当！？」
血殺「ああ、普通に似合ってる」

執事服もかなり似合ってたしな

シャル「そっかぁ～」

撮影終了

血殺「さ～て暇つぶしするか」
盾無「盾無ねーさんの登場です」

いきなりかよ！　てかっ！

血殺「あんた、妹居なかったっけ？」
盾無「居るよ～」
血殺「そっ、じゃあな」

あんまり長くいると疲れるから逃げようとしたら

盾無「逃がさないわよ～」

先回りされた。

血殺「何の用ですか？」
盾無「生徒会の出し物に出なさい」
血殺「拒否権は？」
盾無「ないわよ」

何時ものことか

血殺「出し物って確か・・・シンデレラの演劇でしたっけ？」
盾無「そうよ」
血殺「わかりました。出ますよ」
盾無「ありがと」

男子更衣室

血殺「よう、一夏に・・・円もか」
一夏「なんだ。血殺も盾無さんによばれたのか！？」
血殺「まあ、そんなとこだ」

じゃなければこんな所に来やしない。

円「あの人は話してて疲れるな」

やっぱり情報が物を言うな。この男子更衣室を使うのがわかってて良かったぜ

盾無「一夏くん、血殺くん、円くん、ちゃんと着たー？」
一夏、血殺、円「「「・・・・・・」」」
盾無「開けるわよ」
一夏「開けてから言わないでくださいよ！」

まったくだ。
まあ、相手するだけ無駄だ

盾無「なんだ、ちゃんと着てるじゃない。おねーさんがっかり」
一夏「・・・・・なんでですか」

ただの変態だな

血殺「つーか、何しに来たんですか？」

盾無「はい、王冠」
血殺「そろそろですか？」
盾無「ええ、そろそろよ。ああ、台詞はアドリブでお願いね」
血殺「はいはい」
台詞なんて無いくせに

第四アリーナ

ブザーが響き渡り、照明が落ちる。
するすると幕が上がっていき、アリーナのライトが点灯する。
盾無「むかしむかしあるところに、シンデレラという少女がいました」
俺、円と一夏は舞踏会エリアへと向かう。
盾無「否、それはもはや名前ではない。幾多の舞踏会を抜け、群がる敵兵をなぎ倒し、灰燼を纏うことさえいとわぬ地上最強の兵士たち。彼女らを呼ぶにふさわしい称号・・・それが『灰被り姫（シンデレラ）』！」
それって『魔女』と書いてシンデレラの間違いだろ！）
盾無「今宵もまた、血に飢えたシンデレラたちのよるがはじまる、

王子の冠に隠された隣国の軍事機密を狙い、舞踏会という名の死地に少女たちが舞い踊る！」

訂正、吸血姫または、処刑姫の間違いだった

一夏、円「「は、はあっ！？」」

鈴「もらったぁぁぁ！」

鈴が短剣で一夏に斬り掛かった。

血殺「危ねえ一夏！」

俺はとっさに一夏を蹴り飛ばした。

一夏「サンキュー。血殺」

血殺「どういたしまして」

円「どうやら、俺と血殺は暇人のようだ」

血殺「みたいだな」

まだ不十分だが、結構な情報は入ってくるな

一夏「おい！それって酷くねえーか！？」

円「よそ見してる暇ねーぞ」

鈴の猛攻を避ける一夏だが、さらにセシリアまで介入してきた。

ふ～ん。そう言うことか

血殺「一夏！　なんで鈴とセシリアがお前を狙っているのかわかったぞ」

一夏「なんでだ？」
血殺「この演劇で王冠を取った奴はその王冠の持ち主と同室になれるんだ！」
一夏「だからってなんで俺！？」
血殺「自分に聞け！」

この唐変木がっ！

円「血殺！危ねえ！」
血殺「！？」

俺の王冠を狙ってきたのはラウラとシャルだった。

ラウラ「そいつをよこせ！」
血殺「嫌だよ！　電流が流れるんだろ！」

痛いのは嫌だからな

シャル「大丈夫だよ。痛くしないから」
血殺「いやいや　電流が流れる時点で痛いだろ！」

笑顔で何言ってやがんだよ！

ラウラ「つべこべ言わずにそいつをよこせ！」
血殺「円！　王冠を交換してくれ！」

おっ、王冠を交換とか我ながら巧いな

円「わりぃな血殺。もう一夏と交換しちまった」
血殺「はあっ！？」

な、なんだとぉぉ！

一夏「わりぃ血殺」
ラウラ「残念だったな血殺！　そいつは貰い受ける」
血殺「やるかよ！」

再びアナウンスが流れ始めた。

盾無「只今よりフリーエントリーの方の登場です。皆さん、残りの王冠を頑張って取りましょう」
血殺「このタイミングで！？」

残りの王冠って言ったって俺のしかねぇぞ！

盾無「ちなみに王子を私のところまで連れてきたらその二人は強制的に付き合ってもらいます」
血殺、一夏、円「「「・・・・・・はあっ！？」」」

その台詞を聞き『彼氏募集姫』《シンデレラ》が大量に湧いてきた。

箒「一夏！　私と一緒に来い！」
血殺「ちっ！」

わざわざこんなことまでしてくるなんて予想外だぜ

血殺「おい一夏！　そこ動くんじゃあねーぞ」
一夏「お、オウ」

もう少し待てば、お前を救ってくれるぜ。ＩＳと言う兵器からな

血殺「ったく、だりぃったらありゃしねぇ」
円「なら、早く切り上げよう」
血殺「使うのか？　ムーンを」

俺はその後、使って大丈夫なのかよと付け加えた。

円「ああ！」
血殺「それじゃあ、俺はお先に」
円「またな」

一夏が居ないということは上手く連れて行ったな

血殺「俺も行くか」

男子更衣室

盾無「あはっ。何も露出趣味や嫌味でベラベラと自分の能力を明かしているわけじゃないのよ？はっきりこう言わないと、驚いた顔が見られないもの」
オータム「ぐ・・・がはっ・・・・・。まだ・・・・・・まだだ！」

壁越しから聞こえたのはオータムの声と盾無の声だった。

聞いた感じは失敗したな

血殺『帰還しろ。オータム』

オータム『仕方ねえな』

盾無「いいえ、もう終わりよ。　ね、一夏くん？」

一夏「来い、白式！」

剥奪剤（リムーバー）で剥いだ白式のコアは消え、一夏に白式が装着される。

オータム「なあっ！？　て、てめぇ、一体どうやって」

一夏「知るか！食らえ！！」

オータム「ぐぅぅぅぅっ！！」

ちっ！何やってんだよ！　愚図が

血殺『仕方ない。アラクネは捨てて来い』

オータム『はあっ！？』

血殺『戦力が減ってはこれからの計画に支障が出る』

オータム『わかったよ』

数秒後に大爆発を起こし、廊下に逃げてきたオータムとすれ違う。

血殺「傷は癒やしてやるよ」

オータム「ふん。余計な世話だ」

血殺「そうかい。いつものところでな」

オータム「ああ」

オータムは去った。

俺はナイフを取り出し、自分の身体を傷付けた。

血殺「ぐあああああっ！」
盾無「その声は血殺くん！？」

盾無と一夏が廊下に出てきた。

血殺「女が煙の中から出てきた瞬間、俺をナイフで切りつけやがった」
一夏「血殺！　大丈夫か！？」
血殺「少しヤバいな」

よし、上手く騙せた

盾無「それより血殺くん」
血殺「なんですか？」
盾無「これ、なーんだ？」

盾無が持っていたのは……

血殺「王冠・・・・？」
盾無「うん、そう。これをゲットした人が持ってた男の子と同じ部屋で暮らせるっていう、素敵なアイテム」
血殺「知ってますよ。だから？」

何を言ってんだ？

盾無「ゲットしたのは、わ・た・し」
血殺「どうやら、やられたようだ」

行動を制限しねえとな

夜

オータム「てめぇ！　どういうことだよ!?」
血殺「止めろオータム！　エムにも予想外の事だってあるだろ！」
エムを壁に押さえつけているオータムを止める。
オータム「つーか、イブ！　仕掛けはどうしたんだよ!?」
血殺「お前が派手に動き過ぎなんだよ」
オータム「んだと!!」
お前が暴れ過ぎだけだっつぅの！
血殺「お前が愚かなだけだ」
オータム「だとしてもこいつだけは許さねー!」
エム「・・・・・・・・」
オータムを貶したような目で見つめるエムにオータムはナイフを取り出す。
オータム「その顔に、切り刻んでやる!」

？？「やめなさい、オータム。うるさいわよ」

バスルームから出てきたのは薄い金色の髪をした女性だった。

オータム「スコール」

スコール「怒ってばかりいると老けるわよ。落ち着きなさい、オータム」

何時もの口調で話をするスコール。

血殺「一つ聞かせろ。スコール」

スコール「なにかしら？」

血殺「お前たちはこうなることを予測していたのか？」

スコール「ええ」

やはり……か

血殺「仲間に黙っている理由でもあったのか？」

スコール「ないわ」

血殺「それから・・・お前たちが先生を殺したのか？」

スコール「・・・・・・」

は～ん。図星ね

血殺「なんでそれを」

スコール「そういえば、貴方には他人の心を読める力があったんだっけ？」

血殺「質問しているのはこっちだ」

ＩＳの展開は何時でも出来るようにする。

スコール「ええ、そうよ。私たち亡国機業がね」
血殺「・・・・」
スコール「それを知ってどうするの？　私たちを殺す？」

そうだな。その内殺すさ

血殺「いいや、ただ聞きたかっただけだ。気にするな」
スコール「そう」

翌日

生徒会メンバー「みなさん、先日の学園祭ではお疲れ様でした。それではこれより、投票結果の発表をはじめます」

ふ～ん。一位はシンデレラで、二位が俺らのか

生徒会メンバー「一位は、生徒会主催の観客参加型『シンデレラ』！」

結果を聞いて一度フリーズ後、大ブーイングが巻き起こった。

生徒会メンバー「はい、落ち着いて。生徒会メンバーになった織斑一夏くんには、適宜各部活動に派遣します。男子なので大会参加は無理ですが、マネージャーや庶務をやらせてあげてください。それらの申請書は、生徒会に提出するようにお願いします」

それを聞くなり納得の声が上がっていった。

血殺「つまり、一夏も地獄行きなわけか」

俺と一夏の地獄生活のはじまり、はじまり。

自室

血殺『イブだ』

スコール『何の用かしら?』

血殺『次の作戦は九月二十七日に決行しよう』

スコール『なぜ?』

血殺『当日にキャノンボール・ファストって名のイベントがある』

スコール『わかったわ』
血殺『ああ、それから』
スコール『なに？』
血殺『乱入させたらある奴を殺せとエムに伝えてくれ』
スコール『誰を？』

血殺『白帝のパイロット紅波円をな』

ミステリアスなシンデレラ（後書き）

今回は更新が早かったですねぇー。

俺さぁ、テスト前なのにこれ書いてたんだよね。かなりヤバいかも

それと途中から気づいたんですが、
朱雀たちを回収するのを忘れてた。

まあ、呟きはこの辺にしまして

また次回でお会いしましょう。

静かなる足音（前書き）

題名意味わからないですよねー

俺もわからない。

まあ、本編はじめますか

静かなる足音

九月

血殺「エムの奴、作戦は失敗したか。なにがちー姉の血族だ。笑わしてくれる」

俺は書類を取り出す。

血殺「日本代表か。俺には興味ないな」

書類を手荒く破って部屋を出た。

食堂

血殺「早いな。みんな」

一夏「おう血殺、今日は遅いな」

血殺「政府から日本代表をやってくれという書類が来てたから一応目を通してみたが、面白くなさそうだからやめた」

俺は『ファントム・タスク』のメンバーだからな。今は違うけど

一夏「すげぇな、代表ってことは千冬姉と同じか」

血殺「まあ、そんなとこ」

代表なんて所詮は見せ物だし、何処かの誰かさんみたいにキャーキャー騒がれるのは好きじゃないし。

ラウラ「血殺」
血殺「なんだ？」
ラウラ「お前はどうするのだ？」
血殺「なにを？」
ラウラ「キャノンボール・ファストに決まっている」

どうするって言ったってなぁ～

血殺「朱雀がセカンドシフトすれば、俺は絶対勝てるから大丈夫」
ラウラ「どういうことだ？」
血殺「朱雀の”レッドライズ“を攻撃に使って第二形態時の鳳凰を機動に使えばいいし、もし、レッドライズが全て破壊されても鳳凰は武器としても使えるから大丈夫」

それに”リアクトアーム“で敵さんからエネルギー補給も出来るし、炎射砲で攻撃も出来るから大丈夫だ。

ラウラ「便利だな」
血殺「オリジナルだけど、第五世代型だからな」
ラウラ「な、なんだと！？」

嘘はついてない。嘘は……ね

血殺「オリジナルだから、攻撃で消耗するシールドエネルギーが０なんだ」
ラウラ「便利過ぎではないか？」
血殺「まあな」

ちなみに、夕ご飯は唐辛子である。

鈴「一夏、あんた生徒会の貸し出しまだなわけ？」

急に話を変えたな。

一夏「ん？なんか今は抽選と調整してるって聞いたぞ」

鈴「ふーん・・・・」

なんでもなさそうに言って、ラー油の沢山乗った麻婆豆腐を食べる鈴。

一夏「ああ、そう言えばみんな部活動に入ったんだって？」

箒「私は最初から剣道部だ」

血殺「つい先日まで幽霊部員だったじゃん」

箒「う、うるさいぞ！　血殺」

そんなに怒るなよ

一夏「鈴は？」

鈴「ら、ラクロスよ」

一夏「へえ！　ラクロスか！　似合いそうだな！」

血殺「一夏、今のお前は最悪だぞ」

一夏は「棒を振り回すところが」と一瞬で思ったのだ。

鈴「なにがよ」

血殺「一夏のやつはなぁ～」

一夏「頼む血殺！　言わないでくれ！　死んじまう！」

一夏は席を立ち上がってまで俺を止めようとした

血殺「わかったよ」
鈴「怪しすぎるわね」

からかいやすいな

一夏「で、シャルは？」
シャル「そ、その・・・・料理部」
血殺「どんなの作ってんの？」

少し気になる

シャル「日本料理とかだよ」
血殺「へー、今度作ってくれよ」
シャル「う、うん！」

意外と上手そうだ

一夏「セシリアは？」
セシリア「英国が生んだスポーツ、テニス部ですわ」
血殺「テニスなら俺もできるぞ」

まあ、適当な知識だけだけどな

セシリア「では、今度一緒にいかがですか？」
血殺「ああ、今度な」

英国にいた頃もやってたのか、手ごわそうだ

ラウラ「ちなみに私は茶道部だ」
一夏「茶道部か。ラウラ、日本文化すきだよなぁ。・・・・あれ？
　そういえば茶道部の顧問って・・・・」
ラウラ「教官・・・・いや、織斑先生だな」

ほう、顧問は同じか

血殺「日本文化かぁ。俺はそのへんは全くの無知だからな」
ラウラ「私が教えてやろうか？」
血殺「頼むわ」
一夏「血殺って日本のこと全然知らないよな」

そりゃあ、ひどい目に散々遭ってましたから

血殺「確かに日本にいる時間の方が長いけど、どちらかと言えばドイツにいた頃が楽しかった気がする」
一夏「そうなのか。ちなみに部活は？」

そっから来るか！　だから唐変木とか言われるんだよ

血殺「射撃部。正式な部員は俺と円だけ」
シャル「えっ！？　部活って最低五人は必要だよね？」
血殺「ああ、だから、五人以上はいるぜ」

うん。六人いるよ……ほとんど人間には程遠いけどね

一夏「円と二人なんじゃあ・・・・？」
血殺「この際だから言うけど、俺のＩＳって人間なんだよね」
一夏「はあ？」

おい一夏、心の中でこいつは馬鹿かとかおもってんじゃね～よ

血殺「臨海学校で会った奴らだよ」

一夏「名前が違うぞ」

アホな面して言ってきた。

血殺「当たり前だ。そのままだったら意味ないだろ」

一夏「確かにな」

何を言ってんだ？こいつは

シャル「臨海学校ってことは魅永千鶴さん？」

血殺「察しがいいなシャルは。　その通りだよ。俺と一緒にいた四人は全員ＩＳだ」

一夏「ＩＳって人間になるのかぁ。俺のは夢の中だったけどな」

ほう、もうアイツと会ったのか。これは予想範囲外だった。まあ、どっちと会ったかは知らないが

一夏「そういえば、円はどうしたんだ？　同室だけど、最近見ないぞ」

血殺「束さんに呼ばれて白帝の最終調整だって」

一夏「大変だな」

血殺「アイツは頭良いけど、アースはないからな」

まあ、それ以上に危険なムーンとサンがあるけどな

血殺「それじゃあ、お先に」

一夏「またな」

白帝の改良とはな。やってくれるよ、篠ノ之束

血殺『エムか？　イブだ』
エム『何の用だ？』

いつもの調子でプライベートチャンネルに出てきた

血殺『白帝が改良されるらしい』
エム『つまり、お前が教えた弱点はもう無意味だということか？』
血殺『そうなるな』
エム『わかった』

部屋に帰ったら、まず落ち着けないからシャルの部屋にでも入るか

ちなみに今現在も例のルールは実行中。

シャルとラウラの部屋

血殺「ココアでも入れておくか」

三分後

ガチャッ

血殺「お帰り」

ラウラ「な、な、なんで、お前がここにいる!?」

すごい慌てた様子でラウラがドアの所で、俺を人差し指で差しながら言った。

血殺「逃げてきた」

ラウラ「あの女からか?」

部屋に入ってきたラウラ用に俺はココアをカップにいれる。

血殺「そういうこと」

ラウラ「まあいい」

見た目は冷静だけど、心はうるさすぎるな

血殺「ほい、ココア」

ラウラ「ああ、すまない」

血殺「!!　来る」

プルートの予知がそう叫んでいる。

ラウラ「誰がだ?」

血殺「天敵」

ラウラ「ドアを押さえろ！！」

俺とラウラはドアを押さえた。

盾無「あれ？開かない」

ドア越しから聞こえる悪魔の声を聞きながら、俺とラウラは息を殺し、ドアを押さえた。

血殺「！　避けろラウラ！」

ラウラ「！？」

俺とラウラは同時に緊急回避を行った。刹那、ドアが真っ二つに裂かれる。

盾無「ヤッホー。ラウラちゃん」

ラウラ「ちゃん付けでよぶな！」

ちゃん付けぐらい良いじゃないか

シャル「血殺、ここにいたんだ」

血殺「もう帰ります」

ドアまで差し掛かった時だった。

盾無「あら、帰っても私からは逃れられないわよ？」

血殺「そうですか。なら、今日は一夏の部屋で寝ます」

盾無「夜は気をつけてね」

血殺「はいはい」

盾無から逃げるように去る。

シャル「血殺。ちょっといいかな？」

廊下でシャルに呼び止められた。理由は大体分かっている

血殺「いいよ。週末は暇だし」

シャル「僕、なにも言ってないよ」

血殺「心の声を聞いた」

シャル「そ、そうなんだ」

何故か、顔を真っ赤にしている。理由はよく分からない。

血殺「駅前のモニュメントに１０時でいいか？」

シャル「うん」

血殺「じゃあ、そういうことで。またな」

帰ったら寝るか

静かなる足音（後書き）

え～。今回は実に短いです。

次の投稿はデートじゃあないのでご注意を

何でデートじゃないかって？

俺が一度もしたことないからに決まってます。ｗｗ

もう一つもどうぞ■Ｄ／（＾＾

設定！？（前書き）

え～。

この話は主人公とかのやつです。

読んだらわかるはず。

設定！？

四死神　血殺

年齢　１５歳

身長　１７２？

座高　８８？

体重　６８？

容姿　まあまあの顔

好物　ゲテモノ類

嫌物　味が濃い物

必需品　右目に赤の眼帯　ヘッドホン（聴いてるのは魔王）　サバイバルナイフ

専用機

朱雀、白虎、青竜、玄武、黄竜、その他四機（現在自ら製作中）

武器は多いから書きません！！

変な力

アース　全知全能　発動条件　自分が馬鹿だと認識することで発動

マーズ　肉体強化　発動条件　自分が弱いと自覚することで発動

マーキュリー　思考読取　発動条件　その人への想いが強いと発動可能（想いであれば何でもＯＫ）

プルート　未来予知　発動条件　未練があると自動発動

ヴィーナス　回復速度変更　発動条件　寿命が縮む（傷によって時間が変わる）

ジュピター　亜空間転送　発動条件　視力を下げることで発動（何時かは光を失う）

サターン　時間停止　発動条件　呼吸をしないが主

紅波　円

身長１７５

座高　９３

体重　７２

容姿　一夏と同レベぐらい

好物　女

嫌物　ゲスな男

必需品　絆創膏　ハンカチ　ティッシュ　リップクリーム　使い捨てコンタクト

専用機　白帝　黒帝（現在、コア自体が破壊されたから使用不可）

変な力

ムーン　人身操作　発動条件　相手が自分を見ていると発動可能（力を持った人が死ぬと最期に触れた人間が力を得る）

サン　人身憑依　発動条件　人を殺した数だけ使用可能（ムーンと同じ転移方）

設定！？（後書き）

なぜ、設定を今回やったかというと
楽だっていうのが本音です。　のほほんです。
うーん。そろそろあの子だっそかな～。
まあ、血殺くんが裏切ってから登場させます。
では、また次回にお会いしましょう。

過去編　～友だち～（前書き）

久しぶりすねぇ～。

最近はいろいろとありすぎて
大変だったんですよ～。

んじゃ、本編スタート

過去編　～友だち～

俺のそばに一人の男がいた。

??「せ、成功だ」

ここは夢の中か

??「ついに、我々の計画は遂行される」

これは三歳の頃にあった出来事か

??「やっと、やっと我々の実績は認められる」

嫌な夢だ。こんなのが夢に出てくるなんてな

壊してやる

グチャグチャグチャグチャ

??「ぐあぁぁぁぁあっ！！」

俺は初めての殺しを自分の手でやった。

殺しなんて簡単だ

ただ相手の胸を手で貫いて、心臓を潰すだけ。

血殺「な、なんだよ。　これ……！！！？」

その頃の俺の視界は明らかにおかしかった。

視界は赤と青に映った。

血殺「あああぁぁぁぁぁああああっ！！！！」

俺の、俺の身体を！

よくも、よくもやりやがったな！

殺してやる！　殺してやる！　殺してやる！　殺してやる！　殺してやる！

その頃の俺はあまりにも簡単に狂った。

？？「なんだ。何が起きた！」

人を殺す。

それは自分にとって、風船を針で割る並みに簡単で楽しかった。

俺は無闇に寄ってきた一人の男を殺した。
今度は首を一捻りしただけ。叫び声も出ないからとても便利。

血殺「皆殺しにしてやる！」

俺は研究者も、同類も全員血祭りにあげた。

同類の中には「死にたくない！」とか「助けてくれ！」とか泣き叫ぶ奴もいたが、俺は「わかった。助けてやる」って言って笑いながら殺して恐怖から助けてやった。

研究者共の中には「すまなかった」や「ごめんなさい」など言ってきたが、蟻を殺す勢いで殺していった。

そして

血殺「お前が最後の一人だ」

最後の人間には残念な位、死にかけていた。

？？「殺したければ、殺してくれ。どうせ、僕は死ぬ運命なんだ」

俺は殺そうと思ったが、殺せなかった。まるで、自分を見ているようで。

血殺「お前の名前はなんだ？」

？？「そんなことを聞いてどうするの？」

血殺「早く答えろ」

円「……円、名字は知らないけど、名前は円」

これが、俺と円の初めての出会いだった。

血殺「お前は俺に似ている。だから、俺とここを出ろ」

円「その前に、君の名前は？」

血殺「血殺。　紅波血殺」

円「血殺くんね」

俺たちはすぐに出口まで走った。

邪魔な障害は全て破壊して。

血殺「なあ、円」

円「なに？　血殺くん」

血殺「お前は辛い実験を受けたのか？」

友だちとして少し気になっていた。

こいつはどんな実験を受けてきたのか。

円「うん。　死にかけたのが四つほど」

血殺「……そうか」

羨ましかった。
自分は数え切れない程の辛い実験を受けてきたのに
こいつは四つしか受けてないことに

円「ねぇ、血殺くん」
血殺「なんだ？」
円「僕はこれから、四死神って言う名字にする。　四死神円」
血殺「そっか」

俺たちはやっとの思いで外に出た。
外の新鮮な空気を堪能した。

血殺「なあ、円」
円「なに？」
血殺「お前たちの名字をお互いに交換しないか？　そうすれば、俺もお前もお互いの痛みを知れるかもしれないだろ？」

俺はただ、痛みを知って欲しかっただけかもしれない。

円「良いね。じゃあ、今から僕は紅波円だ」
血殺「俺は四死神血殺だな」
円「うん」

俺たちはお互いの痛みを知った。

数日後　森

血殺「腹減ったな」
円「そうだね」

この数日間、何も食べてない。
誰とも会ってない。

血殺「どうせ、俺たちは死ぬ運命だったんだな」
円「そうだね」

俺たちは死を決めた。

？？「大丈夫！？」

女の声なのはわかったけど、
気を失って、顔が見れなかった。

血殺「どこだ？　ここ」

俺はベッドの上にいた。
見たことのない天井。甘い匂いがする。

？？「気がついた？」
血殺「お前は？」
クラリッサ「私はクラリッサ・ハルフォーフって言うわ」

これが、俺とクラリッサの初めての出会いだった。

クラリッサ「あなたは？」
血殺「四死神血殺」
クラリッサ「血殺ね。　ご飯持ってくるね」

クラリッサは部屋を出て行った。

そういえば、円の姿が見えない。
どこにいるんだ？

クラリッサ「持ってきたわよ」
血殺「ねぇ、クラリッサ。　円はどこ？」
クラリッサ「円？」
血殺「俺と一緒にいた奴」

クラリッサがお盆に乗ったパンとシチューを横の小テーブルに乗せた。

クラリッサ「あなたしかいなかったわよ」

血殺「は？　今なんて？」

こいつは何を言ってるんだ？

クラリッサ「だから、私が見つけたのはあなただけよ」

血殺「……ウソ……だろ……？」

クラリッサ「ウソじゃないわ。本当のことよ」

俺は三ヶ月間、クラリッサの元で暮らし、ドイツを離れ、日本に帰った。

過去編　～友だち～（後書き）

久々に書いたんで、ちょっと疲れましたねぇ。
短いのにｗｗ

では、また次回

友達の友達の妹！？（前書き）

最近元気ないです。
気力もないです。
視力もないです。
時間もないです。

あるのは溜まりに溜まったスケジュール。

シュールの話は置いといて、

本編スタートです。

友達の友達の妹！？

血殺「ふぁぁ……眠……」

昨日の夜は散々だった。

盾無さんが布団の中に入ってきて寝てるんだよ？
しかも、夢は悪夢だし

血殺「まっ、考えても無駄か」

現在の時間は八時半
約束は十時に駅前のモニュメント

血殺「部屋に戻ってタバコ吸お」

俺は部屋に戻って一服し、ガムを噛みながら私服に着替え、一夏の部屋に戻って感謝の置き手紙を置いて出掛けた。

現在九時。

シャルとラウラの部屋には既にシャルは居なかったから、恐らく気合いが入りすぎて出掛けてしまったのだろう。
俺も急がねば

？　？　？

（髪、変じゃないかな？　もう一回見ておこうかな）

約束の時間より４５分以上も前に着いたシャルロットは十二回目になる髪のチェックをする。

（う～ん。　なんか決まんないなぁ……）

実際、それ程気にならない前髪のチェックを何度もするシャルロット。

（早く来すぎたかな）

約束の時間までまだ４０分以上あった。

（ふう……。気合い入りすぎかな。　ちょっとリラックスしよっと）

？　？　？

血殺「やべえ、無駄な時間掛かっちまった」

俺は駅前のモニュメントまでダッシュした。

ある生き物を連れて。

？　？　？

血殺「この辺だったよな。　モニュメントって」

俺の眼はすぐにシャルを捕らえたが、様子がおかしかった。
チャラそうな男に絡まれていたのだ。

シャル「触らないでくれます？　そのきつい香水の匂いが移ると困るので」
チャラそうな男1「な、な、ななっ……！？」

七？　ドラ○ン○ールでもあつめてんのか？

チャラそうな男2「お、おい！　離しっ……」

チャラそうな男は二人とも気絶してしまった。たかが一撃の手刀で。

血殺「すまねぇな遅れちまった。　大丈夫か？」
シャル「血殺っ！」

いや、そんなに喜ぶことか？

その時、俺の肩に乗っているある生き物が俺の肩を突っついた。

血殺「よしよし。後で飯あげるからちょっと待ってな」
シャル「ち、血殺。……なに？　それ」
血殺「なに？って、鳶だよ。　よく空を飛んでんだろ？」

そう、俺の肩には体長６０？ぐらい鳶が乗っている。

シャル「いや、そうじゃなくて。なんで鳶を連れてるの？」
血殺「弱ってたコイツがカラスに襲われてたから助けた。　まあ、すぐに自然に帰すけどな」
シャル「そ、そうなんだ……」

シャルの顔は笑っていたが、引きつっていた。

血殺「ほら、行きな」

鳶は勢い良く飛び去った。とびだけに

血殺「じゃ、行こうぜ？」
シャル「う、うん！」
血殺「顔赤いけど、大丈夫か？」
シャル「大丈夫！　へ、平気！」

全く大丈夫そうには見えない。

血殺「じゃあ、どこからまわる？」
シャル「え、え、えっと、あそこ！」

……え？　シャルロットさん？
女性用下着売り場どういうことですか？

まあ、ここは平常心を保とう。

血殺「まっ、シャルもそういう物が見たい時期があるよな」
シャル「ご、ごめん！　間違い！　違うの！　違うから！」

シャルは顔を真っ赤にして言った。

血殺「大丈夫大丈夫。俺もこういうのには慣れたから」

慣れちゃいけないと思うが、アイツらのせいで慣れてしまった。

シャル「だ、だから、違うんだってばっ！」
血殺「ほらほら、さっさと入ろうぜ」

シャルの手を引っ張って、俺たちは店内へ入った。

？　？　？

（うわ……綺麗な金髪……。モデルみたい……）

五反田蘭は店に入ってきた紺色の髪をした男性（血殺）と金髪の女性（シャル）に目がいってしまった。

血殺「選んでくれれば？」
シャルロット「別に良いのに……」

シャルロットはしぶしぶ店の奥へと向かった。
血殺はケータイを取り出した。
血殺「もしもし、一夏？」
（え？　一夏さん？）
血殺「五反田蘭って人知ってる？」
（わ、私の名前！　どうして……！？）
蘭は手に持っていた下着を棚に戻す。
血殺「へぇ～中学の友達の妹なんだ。　しかも、来年うちの学園に入学する。　ありがと、じゃあな」
血殺は蘭に近寄った。
血殺「ねえねえ」
蘭「な、なんですか！？」
血殺「織斑一夏って知ってる？」
蘭「は、はい、知ってますけど……」
（一夏さんの友達かな？）
血殺「自己紹介しておくか。俺は四死神血殺、一夏のクラスメートにして日本のＩＳの設計者だ」
蘭「四死神さん？」
血殺「血殺でいいよ。　名字は偽名だから」

（かっこいい人だなぁ～。一夏さんには勝てないけど）

シャルロット「血殺。どうしたの？その娘」

蘭の後ろからシャルロットが現れた。

血殺「ああ、五反田蘭って言って一夏の友達の妹」

蘭「ご、五反田蘭です。よ、よろしくお願いします」

シャルロット「シャルロット・デュノアです」

血殺「そうだ。君も一夏の誕生日プレゼント一緒に選んでくれない？」

蘭「は、はい！　ぜひ！」

？　？　？

シャル「こんなのはどうかな？」

一夏『いや、ちょっと……』

血殺「お前はわがままだなぁ」

ＴＶ電話で一夏に好みの腕時計を聞いているが、全く当たりが出ない。

血殺「もう、テキトーで良いか？」

一夏『あんま派手じゃなければ……』

血殺「了解」

一夏に聞いても無駄だと言うことに気づいたので、電話を切った。

血殺「君も腕時計持ってんの？」
蘭「もってないです。ケータイの時計で十分かなって」
血殺「好きなの選んできな。お金は気にしなくていいから」

正直、金は捨てるほどある。

蘭「い、いえ、わるいですから」
血殺「別に良いから。　中学生の小遣いじゃあ、買えないだろ？」
蘭「そ、そうですけど……」
血殺「それとも、中学生でバイトしてんの？」
蘭「し、してないですよ！」

おやおや、本気にしちゃったかな？

シャル「これなんてどうかな？」

戻ってきたシャルの手には白の腕時計が握られていた。

シャル「シルバーより一夏にあうんじゃない？　ほら、ガントレットも白だし」
血殺「確かにな。　じゃあ、君もお揃いで良い？」
蘭「良いんですか？」
血殺「良いよ。大した出費じゃないし」

友達の友達の妹！？（後書き）

最近寝不足で頭が痛いです。

何時も寝不足なんですが、最近はより痛いです。

それはさて置き、次の話も一応デートです。

では、また次回に

ちっちぇな（前書き）

ＰＶ数５００００突破しました！

これも読者の皆様のおかげです。

自分的には駄作かと思っているのですが、
意外と読んで頂けてるようで何よりです。

これからもＩＳ（インフィニットストラトス）返り血の眼帯をよろしくお願いします。

では、本編開始。

ちっちぇな

血殺「昼飯どこにする？」
シャル「う～ん、どうしよっか」

時間は十二時を回っていたから食事場所を探しているんだが、なかなか決まらない

血殺「君は？　何か食べたい物とかある？　奢るよ」
蘭「い、いえ！　自分の分は出せますから！」
血殺「じゃあ、出せないような所にしよう。　向こうのオープンカフェとか」
蘭「あ、あそこ、結構高いですよ」
血殺「入ったことあるの？」
蘭「ど、ドリンクでだけ……」
血殺「じゃあ、決まりな」

俺は二人の手を掴み、オープンカフェに入っていく。

シャル「へぇ、おしゃれだね。ここ。ちょうど今日って暖かいからロケーションも抜群だね」

ロケーションってなんだ？
まっ、何でも良っか

店員「いらっしゃいませ」
血殺「今日のランチってなんですか？」
店員「はい。今日のランチは蟹クリームスパゲッティとなっております。デザートは梨のタルトです」

血殺「じゃあ、それを三つ」
店員「かしこまりました」

店員が帰っていった。
そして、何故かシャルと蘭がじーっと俺を見てきた。

血殺「どうかした？」
シャル「いや、手慣れてるから」
血殺「ああ、休日は散々こんな店に寄らされてたからな。嫌でも上手くなるさ」
蘭「あ、あの、血殺さんって、よくこういう店に来るんですか？」
血殺「中学の頃は週２で行ってたよ。今でもわけありで月３ぐらいで言ってるよ」
蘭「そ、そうなんですか……」
血殺「この店は初めてだけどな」

まあ、スコールの護衛かつ、気分転換にだけどな

蘭「あ、あの……」

蘭が気まずそうに話掛けてきた。

血殺「ん？」
蘭「お二人って、付き合ってるんですか！？」
血殺「ううん。付き合ってないよ」
蘭「で、でも、仲良いですよね？」
血殺「まあ、少しな」

突然の発言でシャルは顔を真っ赤にして黙ってしまった。

その時、店内に銃声が鳴り響いた。

蘭「きゃあぁぁぁっ！」

もう一度銃声が鳴り響いた。

？？「静かにしやがれ！」

ちっ、野郎どもは逃亡犯か。おおかた、銀行強盗だな。

強盗「黙って俺たちに従え」

数は五。全員がハンドガンか。

こうなりゃ、賭だ！

血殺「ま、待ってくれ！　あんたたちの要求が知りたい！」

強盗「なんだ坊主。　俺たちは黙ってろって言ったんだぜ？　わかったら黙って床に伏せろ！」

血殺「ちっちぇな！」

俺は朱雀を展開する。

強盗「あ、ＩＳ！？」

血殺「死にたくなかったら、黙って銃を捨てろ」

朱雀の翼からは既に”レッドライズ“が飛ばされてあり、強盗どもを打ち抜けるようにしてある。

強盗「こ、こっちには人質が腐るほどあるんだぜ？　見殺しにする気か？」

五人中二人が客に銃口を向けている。

血殺「残念でした。他人の命なんぞ俺には関係ない」

俺はミラージュモードでコールしていた”リアクトアーム　ライトニングモード“で強盗どもの首を掴み、持ち上げた。

強盗「た、頼む！　殺さないでくれ！」

血殺「大いなる宇宙の中の小さな生き物の小さな頼みか……

ちっちぇな」

笑みを浮かべながら、気絶する程度の電気を走らせた。

その後警察を呼び、事件はけが人、死人は出なかった。

事件も一件落着し、その後はランチを食べ、俺たちは店をあとにした。

◇　◇　◇

今は帰り道の途中だ。

血殺「あ、そうだ」

俺はケータイを取り出した。

血殺「ねえ、キャノンボール・ファストの特別席のチケットあげるよ」

蘭「い、良いんですか！？」

血殺「ああ。　あげる人いないし、来年来るんだったら視察ぐらいはしたいだろ？」

蘭「あっ、はい！　ぜひぜひ！」

蘭が取り出したケータイにダイレクト接続で、チケットデータを転送する。

蘭「あ、ありがとうございます！」

血殺「じゃあ、今度会うのは一夏の誕生日パーティーかな？」

蘭「は、はい」

血殺「じゃあな」

シャル「またね。蘭ちゃん」

ちっちぇな（後書き）

うわっ！
今回かなり短っ！
てか、シャルの出番少なっ！

なんて、最後の方に思いました。

次回はちょーっと遅れるかもしれません。

では、また次回

模擬戦（前書き）

先ほどは申し訳ありませんでした。

こちらの手違いで中途半端な物を更新してしまいました。

本当にすみません。

本編は授業からです。

セシリアの話はどうしてもめり込みにくいので、カットしました。

まあ、私はセシリアのことをどうでも良いと思っているんで、勝手に生き、勝手に行動し、そして勝手に死ねって感じです。

ではでは、本編スタート

模擬戦

真耶「はい、それでは皆さーん。今日は高速機動についての授業をしますよー」

俺ら一組の副担任、山田先生の声が第六アリーナに響き渡る。

真耶「この第六アリーナでは中央タワーと繋がっていて、高速機動実習が可能であることは先週いいましたね？　それじゃあ、まずは専用機持ちの皆さんに実演してもらいましょう！」

山田先生がそう言ってばばっと手を向けた先には、俺、セシリア、一夏、そしてまだ調整中の白帝をいじっている円がいた。

真耶「まずは高速機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備したオルコットさん！」

これまた、ゴッツい装備をしたもんだな。

四基の射撃ビット、腰部に連結した二基のミサイルビット。計六基を全て推進力に回すのが、このパッケージの特徴らしい。あまり良いとは想えないが、まあよく考えた方か

真耶「それと、通常装備ですが、スラスターに全出力を調整して仮想高速機動装備にした織斑くん！　まずは、このふたりに一周してきてもらいましょう！」

血殺「先生、俺らは？」

真耶「四死神くんたちは模擬戦をしてもらいます」

血殺「了解。円も聞いてたな？」

円「しっかり」

空中投影ディスプレイの方を向きながら、左手を挙げて、左右にひらひらと振る。

血殺「んじゃ、俺も作業に入るか」

千冬「その前に、四死神。お前に言っておくことがある」

血殺「なんです？」

千冬「黄竜はお前自身が使う気がないので良いが、朱雀に関しては使用するな」

血殺「なんでです？」

千冬「あれの速度は異常だから、すぐに終わってしまうだろ」

なるほどね。あくまで公平にするってことか

血殺「分かりました。話は以上ですか？」

千冬「ああ、それだけだ」

襲撃時のメンバーを代えないといけないな

真耶「では、……3・2・1・ゴー！」

合図と同時に、一夏とセシリアは一気に飛翔する。

血殺「調整。終わったか？」

円「ちょうど終わったよ」

円はディスプレイを閉じて立ち上がる。

円「にしても、束さんもこんなのをよく作ったよね」

血殺「詳しくは聞いてないが、確か投剣タイプだったか？」
円「そっ、好きなポイントに剣を出現させて、敵に当てるタイプだよ」
血殺「剣ビットが何もない場所から現れて、突っ込む感じか？」
円「まあ、そんな感じ」
かなり厄介な物を作ってくれたな。束さん
真耶「はいっ。おつかれまさでした！　ふたりともすっごい優秀でしたよ～」
一夏とセシリアが知らぬ間に帰って来ていた。
真耶「では、四死神くんと紅波くんはスタートラインに着いてください」
血殺「一夏。チャンネル４２７にしておけよ」
円「あと、チャンネル２０２だ」
一夏「お、おう」
青竜セカンド・シフト
青竜のセカンド・シフトは銀の福音にかなり似ている。
と言うか、生き写しだ。
まあ、従兄機だから、仕方ないんだが……
俺と白帝のセカンド・シフトを展開した円がスタートラインに立つ。
真耶「では、はじめますよ！　……３、２、１、ゴー！」
青竜の翼を大きく広げ、急スタートする。

円は通常のスタートで、地道に加速していく。

円「そんなんじゃ、カーブで壁にぶつかるぜ？」

血殺「安心しな。ぶつかってオチのパターンは無えから」

円「そうかい」

カーブ直前で、スラスターを四から二に下げ、曲がる。

カーブを抜けて、後ろを向きながら、言った。

血殺「お前こそ、事故るなよ」

円「何時の話だ？」

慌てて前を向くと、すでに円が居た。

血殺「瞬時加速か？」

円「事象干渉だ」

血殺「始めて聞く名だな」

円「こいつも始めてだろ？」

俺から見て、円の背の前に小さな円が展開される。

円「〝レガシィ・エッジ〟」

刹那、円から無数のエネルギー刀現れ、俺に向かって放たれる。

血殺「〝青き突風〟」

翼を羽ばたかせ、エネルギー刀を全て吹き飛ばす。

血殺「面倒くさい武器だな」
円「余所見は禁物だぜ」

円の視線の先には、巨大な実体剣が俺の頭上にある。

円「カラミティ・ソード」

青竜の翼に実体剣が落とされる。
つまりは、実体剣が直撃したって言った方が早いな。

そして、たった一撃でシールドエネルギーがゼロになった。

青竜が青の粒子となって散った。

血殺「バリア無力化!?」
円「正解。残念だったな血殺」

即座に、玄武を展開し、ゆっくり地表に着地する。

俺の負けで模擬戦は終了した。

模擬戦（後書き）

円くんのＩＳ・白帝はパクりを入れました。

元はブレイブルーにでてくるν１３の武器です。

内容辺りは自分でお願いします。

話は変わりますが、鈴って「私を優先しなさいよ！　幼なじみでしょ！」と言う台詞が多々ありますが、幼なじみじゃなかったら、乙ですよね？ｗｗｗ

そんなことを先日、友達と話してました。

つーわけで、次回はニューＩＳを三機出します。

ではでは、また次回！

作戦開始（前書き）

久しぶりの投稿になってしまいました。

今回は少々意味の分からない文章があるかもしれませんが、そのへんは大目に見てください。

てなわけで

本編スタート！

作戦開始

とうとう来てしまったキャノンボール・ファスト当日。
会場にはかなりの人が押し掛けている。

一夏「おー、よく晴れたなぁ」
血殺「天気とレースは別物だろ？　晴れたところで調子が良くなるのか？　お前は」
一夏「そういう理由じゃないが、ただ気合いが入るよなってことだ」

俺はどういう反応を取ればいいのだろうか？
分からないと言うより、分かりたくないの方があってる気がする。

円「なあ、何時まで油売ってるつもりだ？　早くしないと怒られるぜ？」
血殺「ああ、そうだな」
一夏「じゃ、箒が来る前に行くか」
血殺「そうだな」

俺たちは参加者が待機しているピットに戻ることにした。

◇◇◇

わぁぁぁ……！　と、盛大なる歓声がピットの中まで響く。

現在は二年の連中のレースが行われてる。
そして、ピットでは専用機が時機のＩＳを展開してレースに向けての準備をしている。

血殺「なあ、円」
円「なに？」
血殺「事象干渉って使うのか？」
円「使わない。と言うより使えない」
血殺「何かあったのか？」
円「白帝はまだ不十分な所が多いんだ。今回のレースも本当は出場しない予定だったし」
血殺「はあ～ん。あれでまだ不十分ねぇ」
円「仕方ないんだよ。事情があるんだから」

話を終えると、円は白帝を展開する。

改良版の白帝はシールドエネルギーが極端に少ない代わり、一度に消費するシールドエネルギーが通常のＩＳの約?まで少なくなる。

血殺「それにしても、セシリアと鈴の装備は無駄にごついな」
鈴「ふふん。いいでしょ？　「いや…あんまり…」　何ですって！？」
円「まあ、良いじゃん。人それぞれだろ？」
箒「そうだな。戦いは武器で決まるわけではないしな」
シャル「みんな、全力で戦おうね」

今回の任務は円を上手く殺ることだ。あんまり素性をバラしたくはねぇなぁ～

真耶「みなさーん、準備はいいですかー？　スタートポイント地点まで移動しますよー」

各々が頷くと、マーカー誘導に従ってスタート位置へと移動する。

血殺『円。聞こえるか？』
円『聞こえてるよ。血殺』
血殺『作戦通りに行動を行えよ』
円『わーってる。安心しろ』
血殺『……悪かったな。こんな思いさせちまって』
円『珍しいな。お前がそんな事を言うなんてね』

円はプライベートチャンネルでクスクスと笑う。

円『なあ、血殺』
血殺『んだよ』
円『俺は……ったよ』
血殺『そうか』

少しすると、大きなアナウンスが響いた。

『それではみなさん、一年生の専用機持ち組のレースを開始します！』

俺たちは各自位置に着き、スラスターを点火した。

超満員の観客が見守る中、シグナルランプが点灯した。

3……2……1……ゴー！

六機が勢い良く駆け出す中、俺と円はスタートしない。

血殺「セカンド・シフト。応龍機動」

多機能武装翼（アームド・ウィング）を展開する。

アームド・ウィングはアタック、ディフェンス、スピードの三つに分かれていて、モードによって翼が変わるようになってる。

円「ツイン・リボルバー・イグニッション・ブースト。シールドエネルギー圧縮」

両脚に付いたスラスターがキィィィンッ！と音を立てる。

血殺「モード、スピード。シールドエネルギー収束」

黄金の翼が展開され、飛び立つ鳥の翼のように、翼をパタパタと上下に揺らす。

血殺、円「「瞬時加速《イグニッション・ブースト！」」

行き着いた先には、誰もいない。

円「あれ？　もしかして、もう行っちまった？」

血殺「んなわけあるか！　まだ誰も来てないんだろ？　そのくらい察しろ」

円「仕方ない。一端止まろう」

仕方なく止まることにした俺たち。それにしても遅い。
数十秒経つと、”衝撃砲“が壁に直撃する音が届く。

血殺「来るぞ」
円「ああ、分かってる」
血殺「応龍。モード、アタック。エネルギー羽展開」
円「”ソードサマナー“。”レガシィ・エッジ“。”カラミティ・ソード“。展開」

数秒後、レーゲンとリヴァイブが姿を現す。

血殺、円「「散れ」」

刹那、白銀の翼から一斉にエネルギー羽が放たれる。
同時に、白帝の十八番。ソードサマナーの剣が放たれる。

ラウラ「なにっ!?」
シャル「うそっ!?」

反応しきれなかった二人に剣が容赦なく、向かう。

シールドエネルギーをある程度削り、再び前に加速する。

血殺「それじゃあ、逝くか?」
円「ああ、そうだな」

俺たちが二週目に差し掛かった瞬間、円の左胸を何かが貫いた。

飛び散る鮮血。
騒ぎ出す観客。
そして
上空で飛翔する四つのＩＳ。

血殺「サイレント・ゼフィルス……か」
ラウラ「大丈夫か！？」
シャル「血殺！」

今度は駆け寄ってきたシャルとラウラにＢＴライフルの攻撃が降り注ぐ。

血殺「ラウラ！　シャル！」
一夏「大丈夫か！　ラウラ、シャル！」

後から一夏、箒、セシリア、鈴の四人が駆け寄る。

次の瞬間、再びＢＴライフルの攻撃が降り注いだ。

血殺「モード、ディフェンス！」

漆黒の翼が大きく翼を広げ、ＢＴライフルからの攻撃を防ぐ。

セシリア「血殺さん！　あの機体はわたくしが！」
血殺「おい、セシリア！　仕方ない、一夏はそこで三人の防御を！　鈴と箒は俺と一緒に連中の相手だ！」
一夏、箒、鈴「「「わかった！」」」

セシリアに続き、俺たちは飛翔する。

サイレント・ゼフィルスに向かう俺たちの前に三機のアンノウンが割り込む。

三機ともゼフィルス同様に、バイザーが取り付けられている。

血殺「ちぃっ、邪魔者がっ！」

箒「仕方ない。押して通るぞ！」

鈴「面倒くさいわね！」

俺はエネルギー羽、箒は空裂のエネルギー帯、鈴は衝撃砲を放つ。

同時に、緑の一機が前に出てくる。

出てきた緑の機体の操縦者は不適な笑みを浮かべ、右手を突き出す。

次の瞬間、俺たちは目を疑った。

箒「なっ！？」

血殺「何が起きたんだ……！？」

鈴「どうなってんのよ！」

再び鈴が衝撃砲を放つが、やはりさっきと同じだ。

攻撃が吸収された。

血殺「！！　鈴！　後ろだ！」

鈴「……えっ……？」

刹那、鈴は後ろから赤い機体に斬られ、墜ちていく。

甲竜は光の粒子に戻らず、ボロボロと崩れ落ちてゆく。

血殺「そうか、分かったぞ。箒！」

箒「な、なんだ？」

血殺「この三機は俺が引き受ける。だから一夏に補給をしろ」

箒「だが、それではお前が！」

血殺「安心しろ。打つ手はある」

箒「……分かった」

箒はコクリと頷くと、一夏の下へ飛んだ。

血殺「さて、一丁やりますか」

作戦開始（後書き）

今回出てきたおニューの機体ですが、出番はかなり少ないです。

と言うか、無いに等しいです。

そして、作者の気分で円くんを削除致しました。

まあ、ちゃんと殺してやりますからそのへんはご安心を

ではでは、また次回

ブラッディー・バインド（前書き）

お久しぶりですです。

いやはや、ちょいちょい文章の書き方を変えるだけでたくさんの方々に読んで頂けるとは有り難いですね。

まあ、そんなことはどうでも良いとして

本編スタート！

ブラッディー・バインド

血殺『はあ、なんで俺がこんな事をしないといけないんだ？』

コンタクトを開いて、四人に問いてみた。

白虎『知らないわよ』

玄武『けど、一つだけ言えるのは』

朱雀『今の状況下では、私たちは戦うしかないと言う事よ』

青竜『まあ、楽しくやりましょ』

目の前に居る、三人のアンノウンパイロットがニヤリと笑う。

血殺「一緒に散歩でもどうかな？」

何故、こんなナルシストっぽい上、気持ち悪い台詞を吐かないといけないのは、当の本人である俺にも分からない。

しかし、そんな甘い言葉とは裏腹に、すでに、肩のプラズマ砲と腰のレールガンの口が開いていた。

血殺「ちょっくら、誰も居ない場所までね」

そう言い放ち、口の開いたプラズマ砲とレールガンを放つ。

さっきと同じように、緑のＩＳが前に出てきて、右手を突き出し、攻撃を無力化する。

血殺「んなことは、詠めてんだよ」

”竜の尻尾“をコールし、緑のＩＳを弾き飛ばす。

次の瞬間、警告音が鳴り響く。

『敵ＩＳ、後方よりエネルギー刃。刃長１３０』

”青炎龍刀“を展開し、エネルギー刃を受け止める。

血殺「……やはりか……」

エネルギー刃と交わっている刃が錆びてゆく。否、風化していっている。

これで、二機の特徴は分かった。あとは、白いのみ。

能力が分かり、俺が油断した瞬間だった。

血殺「……ゴホッ……」

俺の右上半身を二角の槍が貫く。

ぐらりと、一気に歪む視界。

口から漏れ出す鮮血。

大量の出血で、身体の自由が思うように動かない。

右肺が潰され、呼吸もし辛くなる。

何より、酸素が足りない。

血殺「て……めぇ……バ……リ・ア……むこ……う…か……か……」

ゲホッ、ゲホッ、と咳混む度に口から大量の血が吐き出される。

血殺「さすが…もと、代表…候補…生…だな」
青竜『――ごめん血殺。抑えられない』
血殺「!?」

ヤバいな、あれが発動するぞ

暴走が…

だんだんと意識が遠退き、闇に包まれていった。

???

青竜「あは、あははは」

不気味な声を発して笑う青竜。その声はまるで、楽しんでいるかのようだ。

青竜「やっと、やっとだ。やっと…昔の続きが出来る！　昔、最後まで出来なかった、戦いがっ！」

イグニッション・ブーストで、赤のＩＳの裏をとる青竜。その手にはすでに”竜の息吹“が展開されている。

青竜「ね？　花蓮？」

”竜の息吹“による零距離射撃により赤のＩＳはアリーナのバリアーに叩きつけられる。

青竜「華音に、有華」

射撃と同時に展開した”竜の尻尾“で白と緑の二機を赤のＩＳの方へ弾き飛ばす。

三機がぶつかった衝撃に耐切れなくなったバリアーが割れた。

割れたバリアーの隙間から三機が逃げ、それを追い掛けるように、青竜もバリアーの隙間から飛び出す。

青竜「……ぐっ、……うぁぁあぁ……っ！」

暴走のタイムリミットの時間が尽き、呻き声と共に血殺と青竜の精神が元の体へと帰る。

血殺『全員集合だ。ここならバレることはないからな』

集合の合図と共に、先ほどまで戦闘を行っていた三機が現れる。

三機のパイロットはバイザーを取り、それぞれの顔を曝し出す。

血殺「ご苦労だったな。朱雀、白虎、玄武。そいつらは使い物になるか？」

赤いＩＳに乗った朱雀が最初に口を開いた。

朱雀「まあまあ。乗り心地は悪くないけど、コントロールが難しいかもしれない」

白虎「こっちはそれ程問題なし。ただ、武器のバリエーションが少な過ぎ」
玄武「僕のほうは、全くと言える程大丈夫」

続いて、白虎、玄武と口を開く。

血殺「なら、良しとするか。じゃあ、お前らはスコールの方に回れ。俺は戻っておくから何時もの場所で」

三人はコクリと頷き、それぞれのＩＳと共に、飛び去る。

血殺「そんじゃあ、帰るとしますか」

血殺は鳥のように飛び立ち、バリアーの向こうへと姿を消した。

ブラッディー・バインド（後書き）

ウィッス

最近、レポートなどに追われる日々が続き過ぎてだんだん疲れてきました。
そんな疲れと闘っても疲れしか獲られないのは、とても残念です。

それはさて置き

11月11日のポッキー&プリッツの日にポッキーとプリッツを食べ忘れた自分ですが、代わりにトッポを食べましたｗｗ

まあ、かなりの乙話です。

ではでは、また次回！

狂い出す歯車（前書き）

お久しぶりです。

今回は、まあ、長いようで短い話です。

何時も通り、楽しんで読んでいただければ、恐縮です。

ではでは、本編スタート

狂い出す歯車

シャル「せーのっ」
全員「「「誕生日おめでとうっ！」」」」
ぱぁんぱぁんっとクラッカーが鳴り響く。

一夏「お、おう。サンキュ」

時刻は夕方五時、場所は織斑の家。
キャノンボール・ファストでの戦闘を終えた俺たちは気を取り直して、誕生日パーティーをやっている。

円は集中治療室で今はお眠り中。
エム、スコール、朱雀、白虎、玄武は上手く逃げ切り、エムとスコールは何時もの場所で休憩。朱雀、白虎、玄武はすでに、待機状態に戻っている。
今回の戦闘で出てきた三機・フェニックス、バイコーン、ヨルムンガントも、今は待機状態だ。

一夏「にしても、この人数は何事だよ……」

確かに人数が多すぎる。
箒、セシリア、鈴、シャルに、ラウラ。
そんで、先日知り合った蘭に、一夏の友人の五反田弾に御手洗数馬。
さらに、生徒会メンバープラス黛先輩。
無駄に大人数が揃ったため、広くもないリビングがいっぱいいっぱいだ。

血殺「俺の寿命もあと数年が限界かな」

まあ、どうせ繰り返されるんだから別に構いやしないか。
だが、その前にヤツらの頭を狩りたいな

そんなことを考えていると、蘭がケーキをお皿に乗っけて持ってきた。

蘭「血殺さん。ケーキ食べますか？」
血殺「あ、ああ、貰うよ」

乗せられているのは、俗に言うチョコケーキだ。ココアベースのスポンジに、生クリームとチョコのケーキ。見た感じは結構手の込んでいる物だ。

ケーキの出来はかなり良かった。ふんわりとした食感のスポンジに、程よい甘さのクリームが何ともいえない。

血殺「うん、美味しい」
蘭「そうですか、お口にあって何よりです」
血殺「ごちそうさま、ありがとな」
蘭「いえ、気になさらないで下さい」

お皿とフォークを蘭に手渡し、ケータイを開く。

Ｔｏ　一夏
ｓｕｂ　誕生日プレゼント
ＴＥＸＴ　お前を誘拐したファントムタスクの発案者と実行犯が分かった。

送信ボタンを押し、送信する。

数分すると、メールが帰ってきた。

ｆｒｏｍ　一夏
ｓｕｂ　無題
ＴＥＸＴ　誰なんだ？

此処は敢えて暗号っぽくしておくか

Ｔｏ　一夏
ｓｕｂ　Ｒｅ
ＴＥＸＴ　１１１１１９９９
自分の力で解いてみな

送信ボタンを再び押し、送信する。

今度はさっきより早く返事が返ってきた。

ｆｒｏｍ　一夏
ｓｕｂ　Ｒｅ２
ＴＥＸＴ　ヒントは？

おいおい、いきなりかよ。もう少し考えようぜ
まっ、いいけど

Ｔｏ　一夏
ｓｕｂ　Ｒｅ３
ＴＥＸＴ　便利な物に必ず付いている機能を使えば解るぞ

そう、真実を知ることは本当に簡単なんだ。そして、真実と言うのは常に残酷なんだよ

？？？

一夏「お、よかった。売り切れはないな」

一夏の家から最寄りの自動販売機。そこで一夏は足りなくなったジュースを補給するために、缶ジュースを買っていた。
当初、主役にそんなことさせるわけにはいかない！　と言っていたが、本人の頑固さで押し切り、今に至る。

（えーと、盾無さんが缶コーヒーで箒がお茶、鈴がウーロン茶でシ

ャルがオレンジジュース、……）

全員分の飲み物を取り終えた一夏が歩き出したところで、ちょうど自販機の明かりが届かないギリギリのところに人影を見つける。

（なんだ……？）

ジュースを買いに来たには少々離れすぎていた。

かと言って、友人と言う雰囲気でもなかった

一夏が再び歩き出そうとすると、人影が一歩前に出てきた。

人影はサイレント・ゼフィルスの搭乗者であるエムだった。

一夏「ち、千冬姉……？」

エム「いや」

エムはうすら笑みを浮かべて口を開く。

エム「私はお前だ、織斑一夏」

一夏「な、なに……？」

エム「今日は世話になったな」

一夏「！？　お前、もしかしてサイレント・ゼフィルスの――」

エム「そうだ」

エムはまた一歩前へ踏み出す。

エム「そして私の名前は

織斑マドカだ」

エムは無機質な銃口を一夏に向けながら、言葉を続けた。

エム「私が私たるために……お前の命をもらう」

鈍く光を放つハンドガン。

パァンッ！　と、乾いた銃声が闇に満ちた夜空に響き渡る。

――――パキッ！　パキッ！

放たれた銃弾が二人の間に割り込んだ影により、真っ二つに切られ、自販機にめり込む。

エム「ちっ……」

一夏「……血殺か…！？」

割り込んだ影は右手にサバイバルナイフを手にした血殺だった。

血殺「……お前、何しに来た。今は待機しているはずだろ？　何故このような場に居る」

エム「…貴様に答える筋合いはない……」

血殺「答える気がないのなら去れ、今なら見逃してやる。さっさと消えなければ……殺すぞ」

その言葉には明らかに殺意が漏れていた。仲間で在ることをどうでも良いかのような

エム「……」

エムは無言でサイレント・ゼフィルスを展開し飛び去り、闇へと姿を消した。

血殺「……はぁ……」
一夏「なあ、血殺？　大丈夫か？」
血殺「あ、ああ、だ、大丈夫だ。心配なさんな」

眼帯を当てられている右目を押さえながら、血殺は一夏のほうへと、体を翻した。

血殺「一夏も大丈夫か？」
一夏「ああ、血殺のお陰で助かったぜ」
血殺「そっか、そいつは良かった」

血殺は無理に作り笑顔をする。

一夏「なあ、血殺……お前、もしかして……」
血殺「…ああ、織斑マドカのことは知っていた。かなり前からな」

もう血殺の顔には、さっきの笑顔が消えていた。何時もとは別の、新たな顔がそこにはあった。

血殺「それを知ってどうするつもりだ？　俺を殺すか？　それとも拷問？　ああ、お前はチキン野郎だから、そんな事も出来ないか」

一夏「血殺、おま――」

血殺「――『お前は一体、何を知っているんだ？』かぁ？　教えてやるわけねぇだろ。バーカ」

一夏は目の前に居る血殺の態度の変わりように、ただ呆然とするしかなかった。

血殺「あは、あははは…」

一夏「？？」

血殺「あははは。もしかして、マジで信じた？　あはは、本当に、お前はからかい甲斐があるな。本当のことを言うと、織斑マドカは昔の仕事仲間だ。ＩＳに関わる…物の…な…」

血殺は話を笑いでごまかし、言葉が濁りながら話を続けた。

血殺「…帰るぞ。……早く来い」

そう言い残し、血殺は来た道を引き返すのだった。

狂い出す歯車（後書き）

想像以上に、話が膨らまないです。

まあ、本文を書くのは、その時の気分なんで、仕方ないと思って下さい。

と、言う理由で、また次回！

Another World 零式（前書き）

ウィ～ス

テスト前だって言うのに小説を更新しているなんで正直ヤバいですよね……

んまぁ、今回から番外編みたいな感じのやつです。
正直言うと、作者の息抜きです。

では、本編スタート！

Another World 零式

俺が今まで繰り返した世界の数を言っておくと52回だ。
その全てで俺は母親を殺し、俺も何らかの死に方をしている。
大きく違うのは、専用機、男でISを使える奴、好かれる相手、俺の死に場所の四つのみ。それ以外はあまり変わらない日々だ。
変わるのもあったが、いくらやってもほとんど同じだった。

そして、これは俺の間違った選択をしてしまった時の世界の話……。

――AnotherWorld1.1――

血殺「……」

当時七歳の俺はひたすらある巨大な画面に向かいつつ、手元にあるキーボードを叩いていた。
その画面上では、ある文字が浮かんでいた。

ZEROSHIKI

俺が篠ノ之束がＩＳを生み出す前に開発した最新鋭の兵器がこの零式だった。
零式はＩＳのプロトタイプにして、俺が生み出した最新鋭のＩＳよりもスペックが上回っていた。

血殺「これで……終わるのかな？　オレの旅は……」

不意に、女の声が俺に話しかけてきた。

？？「マスター。あまり詰め込みすぎると、身体に毒ですよ。ＩＳにもマスターにも」
血殺「そんなことは分かっているつもりだ。桜こそ三日も寝ないで大丈夫なのか？」
桜「私は元々、マザーポット生まれですからそういう面では大丈夫です。それに私は……」

途中まで言いかけ、彼女はその口を閉じた。
そして、誤魔化すかのように再び口を開いた。

桜「私はマスターに救われた身ですから……」
血殺「……篠ノ之束のクローンとは言わないんだな？」
桜「……」

桜はばつの悪そうな顔をして俯いてしまう。

血殺「すまない。桜がわざわざ話を逸らしてくれたのにな……」
桜「いえ、……マスターが気にすることはありません。それに……事実ですから」

彼女たち、クローンは七歳になるまでたったの数日しかかからない。
彼女曰わく、篠ノ之束がそういう体の仕組みにしたらしい。

桜「とは言え、さっきのは流石に傷つきました。謝ってください」
血殺「いや、さっき謝った気が……」
桜「乙女のハートはそんな安っぽい謝罪じゃあ、治りません！」

いや、お前のハートは何時もダイヤモンド並みに硬いだろ。なんて言ったら殺されるかもな

血殺「じゃあ、どうすれば良いんだよ」
桜「簡単なことです。私に――――」
血殺「――――私にキスしてください。は無しだ」
桜「えぇ～」
血殺「えぇ～、じゃねぇ！　ほら、さっさと仕上げるぞ」

こいつは何かとそういうことをして欲したがる奴だ。根は良い奴なんだが、ちょっと抜け出る部分があるって言うのだろうか。直球で言うとアホだ。

桜「そう言えば、マスター」
血殺「なんだ？」
桜「マスターは何故、無人島にラボを創るのですか？」
血殺「人の目が届く所に居ると、マズいからな。敢えて無人島にしている」

桜の存在が誰かの目に入れば、ヤバい事になるのは誰にだって分かる。まだ篠ノ之束がＩＳを発明してないとはいえ、発表されてしまえば、良くない方向へ進むのは確かなんだ。
念には念を入れておくのが最適だと思う。

桜「マズいとは？」
血殺「奴は二年後にＩＳを発表するんだ。発表後に動いたら、間に合わない」
桜「それもそうですね」

直後、桜は蜜柑が入るくらいの巨大なあくびをした。

血殺「寝るか？」
桜「そうれすね。そろそろ寝るとします。マスターは？」
血殺「俺ももう寝るよ。そろそろあの時期だからね」

俺は零式を待機状態に戻し、起動中の器具の電源を落とし終えた後、部屋をあとにした。

Another World 零式（後書き）

と、言うわけで今章から十～十三章ぐらいに渡って血殺くんのアナザーワールド編です。

まあ実際、三・四ぐらいアナザーをやるんですが、自分の誕生日までにはアナザー編を終わらせたいです。

ちなみに、自分の誕生日は2月2日と、ぞろ目デイです。

それではまた次回！

憑けられたナンバー（前書き）

すいません、更新が大分遅れました。

Ａｎｏｔｈｅｒ　ｗｏｒｌｄ　1は一括更新したかったので更新が遅れましたが、かなりのスピードで取り戻そうと思ってます。

ではでは、前回のあらすじは……

零式と謂う名のＩＳに
何やら可笑しな少女・桜
その世界で血殺は何を犯してしまったのか

などなどありますが、桜は全くと言って良いほど、どうでもいいキャラ設定です。

では、本編スタート

憑けられたナンバー

朝は苦手だ。
意識がハッキリとしないのに、身体を動かさないといけないから……
だから俺は朝を捨てた。
朝のない空間、光の入らない世界、時間に捕らわれないで居られる場所。
全てが手に入る居場所がここだった。

桜「……たー……マスター！」

目を開けると、薄暗いライトを背にして桜が俺の顔を覗いていた。

血殺「……ん……な……んだ、桜か。どうかしたか？」
桜「ご飯の準備が出来ました」
血殺「四人は？」
桜「すでに帰ってきています。今はもう食事を済ませ、各自で休憩をとっています」

俺は身体を無理矢理ベッドから引き離す。

血殺「んーじゃ、さっさと食べるか」

そして、桜と共に部屋をあとにした。

テーブルに並べられた料理は焼き魚、味噌汁、白米、納豆と、珍しく和風だった。何時もなら洋風が主なんだが、四人が帰って来るから久しぶりに、と言うわけでだろうな。

俺は指定された椅子に座り、箸を手にする。

血殺「いただきます」
桜「召し上がれっ」

なにやらご機嫌が良い桜は放って置いて、俺は鯖の味醂漬けを摘み、口へ運ぶ。

血殺「美味しい……」
桜「それ、朱莉と炸夜からのお土産なんですよ?」
血殺「なんか、意外だな……」

その時、聞き覚えのある少年の声が割り込んできた。

??「意外ですいませんでしたね、マスター」
血殺「なんだ、起きてたのか、炸夜。朱莉はどうした?」

炸夜は俺の向かい側の椅子に座った。

炸夜「今は豚のようにぐーぐー寝てますよ。正直言うと、ベッドから落とされて起きてきたんですけどね」
血殺「あはは、炸夜はいつも大変だなぁ」
炸夜「いえ、個体ナンバーから言うと僕は一番下なんで我慢しないと」
桜「あら、個体ナンバーは私が一番したよ？　あなたは二番目でしょ？」

マグカップを三人分持って桜が椅子に座る。
そして、炸夜にはミルクティーが入ったマグカップ、俺には緑茶が入ったマグカップを渡す。

炸夜「個体ナンバーは一番下だけど、桜はみんなのお姉さんキャラじゃん」

炸夜が笑いながら話す。その顔は前と何も変わっていなかった。

個体ナンバーというのは、簡単に言うと生産された順番だな。今は寝ている三人が個体ナンバー一から三まで居て、炸夜は四番、桜は五番と言う順番だ。

血殺「まあ、確かに桜はしっかりしてるな。だけど、一番抜けてる部分が多いから馬鹿の分類だな」
炸夜「出た、マスターの飴と鞭。あんまり上手ではないのが特徴」
血殺「五月蝿い。これでも一応気にしてるんだぞ？」

実際、みんな頭の回転が悪いのが事実。アースの能力は頭は痛くなるからな、さらに身体がガキの状態だから余計に痛くなる。

桜「さて、私は洗い物しますか」

桜は立ち上がって俺の茶碗と皿を回収して台所の方へ歩いていく。
桜が居なくなったのを確認して炸夜が口を開いた。
炸夜「マスター……あの話なんですが……」
血殺「お前らの本体たちを狙っている奴らのことか？」
炸夜「はい……」
炸夜は言いづらそうに話を続けた。
炸夜「マスターはどうするですか？　もし、あいつらがマスターを襲うようなことがあれば……」
血殺「大丈夫。それはお前が心配することじゃないぞ？」
炸夜の頭をなだめるように撫でる。少し安心したのか、炸夜はそれ以上なにも言わなかった。
血殺「今、俺らがやるべきことはいち早く零とファーストからフィフス&フォースの機体の製作だ。余計なことはあれを完成してからにしよう」
炸夜「……分かりました。今はマスターの言葉を信じますよ」
血殺「今だけかよ」
炸夜は多分だが、俺の事を良くは想っていないと思う。炸夜だけじゃない、桜も朱莉も俺の事を憎んでても良いはずなのに何も言わない、そういう態度を一切とらないのは何故だろう……。いつの間にか、そういう風に思うことさえ忘れてしまった俺が居る。皆、俺のことを良い奴だと想っていると勝手な妄想をしてしまっていた俺は何時から居たんだろう…？

血殺「さぁて、朱莉たちの様子でも見に行くか」
炸夜「無理矢理起こすと殴られますよ」
血殺「そんなこと知ってるさ、みんな俺の子供なんだからね」

俺は椅子から降りて、朱莉が寝ている部屋へと向かった。

憑けられたナンバー（後書き）

そういえば、ＩＳの作者が旅行先で問題を起こしたため、もしかしたらＩＳが打ち切りになるって噂を耳にしましたが、あれって本当なんでしょうか？

まあ、あくまで『噂』なんで信じるかはその人次第ですがね
自分は信じますぇん、信じたくありますぇん。

だって、ラウラと簪が永久凍土ですよ！？
マジあり得ねぇねよ！

ラウラ～！　簪～！　カ～ム、バ～ック！

てなわけで
次章は明日更新します。

ではでは、また次回！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7962s/

IS(インフィニットストラトス)　返り血の眼帯

2011年12月24日03時47分発行